

オーバーロード 白い魔狼

AOSABI

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

モモンガと共に異世界に飛ばされた人狼のフエンリル、その世界には元のいた世界にはなかつた自由があつた。

未知なる世界を調査（遊ぶ）する旅に出る。
AINZ様は基本原作の行動をします。

目
次

18話	17話	16話	15.5話	15話	14話	13話	12話	11話	10話	9話	8話	7話	6話	5.5話	5話	4話	3話	2.5話	2話	1話	
151	145	130	124	117	110	102	94	89	82	74	67	63	55	50	37	32	29	20	17	12	1

1話

かつての大人気ゲーム、ユグドラシルの最終日
街では最後の時を楽しもうと人々で賑わっている。
それを誰にも見られぬよう遠くから見ている一人の真っ白な人狼
がいた。

かつてはそこそこの名の知られた7人の人狼で構成された傭兵ギルド「セブンウルブス」のリーダーで名をフェンリルという。
ユグドラシルは初めて夢中になつたゲームだった。

仲間たちとは色々な冒険をした。

PKや色々なことで悔しい思いもした。

強くなり傭兵ギルドを作つて助つ人として色々な所で戦つて感謝
もされた。

と言つても、もう仲間は全て引退してしまつて残つたのは自分一人。
だが目をつむるだけでの黄金の時を昨日の事のように思い出す
ことが出来る。

だから寂しさが募つてくる。

誰かに会いたい、最後の時を誰かと共に過ごしたい。

フェンリルがコンソールを操作しインしているフレンドにメール
を送る。

ナザリック地下大墳墓・円卓の間

豪奢な漆黒のアカデミックガウンを羽織つた骸骨であるモモンガ
とうごめく黒いスライムのヘロヘロが話をしているとメールが一通、
モモンガに届く

「どうしました?」

「メールが来たみたいですね」

メールの差出人はフレンドであるフェンリルだった。コンソール
を操作しメールを開く

「んばんわ、近くにいるのでもし良かつたらそちらに遊びに行つて

も良いですか?」

「フェンリルさんからです。こつちに遊びに来たいみたいですね」

「ああ、久しぶりに会いたいですね」

「ですね、じゃあ、来てもらいましょう」

メールに返信する。

〈こんばんわ、ぜひ遊びに来てください。お待ちしています〉

ヘロヘロが会社の愚痴をモモンガに吐き出し終わったところに

「こんばんわー」

白い体毛に覆われた大きな体に黄金の瞳に凶悪な狼の顔を持つ二足歩行をする人狼フェンリルが入ってきた。

「こんばんわー」

「こんばんわ」

ヘロヘロとモモンガが挨拶を返す、と同時にモモンガが驚いた。

「うわー! フェンリルさんその恰好、どうしたんですか! ?」

フェンリルの2mを超える巨体に装備されているのは一つを除きいずれもゴッズ級やレジエンド級アイテムで構成され、そのいで立ちは遊びに来たというよりも戦いに来たという方が合っている。

「ああ、最後だからと思つてフル装備で來たんですよ。アインズの皆さんのお力のおかげで作れたアイテムばっかりですからね」

自慢の装備に身を包んだフェンリルが胸を張る

「今なら誰が攻めてきても対処できますよ」

「ははっそうですね」

他愛もない会話にフェンリルは久しぶりに楽しい時を過ごす。

しかし楽しい時間ほどすぐに過ぎていくものでヘロヘロが眠気に負けログアウトした。

残された二人に訪れる寂しさ

「帰っちゃいましたね」

フェンリルがつぶやいた。

「リアルが忙しいなら仕方ないですよ」

モモンガは仕方ないと思いながらも心の中で最後まで一緒にいたかつたという、無念があつた。

「オレは最後まで居ますから」

フエンリルの言葉にモモンガは救われた思いだつた。

「そうだ。フエンリルさん玉座の間、まだ見たことなかつたですよね？」

「そうですね。まだ見たことないです」

何度も来たことのあるナザリックだが、いつもこの部屋で会つていた。

「じゃあ、行きましょう。最後の時はそこで過ごそうと思つていたので、そなだ私もフル装備して行こう」

そう言うとモモンガは装備を変えスタッフオブAINズウールゴウンを持ち出し、フエンリルとNPCを連れ玉座の間へと向かつた。「うわースゴイですねー」

フエンリルが驚きの声を上げる。まさに玉座の間というに相応しい豪華で荘厳な空間だつた。

その中を色々な所を見ながら歩く。

「やつぱりAINズ・ウール・ゴウンつて凝り性の人多いですね」

この部屋に来るまでの道中でフエンリルは改めて思つた。付従えているNPC一人一人をとつても設定やビジュアルが自分では作れない、いや考え付かない。

フエンリルもギルドホームを持つてゐるがナザリックと比べるのもおこがましい程の小さな山で、まして部屋の改造などもほとんどしなかつた。

「ですね、階層守護者ももつと凝つていますからねー」

セバスなどのNPCを階段前で待機させ、モモンガとフエンリルが玉座の前に到着した。

玉座の横に立つNPCをフエンリルがまじまじと見る。

「うわ、このNPCもメツチャ綺麗ですね。つて設定長つ！」

フエンリルがアルベドの設定文を見て驚く

「え? どんな設定だつたかな?」

モモンガが覚えてゐるのは、守護者統括であり、ナザリック地下大墳墓の最上位NPCということぐらいだつた。

モモンガの想像以上の長文設定、それを斜め読みし最後の一文の所
『ちなみにビッチである』

でフェンリルとモモンガの声が揃つた。

「えつ」

二人揃つてドン引きだ。

「ビッチつて、これ……」

「……たぶん罵倒の方だと思います……」

「……ですよね……」

なんとも言えない沈黙、それを破つたのはフェンリルの方だつた。
「そ！ そ、うだ！ オレも作つたの見せますよ。N P C、実はナザリック

の入り口で待機させてたんですぐに連れて来ますね！」

「あ、じやあ、これ持つて移動してください」

そう言つて出されたのは指輪だつた。

「コレは？」

リングオブアインズウールゴウン、特定箇所以外転移が不可能なナ
ザリック内において、自由に転移できる指輪だ。

「ナザリック内で転移する為のアイテムです。この部屋には直接転移
出来ないんで注意してください」

「ありがたくお借りします。では行つてきます！」

そう言い残しフェンリルは転移する為に部屋を出て行つた。

モモンガは改めてアルベドを見た。

「タブラさん……ギャップ萌えだつたつけ？ ……それにしても……
しばし考え、そして結論を出す。
変更しよう。

そうしてビッチの文言は消え、新たに入つたのは

『モモンガを愛している。』

自分で入れておきながらモモンガは恥ずかしさで悶絶した。

モモンガが悶絶している最中に、いつの間にかフェンリルが自作の
N P Cを連れ戻つてきた。

「いや～お待たせしました……つて、どうしました？」

大げさに驚くモモンガにフェンリルが首を傾げた。

「いえ！なんでもないです！あつ！その子がですか！」

大きな声を出すモモンガに少し驚いたがフエンリルが自作のNPCを紹介する。通称おともNPCと呼ばれる外にも連れていけるNPCだ。100レベルまで成長するがペナルティとしてアルベドなどの拠点NPCと比べて90レベルまでの能力しか持つことが出来ない。

「そうです。いや＼作るのに一か月位掛かつたんですよ。課金もしましたしね♪」

ネルと名付けられた見た目は長い銀髪のダークエルフ、紅い瞳に整った顔立ち、スラリと伸びた長い手足にグラマラスな身体を強調する胸元と背中が大きく開いたただの黒いドレスに見えるが実は高い防御を誇るレジエンンド級アイテムの逸品である。一見すれば18禁に抵触するのではないかと思う、上品に言つてセクシー、下品に言えば痴女、運営仕事しようとでも言いたいところだ。

「フエンリルさんも凝つてるじやないですか♪」

「ええ、自分の欲望100%ぶち込みましたからね。理想の嫁？みたいな感じです」

フエンリルとモモンガが理想の嫁話に花が咲く

ふと時間を見るとサービス終了まで3分を切っていた。

「もうすぐ終わっちゃいますね」

「そうですね・・・」

「モモンガさんのおかげで最後に良い思い出ができました」

「そんな、フエンリルさん、私もですよ」

沈黙、どちらかともなく天井を見上げる二人に思い浮かぶのは輝かしい時間

それが今失われる。

なんと悔しく、不快なことか

終了まで1分を切つた。

二人目を閉じ心の中でカウントダウンを始める。

幻想の終わり、そして3・2・1、ブラツクアウト・・・そのままログアウトするはずだった。

「「ん?」」

二人が目を開くとそこはまだ玉座の間だつた。

フエンリルが隣を見ればモモンガがいる。モモンガもフエンリルを見るがお互い困惑している。

「まさかサーバーダウンが延期になつた?」

とモモンガ

「そんな連絡来てないですよね?」

だがフエンリルもモモンガも、コンソールが浮かび上がらない、他の手段をと思い他の機能を呼び出すがどれも機能しない。

「どうかなさいましたか? モモンガさま?」

初めて聞く綺麗な女性の声、それはNPCであるアルベドのものであつた。

「マスター? どうしました?」

甘く艶のあるその声は、こちらもNPCであるネルのものだつた。

モモンガもフエンリルも驚く

「失礼いたします」

モモンガにアルベドが近づき、そしてモモンガの鼻腔を甘い香りがくすぐる。

フエンリルは人狼という種族だからなのかモモンガよりも様々においが鼻腔を襲つていた。

モモンガとフエンリルに違和感が襲う。

「・・・GMコールが利かないようだ」

モモンガがアルベドの潤んだ瞳に吸い込まれ、ついNPCに相談してしまう。

答えなど返つてくるはず等なのに、だが

「・・・お許しを、無知な私ではモモンガ様の問い合わせあられる、GMコールというものに関してお答えできません、この失態を払拭する機会をいただけるのであれば、これに勝る喜びはございません、何なりとご命令を」

答えが返つてきた。つまり会話をしているのだ。
ありえない。

だが驚いているはずなのにモモンガの頭の中はクリアになつていく。

そしてセバスを呼び、周辺地理を確認の命令を。プレアデスには九階層に上がり、八階層からの侵入者が来ないか警戒に当たらせる。

「モモンガさん・・・ちょっといいですか？」

「フェンリルさん？」

促されるようにアルベドとネルから離れる。

「モモンガさん、この状況どう思いますか？」

「・・・正直、困惑しています。においを感じるし、そしてNPCと会話している」

「これってユグドラシルⅡってわけじゃないですよね？だとするとこれ電子誘拐つてことになりますけど」

「いやさすがにそれは無いかと・・・」

「ですよね？だとすると・・・」

「つて！フェンリルさん！・・・口が動いてます・・・」

口が動く？まさかそんなことはありえないと思い、フェンリルが自分の口に手を当てるとき呼吸をしている。自分の声を発すると、口が動いている。

「ま・・・さか・・・」

フェンリルはそんなはずはないと思いながらネルの方を見ると、ネルは微笑みを返してくれた。表情が変わったのだ。自分の心臓が一つ高鳴つた気がする。

「モモンガさん、オレの脈を診てもらつてもいいですか？」

「そう言つて左腕を差し出す。

「・・・はい」

モモンガが左腕を触ると同時にフェンリルに軽い電気の様なものが走つた。

「うわ！」

「あ！すいません、ネガティブタツチの解除忘れてました」

「大丈夫です。解除してもう一回お願ひします」

モモンガが解除の仕方に思案すると、唐突にその切り方を悟る。

死の支配者として保有している能力の行使がまるで人が呼吸をするのと同じように自然に使用できる能力になつていていた。

「触りますよ」

触つたことなどないが犬を触るところいう感じなのかな？などと思ひながら脈を探す

「……どう……ですか？」

ある。

トクントクンと生物なら当然の鼓動がある。

「あります……脈が……」

という事はフエンリルはデータなどではなく生物として目の前にいることになる。

「そんな……」

いや、まだだ、まだ最後に調べていないことがある。

「……モモンガさん、童貞ですか？」

突然の質問にモモンガの目が点になる。

「え？」

「ハツキリ言います。オレは童貞です」

「あ、はい、私もです」

あつけにとられて答えてしまつた。

「じゃあ、一緒に調べましよう。18禁に触れるような事は出来ないはずなので、オレはネルの胸に触つてみます。だからモモンガさんはアルベドの胸を触つてみてください」

モモンガはドン引きだ。

「え、それはちょっと……」

「お願ひしますよ！オレ一人は厳しいですよ！せめて一緒なら何となく行けそうな気がするんですよ！」

フエンリルのこの必死さは童貞ゆえなのだろうか？とモモンガは思うが確かに18禁に抵触する行為をすれば何らかのアクションがある、そんな感じもする。

「……分かりました……一緒にやりましょう」

フエンリルがモモンガの手を握る。

「ありがとうございます！モモンガさん！」

フエンリルのフサフサとした長い尻尾がぶんぶんと音立てて振られる。

そしてモモンガはアルベドの前に、フエンリルはネルの前に立つ。傍から見れば美女に襲い掛かろうとするモンスターの構図だ。

「む、胸を触つても構わないな」

「え？」

空気が凍つたようだつた。

アルベドとネルは目をぱちくりしている。

モモンガ達は悶絶したい気分だつた。とくにフエンリルは自分の言い出したことであるからモモンガに申し訳ないとも思つてている。だがこれは仕方がないことなんだと強く思うことで平静を装う。

「構わりにや・・・ないな」

二人揃つてダメだつた。

だがアルベドは花が咲いたような輝きを持つて、微笑みかける。

「もちろんです、モモンガ様、どうぞお好きにしてください」

アルベドがぐつと胸を張る、豊かな双胸がモモンガの前につき出された。

「では私も、マスターどうぞ」

ネルが蠱惑的な笑みを浮かべて胸を張る。こちらもアルベドに負けず劣らずの豊かな胸をしている。

モモンガとフエンリルはお互いを見てわずかに頷き、意を決し手を伸ばす。

柔らかいものが形を変えるのが二人の手に伝わる。

「ふわあ・・・あ・・・」

濡れたような声がアルベドとネルから漏れる中、モモンガとフエンリルは実験を終了させた。

警告が出てくるはずの行為を行つてゐるのにそれが出てこない。仮想現実が現実になつた。

受け入れ難い事ではあるが、こうなつてしまつては受け入れるしか

ない。

よくよく考えてみると、モモンガにとつてはそう悪いことでは無いようと思えてくる、家族も恋人もなく、ユグドラシル以外の趣味もなく、家と会社を往復する毎日……。

等とモモンガが考えていると

「……モ……ガ……ン……モモンガさん！」

フェンリルの言葉で現実に戻される。

「はっ、何ですか？」

「いや、モモンガさん、胸揉みすぎっす」

そう言われ自分の手がまだアルベドの胸を揉んでいることに気付いた。

「ア、アルベド、すまなかつたな」

「ふわあ……」

頬を完全に赤く染め、アルベドが体内の熱を感じさせのような、息を吐き出す。

「ここ」で私は初めてを迎えるのですね？」

「……え？」

モモンガは言葉の意味を一瞬、理解できなかつた。
「服はどういたしましようか？」

「……？」

「自分で脱いだ方がよろしいでしようか？ それともモモンガ様が？、着たままであるの……汚れて……いえ、モモンガ様がそれが良いと仰るのであれば、私に異論はありませんが」

アルベドは完全に暴走していた。フェンリル達が目に入らぬほど

に

「ちよつ、まつ！ よ、よすのだアルベド」

「は？ 畏まりました」

「今はそのような……いや、そういうことをしている時間はない」

「も、申し訳ありません！ 何らかの緊急事態だというのに、己が欲望を優先させてしまい」

飛び退くと、アルベドはひれ伏そうとする、それをモモンガは手で

抑える。

「よい。諸悪の根源は私である、お前のすべてを許そう、アルベド。それよりは・・・お前に命じたいことがある」

モモンガがアルベドに命令を下し、少し早足でアルベドは玉座の間を後にした。

2話

「あれはつまらない冗談だつたのに……こんなことになると知つたら、あんなことはしなかつた。俺は……タブラさんの作ったN P Cを汚してしまつたのか……」

アルベドが去つた後、モモンガは落ち込んだように呻きを上げる。
「どうしたんですか？」

顔を上げるとフエンリルが心配そうに見ていた。
「……実は……アルベドの設定を少し弄つてしまつて……だから、あんな性格に……」

きっと自分が『モモンガを愛している』なんて付け加えてしまつたから、アルベドはあんな変な性格になつてしまつたんだと、モモンガは心の底から後悔の感情が押し寄せるが、その度に感情が抑制されてしまう。

「仕方ないですよ。まさかこんなことになるなんて誰も予想付かないんですから、今はそのどうにもならない問題よりも、これからどうするかですよ」

「これから？」

「そうですよ。モモンガさんはナザリックのことがあるじゃないですか」

そうだ。今しなくてはならないことは山のようにある。

身の安全の確保、N P Cが味方であるのか、ナザリック内の設備、ゴーレム、アイテム、魔法……それらが機能するかの確認はモモンガ、ひいてはフエンリルの生存に関わる急務だ。

それからの行動は早かつた。

まずはフエンリルとネルの安全の確保をしてからモモンガは分かれ、しなくてはいけないことを一つずつ行つていく。

「成功だ……」

モモンガの確認の結果、設備とゴーレムに問題はなかつた。そして今使用したリングオブAINズウールゴウンでの転移も問題なく行われた。

その足で円形闘技場へと向かう、アルベドへと命令した時間までまだ余裕はある。

9階層ロイヤルスイートの一室

フエンリルとネルは何があるか分からないというモモンガとの話し合いの結果、ひとまず安全を確認したこの部屋へと隠れることにした。

だがただ隠れるだけではなく、フエンリルにもやることはある。厳選に厳選を重ねたアイテムの入った無限の背負い袋からアイテムが取り出せるのか、自分のスキルが発動できるのか、などモモンガが戻つてくるまでやることはある。

最悪の場合は自らの力でナザリックから脱出しなければならない。フエンリルはまず人ではなくた自分の身体の確認から始めた。全身をほぐす様に準備運動、リアルの時に趣味として見ていた格闘技や武道の映像を思い出しながら型の動き、そして蹴りや突きなどの基本動作をして気づいたことがある。

この身体になつてまだ一時間ほどしか経っていないはずなのに、まるで生まれた時からそうであつたかのように何もかもが自然に動く、尻尾や伸縮自在の爪、人間よりも遙かに優れた感覚の全てが思うがままだ。

身体の確認を済ませたところでネルがずっと見ていることに気付く

「どうした？」

「見惚れていました」とネルが微笑む、それが似合う

「ネルは俺をどう思っている？」

「愛しております。マスターの全てを」何の迷いも淀みもなくネルが

言う

「そ、ですか、ありがとうございます」愛の言葉と真っ直ぐ見つめるネルの濡れた瞳に恥ずかしさがフエンリルを支配する。

それを見て微笑むネル、フエンリルの理想の全てをつぎ込んだとはい、その妖艶さにもしやチャームでもかけられているのではと思つ

てしまう。

ぶんぶんと頭を振り気持ちを切り替え、改めてスキルを試すことにする。部屋の中で影響の出ないスキルとなると

「・・・ふう、人化を試してみるか・・・」

今装備しているアイテムはモンスター種専用の装備品、ユグドラシリなら解除されて所持アイテムとしてアイテムバックに戻されるが、ゲームが現実となつた今はどう処理されるのが分からぬ為、すべて自分の手で外し机の上に並べて置いていく

装備品をすべて外し終え、さてどうやつて発動するのかと少し考えると、頭の中にこうすればいいという答えが自然と出てきた。

この当たり前に導き出される答えをやはり不思議だと思いながらも人化のスキルを発動させる。

「お？・おお？」不思議な光が出たり、煙が出るという事は無かつた。全身を覆つっていた白い体毛は無くなり、手足を見るといつも見慣れた人間の身体になつている。大きな姿見の前に移動し見ると

「おゝ、これが・・・ってなんだこりやあああ！」フエンリルが自分の姿を見て絶叫した。

守護者の忠誠の儀を終え、守護者やナザリック内のNPCが味方である事が分かり安堵するのと代わりに自身への評価が高すぎるという新しい頭痛の種を仕入れたモモンガがフエンリル達が隠れている部屋の前に転移する。

ドアをノックする。だが中から返事がない、もう一度ノックするがやはり応答がない、まさかと思い慌ててドアを開けるとそこにフエンリルの姿がなかつた。

居るのは天蓋付きのベッドの上に・・・

「はあはあ、大丈夫です。マスターは何もしなくていいですから、私がマスターをめくるめく快樂の世界へ・・・」

異常に興奮しているネル、その下に14・5歳位の銀髪の少年、それも全裸だ。

「・・・え？」モモンガがぽかんとしていると銀髪の全裸少年が
「モモンガさん！助けて！」助けを求めている。

「え？まさかフェンリルさん？」

「そうです！ほら！離れるんだ！」

「・・・はい・・・」しぶしぶ、本当に名残惜しそうにネルが離れる。

フェンリルの貞操の危機は免れた。まさか格闘職を取得しているのに組み敷かれるとは思わなかつた。

全裸のままではまずいと思い、何か身を包むものは無いかと周囲を見ていると

「これを使つてください」それに気づいたモモンガがマントを手渡してくれた。

「いいんですか？何かのレアアイテムなんじや？」

「大丈夫です。たまたま持つてたレア度の低いアイテムなので、それに裸のままでは……」モモンガがちらりとネルの方に視線を移す。それに釣られる様にフェンリルも見ると静かに興奮しているネルがいる。

「・・・ありがとうございます」受け取ると立ち上がりマントで身を包む

「それでその姿はどうしたんですか？」

「実はスキルとかの確認をしていたんですけど、人化スキルを発動したらこうなつてしまつて」

「人化？どんなスキルなんですか？」

「簡単に言うと人間になるスキルです。発動中は自分の全ステータス30%ダウンしますが、ステータス上もヒューマンと表示されるのになかなか見破られないって特徴があります」

自らの全ステータスダウンと引き換えに人に化けるのか、微妙かなとモモンガは思つた。

「もしかしたら30%ダウンで、身長も下がつたんじゃないですか？」

全ステータスという事で外見にも作用したのではとモモンガは推察する。フェンリルの元の身長が2m少し、その30%ダウンということは今の身長は140～160の間といったところか

その推察にフェンリルが頷く

「そうかもしませんね。でもこの外見、オレに少しも似てないんですね。そもそも日本人なのに何でヨーロッパ系の顔立ちなんですかねえ？」

フェンリルはそう言いながら鏡で自分の顔を見る。小さな頭、絹糸のようなサラサラの銀髪、長いまつ毛に深い海の様な青い瞳、元の自分とは比べ物にならない位に整った顔立ちは少女のようでもある。体つきも筋肉で構成されていたような荒々しくも引き締まつた人狼の時に比べると、筋肉で引き締まつているとはいえ、だいぶ細くファッシュションモデルかのような身体になつていて。

「さすがにそこまでは分からないですけど……それ元に戻れるんですか？」

ゲームならコマンド一つで戻れたが、現実の今なら考えるだけで戻れるはずだ。

「大丈夫なはずです。いきますよ」

強く戻れと念じると、人化の時は違う身体にゾワリとした感覚が走る。

銀の絹糸のようだつた髪は逆立ち、見開かれた深い海を思わせた青い瞳は爛々と光る金色に変わる。体内で急速に創り返られていく骨格、同じ速度で膨れ上がる筋肉、耳まで裂ける口に並んでいた歯は牙に代わり、尻尾が生え、全身が白い体毛で覆われると、モモンガが知っているフェンリルの姿に戻つた。

「おお～」モモンガはまるでホラー映画のワンシーンでも見てる気分だつた。

「どうです。戻れたでしょ？」

「カッコいいですね～」

「やつぱり変身つていですよね～」

などと二人で盛り上がつてゐるのをネルは心底残念そうに見ていた。フェンリルを愛しているが人化したときの愛らしさはそれ以上のモノがある。もう一度、人化をしてもらおう。今度は誰にも邪魔の入らないところでそう心の底で強く思うネルだつた。

2. 5話 幕間

フェンリルがネルを隣接したドレスルームでの待機をさせ、部屋には二人だけになつた。

「モモンガさんどうだつたんですか？無事に帰つてきたという事は味方だつたようですね」

「それは良かつたんですけど、守護者達の自分に対する評価が異常に高くなつて・・・」モモンガがため息をつく

モモンガを表現するのに『いと高き』とか『至高の』とか、本人はいつたい誰のことを言つているのだろうとすら思つていた。

「あ～それは苦労しそうですね。ご愁傷さまです」

手を合わせて挙むフェンリル

「もうそれよりも、まず報告ですね。スキルは使えたみたいですから問題ないですね。あと魔法も普通に使えました。あと色々あります。がそれは実際にやつてもらうしかないんですけど」魔法を使う感覚などは実際にやつてもらうしかない。

「それとナザリックの外の事なんですねけど」

「沼地のはずですよね」

「いえ、どうやら草原のようです。何の変哲もない草原」

「草原？じゃあ本当に・・・」

「そうです。外は夜だつたようなのでそこまで詳しく述べてはいませんがどこかに転移したと考えるべきでしょ？」

「あとは、フェンリルさん達を紹介するタイミングですよね」

「モモンガさんの話を聞く限りだとNPCは絶対的な忠誠を誓つているはずですが、ギルメンでもないオレにどうでるかですね。下手すると敵認定されて殺されるなんてこともありますからね」

「それは・・・ないとは言えない。」

「でも、ネルを見るにどうでもないのか？」今のところネルはモモンガに對して敵意などは向けていない。だがそれが他のNPC全てに言えるわけではない。

モモンガとフェンリルが腕を組み「うん」と悩む。まだまだ分か

らないうことが多すぎる。

と、フエンリルの腹が鳴つた。

「腹減るんすね・・・どーしよ」

リアルだつたら冷蔵庫に入つて いるものでも適当に食べるのだが
「フエンリルさん 飲食不要アイテム付けてないんですか?」

「あれ、結構なレアアイテムじやないですか、それに今の装備構成だと
装備スロット空いてないんですね」

「あ〜ガチ構成ですか、じやあ仕方ないですよ〜、私も泣く泣く外し
たアイテムとかありますし」

「う〜ん・・・あつそりいえば・・・」何かを思い出したようにフエン
リルがアイテムバックを漁る。

「あつたあつた」そこから出てきたのは、剥き出しの何も加工されてい
ない大きな骨付き生肉の塊、特別な効果もないただのユグドラシルの
食材アイテムの一つだ。

「スゲー何だこれ」フエンリルもモモンガも自分の頭よりも大きな生
肉の塊など初めて見る。リアルだと料理として加工されたものを食
べることしかしていなかつた。

「うわ、何かシユールですね」

ただ気になるのはアイテムバック内でどのように保存されていた
かだ。見た目は新鮮そのものだが

「食べられるのか?見た目は大丈夫そうだし・・・においは・・・腐つ
た感じもない。あとはこれをどう料理するかだけど・・・」

モモンガを見てみるが首を横に振る

「料理スキルは持つてませんよ」

「ですよね。オレも料理スキルなんて持つてないし・・・いや、いつそ
このまま食べてみるか・・・」

人間の体なら問題だろうが、人狼となつたこの身体ならおそらく問
題はないはず、

「あ〜〜むつ」口を大きく開け生肉の塊にがぶりと噛り付く。

「どうですか?」表情は変わらないが心配そうな声をかける。

口の中に広がる野性味溢れる獣と血の匂いに嫌な感じは無い、むし

ろこの匂いに唾液と食欲が出てくる。乱暴に食い千切り租借すると噛むごとにいっぱいに広がる肉と血の味は今まで食べてきた全てが霞むほどの美味さだ。咀嚼しミンチになつた肉をぐくりと飲み込む。

「美味しいですよ、これ」

「え、本当にですか？」何の処理も味付けもされていない生肉が美味しいなどと聞いたことがない。モモンガの今の身体では食事を取ることなど出来ないが

「リアルだと合成食とか食べてたじやないですか？」

「ええ」たしかにと頷く、コンビニ弁当をイメージして話すフエンリルだが、食事に興味の無かつたモモンガは味の付いた液状食料を思い浮かべる。

「それとは比べ物にならない位、美味しいです。というより本物の肉つて感じ、いやちゃんと食事をしているつて感じですかね」うまく伝えられない自分の語彙の少なさが嫌になる。

「食べられるのなら良かつたですね」

「ですね。とりあえずこれを食べ終わつたら作戦会議といきましょう」

玉座の間

玉座にはモモンガ、アルベドをはじめとする守護者達は階段の下で跪き、主の言葉を待つている。

「面を上げよ。皆、忙しいところに申し訳ないな」

主の謝罪にデミウルゴスが答える。

「モモンガ様のご命令以上に重要なことなど他にございません。いつたい御用というのはどのような事でございましょうか」

「用というのは、お前達に我が友を紹介しようと思つてな」

アルベドが質問する。

「友? でございますか? 至高の御方々以外の方でしようか?」

「そうだ。幾度となく我がナザリックと共に戦つてくれた歴戦の勇者だ」

「歴戦ノ勇者トハ」

コキュートスが歴戦の勇者という言葉に反応する。

「紹介しよう、我が友である。フエンリルとその従者であるネルだ」

モモンガが右手を軽く上げると、玉座の後ろのカーテンに隠れていた人狼とその後ろにダークエルフが付き従いモモンガの斜め前に出てくる。

「高い所から失礼する初めまして守護者の方々、私がフエンリルでこつちが——」

「ネルと申します。以後お見知りおきを」

深く頭を下げ挨拶するネル

フエンリルが守護者達へ語り掛ける。

「私は諸君らに、諸君らが敬愛するモモンガさんやそれぞれの生みの親であるメンバーの方々と同じ様な待遇を求めるわけではない、それは諸君らの敬愛を侮辱する行為であると私は思つていてるし、その事で諸君らの曇りない忠誠の心をわざかでも曇らせたくない、ゆえにただ私がモモンガさんの友であるだけは認めてほしい。だがそれをただ認める出来ない者もいるだろう、友として敬愛する主の傍

にいるに値する者なのだろうかと、それを私の力を示すことでそれを認めてほしい、私はモモンガさんの様な知略を持てぬ戦での先駆けを旨とする不器用な男だ。このような方法で示すことしかできない事を謝罪する。だがその力をもつてモモンガさんの友としての証明としたいと私は考える」

言葉の裏を考える者、どう反応して良いか分からぬ者、実力をはからうとする者、守護者の反応は様々だがとりあえず敵意は感じない。

フエンリルがモモンガの方を振り向くと、骸骨の頭が傾いた。

「私はこれを是とする。そしてこの戦いを受けるに値する者としてコキュートス、私はお前が適役であると確信している。同じ武人であるお前こそがフエンリルさんの思いを曇りなく受けることが出来ると、どうだ？やつてくれるか？」

指名されたコキュートスは少々驚いたが強者と闘えるという思ひが勝つた。

「有り難キオ言葉、ソノ大役謹ンデ御受ケイタシマス」

指名を受け入れたことにモモンガとフエンリルは安堵する。

「そうか、受けてくれるか、では試合は明日行うとする。以上だ」

玉座の間での紹介の少し前、フエンリルの自室

「計画って、それしかありませんか？」

提案された計画に骸骨の表情は変わらないがモモンガは心配している。フエンリルは頭を搔き、自ら立てた計画とはいえ複雑な顔をする。

普通に紹介しようという提案をモモンガはしたが、フエンリルが友と紹介される以上は実力を示さなければならぬと言ひ計画を提案してきたのだ。

「いや、まあ、それしかなかなつて、守護者達の話を聞く限りだと忠誠度がメチャメチャ高いじゃないですか？」

「そうですよ」

忠誠度が高すぎてアンデッドの身体には無いはずの胃がキリキリと痛むという、モモンガのある意味では最大の悩みの種の一つになつ

ている。

「で、モモンガさんが認めろつて言つたらきつと従いますよ。表向きは、でも心の中ではどう思つているか分からぬ、不満かもしけないし、この状況でいらない不和を呼ぶのは避けたいんです。なら自分の力で示すしかないかなと思いまして、で、その役目は武人という設定のあるコキュートスが適任だと思います。アルベドやデミウルゴスは策を弄するキャラだし、その点でいうならコキュートスこそが刃を交えてうんぬんという事で一番認めてくれるかなと、いずれにしてもすぐ信用はされるはずはないので、そこはまあ気長にやつていくしかないんですけど、まずはコキュートスに認めてもらう事を勝ち取ることが一番です」

その説明にふむと頷くモモンガ、たしかに命令でいう事を聞かせるなんてブラック会社どころか恐怖政治もいいところだ。守護者の望む支配者を目指そうというモモンガの理想とは違う。

「たしかにそれならコキュートスが向いてますね」

フエンリルは言わなかつたが、守護者達はきっと自分が主であるモモンガに悪意を持つて近づいてきたのか、または悪影響を及ぼさないか調べてくるはずだ。主を思つての忠義の暴走は主の望まぬ事をする恐れだつてある。

「それとですね——」

翌日、円形闘技場

中央で対峙するフエンリルとコキュートス、観客席にはN P C達、貴賓席にはモモンガと守護者達が今か今かと開始の時を待つっていた。「これより我が友であるフエンリルと守護者代表であるコキュートスとの試合を行う！両者とも準備は良いか？」

頷くフエンリル、その装備は大罪装備と名付けた白と金に彩られた手甲・胸当て・脚甲、腰には血に塗れた様な腰布を巻いている。いずれもゴッズ級アイテムの逸品だ。

同じく頷くコキュートス、その手に握られているのはゴッズ級アイテムの大太刀、斬神皇刀のみ、だがこれは決してフエンリルを侮つて

いるわけではない人狼の種族としてスピードに優れているからこそ、自身の持つ武器の中で最も早さと鋭利を持つ武器にしたのだ。

「まずは私の我がままに付き合つてもらうことに謝辞を言わせてもらう。ありがとうコキュートス」

「謝辞ナド不要デス、私モ歴戦ノ勇者ト聞キ、手合ワセヲ願イタカツタ」

「もはや言葉は不要か、その意気や良し」

「——始めっ!!」モモンガが開始を告げた。

張り詰める空気の中、睨み合う両者、どちらとも動かない。

『これが本当の闘いか』

ゲームでは感じれない本物の闘いの空気、コキュートスから飛んてくる殺氣とも言えるものが銃から放たれる弾丸のように身体に打ち付けてくる。常人なら気を失う程の空気だがそんな気はしない、それどころか心の奥底から湧き上がる闘争本能に笑みがこぼれるほど気分が高揚してくる。

ナイフのような牙を剥き出しの凶悪な笑みは見るモノを凍てつかせる

『コレ程ノモノトハ』

コキュートスも凶悪な笑みを浮かべるフエンリルの底知れぬ力をわかっている。

先に動いたのはフエンリルだつた。クラウチングスタートの姿勢を取り、ドツ！という音と共にフエンリルの居た場所がまるで爆発したように大きな土煙に覆われた。後に残つたのは大きく抉られた土ガギィイ

金属のぶつかる音、コキュートスがフエンリルの右正拳を斬神皇刀で受け止める。

「これに反応して防御するとは、流石だ」

などと言つてはみたがフエンリルに奇妙な違和感があつた。『何だこれ？俺の動き速過ぎないか？』実戦だからなのか、それでも想定していた自分の動きが速過ぎる。

「何ノコレシキ、ムンツ！」

斬神皇刀にはじかれる様に後ろに飛ぶフェンリル、着地したのは間合いギリギリ、まさにそこが死線、あと半歩でも動けばコキュートスの剣が目にも止まらぬ速さで飛んでくる。再度突撃するのではなくフェンリルが足を肩まで広げ腰を沈め、まるで銃の早打ちのような構えを取る

「いくぞ」

フェンリルの両拳から何かが放たれた。

「クツ」

飛んできた無数の何かをコキュートスが斬神皇刀で全てはじき返す。フェンリルの装備に飛び道具はない、ならば魔法かと疑うが発動までの時間が短すぎる。

一番にそれに気づいたのはセバスだった。

「あれは……」

「何か気付いたのか？」

主の問いにセバスが答える。

「はっ！あれはおそらく〈遠当て〉と思われます」

「〈遠当て〉？何かのスキルか？」

「私の修めているガイキマスターのスキルで気を砲弾のように放つものでございます」

だが同じガイキマスターを取得しているのに速度が桁違いだ。セバスの〈遠当て〉をプロの投手が投げる剛速球とするならフェンリルのは銃弾だ。

フェンリルのモノは相手へのけん制を目的としている為、グラップラーのスキル〈体術〉や他のスキル、装備によつて威力を半分まで落とす代わりに溜めをほぼゼロまで短縮し極限まで速度を追及し散弾銃のように無数に放つコンボスキル〈ショットガンファイスト〉

フェンリルの両手から放たれる〈遠当て〉の威力は決して脅威ではないが暴雨の如く襲うナザリック一の攻撃速度を持つコキュートスを圧倒する程の速度が恐ろしいまでの効果を發揮していた。

コキュートスの技量を持つてすれば威力の低い攻撃などダメージを無視して攻撃できるのだが、攻撃をしようする僅かな動作に反応し

て威力が込められた攻撃が飛んできて阻害される。

この緩急織り交ぜた攻撃に翻弄されていたがコキュートスの歩みは止まらずじりじりと間合いを詰めていく

『・・・スタンが取れないな』

「ショットガンファイスト」に混せて状態異常・気絶を付与する「スタンファイスト」を何度も打つているが付与される気配がない。

『やつぱり、状態異常対策はしてるか・・・そうなると・・・』

飛び下がり距離を取るフエンリル、コキユートスを睨み、拳を鳴らす。

「小手先の遊びでは児戯にもならぬか・・・今一度参る！」

身を最大限まで低くして音速での突進、間合いに入った瞬間、斬神皇刀がフエンリルを一刀両断しようと振られるが、間一髪、背中の毛先を刈られるだけで何とか回避した。一瞬でも遅れていたら首が落ちていたところだ。

「コレヲカワストワ、流石ダ！」

『殺る気満々かよつ！』

襲ってきた斬撃の速さと鋭さに毒づく、おかげで攻撃することもできなかつた。

互いの間合いの中で上下左右立体的に繰り出されるフエンリルの神速の突撃を迎え撃つコキユートスの神速の斬撃

ガキン、ガキン

と火花を散らしながら何度も交わされる攻防、そしてフェイントによつてコキユートスが大振りになつた瞬間

『シマツタ！』

フエンリルが消えた。「転移」の移動距離を犠牲にMPの消費と発動時間を抑えた移動距離僅か数mの超短距離の瞬間移動「縮地」を発動させ、瞬時にコキユートスの懷に移動したのだ。「コノ体勢ハマズイ！」胴ががら空きになつてゐる。防御も間に合わない。攻撃をもう覺悟を決め腹部に力を籠める。「貫つた！」そこに破壊力に特化した「マグナムファイスト」を打ち込む。

「グハッ」

腹部の甲殻装甲が大きくひび割れ深々と穿たれたフェンリルの右拳、だが「マグナムファイスト」の反動で動けなくなつたところにすぐさま反撃が返つてくる。

「〈ピアーシング・アイシクル／穿つ氷弾〉」

「かはつ」

無数の氷弾が無防備な身体に突き刺さりその激痛に顔を歪める。反動が解けた瞬間に下がり間合いの外に避難する。

『超いてえー!! 血がこんなに出てるよ!』

死すら意識する無数の傷に体の半分を染めるほどの大量の出血、だが血はもう止まり傷が塞がり始め、それと同時に強烈なまでの痛みはもうなくなつていた。

種族スキルの「再生」が発動している。ゲーム内ではHPの自動回復だったがこっちの世界では

『・・・グロい』

それが感想だつた。傷ついた箇所の肉が盛り上がり塞がっていく、まるでB級ホラー映画の特殊効果でも見ているかのようだつた。

そして気付いた事がある。それは今が満月の夜であるという事、「再生」は満月の夜にのみ発動するスキルでさらに人狼は全ステータスが30%upする。地下にある円形闘技場だが効果が発揮されていることに驚く

違和感の正体はこれだつたのかとフェンリルは納得した。

『何トイウ一撃ダ。甲殻装甲ヲ碎カレルトハ』割れた甲殻装甲の間から緑色の血が滲んでくる。

コキユートスが血を流すほどの闘いはナザリックに連合ギルドによつて侵入を許した時以来だ。

『心ガ踊ル、コレ程ノ強者ト闘ツテ死ンダトシテモ本望ダ』

再び近距離戦闘を開始する。先程よりも苛烈な一進一退の攻防だがコキユートスとフェンリルの間に流れる空気が変わつたように思えた。

戦闘特有の冷たくも熱い刺すような空気が山の澄んだ空気のようなものに変わり、一人の攻防は徐々にまるで舞い踊るように美しい剣

舞のようになつていく

それをモモンガはほうと息を飲む。

『カツコいいなー何かゲームのPVみたいだ。それに・・・』

楽しそうだ。コキュートスの表情は読めないがそれでも楽しそうに見える。武を修めている者同士何か通じるものがあるのだろうか、モモンガはマジックキヤスターなので分からぬが

両者が距離を取り仕切り直そうとした瞬間、フエンリルの纏う空気が一変する。

『楽しい・・・なんて楽しいんだ・・・だから・・・殺してしまいたい・・・』
気分が高揚すればする程、相手を壊してしまいたい破壊衝動と、この爪で引き裂いてしまいたいという欲望が疼く、疼きに反応するように目の前が赤く染まり視界が狭くなつていく

まるで違う自分に意識を乗っ取られていくような感覚
・・・殺しても・・・いいよな・・・殺して・・・しまおう・・・

まずい、これは

『モモンガさん!!』

フエンリルとコキュートスの間にファイヤーボールが撃ち込まれる。爆発に巻き上がる土煙、両者が魔法を撃つた者を見た。

貴賓席で立ち上がっているナザリックの主にして死の王が黒い靄の様な絶望のオーラを放ちながら

「双方そこまでだ！」

骸骨の眼に紅い炎が強く燃え上がつている。

不測の事態に備えてフエンリルとの打ち合わせ通りに繋いでいた「メッセージ」のおかげでいち素早く行動出来た。何とかフエンリルの緊急事態に対処することが出来た。

『大丈夫ですか!? フエンリルさん!』

『・・・助かりました・・・あと少しで・・・〈滅獣化〉 しそうになつてました・・・』

発動するはずのないスキルが発動しそうになつたという事がモモンガとフエンリルのこの世界の謎を一層深めた

「これ以上はどちらかが死ぬまで闘うと判断した為止めさせてもら

う。見事な戦いぶりであったコキュートスよ、刃を交えてどうであつた?」

モモンガがコキュートスへ問う。内心では認めてくれと祈りながら

「確力ナ実力ヲ見マシタ。私ハモモンガ様ノ友デアル、フエンリル様ヲ信頼ニ値スル者デアルト認メマス」

心の中でガツツポーズをする。計画が上手くいった。いやそれ以上だ。信頼するといつてくれたのだ。

「そうか、我が友を認めてくれたか。守護者達よ、まだ信頼に値せずと思う者もいるだろう。私もフエンリルさんもそれを当然だと思つて信頼するというのは時間が掛かるものだ。だがそれを私は責める事はしない、命令ではなく守護者自身によつて信頼して欲しいからだ。コキユートスは自ら刃を交える事で友であることを認めてくれた。諸君もそれぞれの方法でしていつてほしい」

恭しく受け止める守護者達

「ありがとうございますコキユートス、君に認められたことを誇りに思う」

「コチラコソ、貴方ト鬪エタ事ニ感謝シマス」

フエンリルとコキュートスが固く握手をする。作戦通りコキュートスの信頼を勝ち取ることが出来た。

3・5話 幕間

モモンガ自室

メイドや護衛を全て追い出し、フェンリルと二人だけになる。

骸骨の表情に変わりはないが、守護者の前の支配者モードではなく気の抜けた鈴木悟モードでフェンリルに話し掛ける。

「お疲れ様です」

「お疲れ様です。それにしてもコキュートスに信頼してもらつてよかつたですよ」

「そうですけど…もう、血塗れになつた時には焦りましたよ、メッツセージで超痛いって叫ぶし」

「あれはヤバかつたですね。スプラッター映画みたいに血がドバドバ出るし、そのせいで意識が飛びそうになりましたもん」

はははと笑うフェンリルだがモモンガは本当に胆の冷える思いをした。スプラッターという言葉であることを思い出した

「ホラー映画とか好きじゃありませんでしたつけ？」

昔、他のメンバーとホラー映画で盛り上がりしているのを見ていた記憶がある。まあ話をしているのが全員異形種なのでそれもホラー映画の1シーンとも言えなくもなかつた。

そしてこの現状、人狼と骸骨の組み合わせも十分ホラーである。「見るのは好きですが、スプラッター映画は違うんですよねー」

「違う？」

スプラッター映画とは血まみれ映画・血しぶき映画と呼ばれるホラー映画の1ジャンルである。モモンガはホラー映画などを見ないので同じホラーというジャンルなのに何が違うのだろうかと不思議に思う。

「よく勘違いされるんですけど、静かな忍び寄る系のホラーが好きなんですよ。スプラッター映画とかの怖いって驚かせる系じゃないですか、急に出てくるとか、大きい音出すとか、まあ多少は見ますけど、リアルな痛みの奴は苦手なんですよ」「リアルな痛み？指を切るとか？」

モモンガは何となく想像したものと言つてみた。

「そうですそうです。そういうのを飛躍させて指を切り落とすとか、喉を切るとか想像しやすくないですか？映像とかで見ると目を背けたくなりません？」

「……なりますね」

「逆に言うとチエーンソーで切り裂くとか銃で撃たれるとか想像できない痛みは平気なんですかね」

「あー何となく分かります」

想像できない痛みなど

「痛いの苦手なんですよ。でもこの身体のせいですかね。痛みで意識飛びそうになつたって言いましたけど、それはズタズタになつたの見たらなんですよ。実際の痛みは思つたよりというか考えていてより大丈夫だったというか、なんて表現すればいいんですかね、痛みに對して耐性が出来てたんですよね」

あの時は大量の出血で驚いたせいなのか痛みをあまり感じなかつた。

「耐性？」

「指先をちよつと傷つけるのと身体をザツクリ斬られるのじや痛みのレベルというよりダメージが違うはずですよね？」

斬られる面積が違えばダメージも違つてくる。

「たぶんそうですね」

「そのダメージがつまり痛みが同じように感じたんですね。ある一定値で無効化されるっていうような……」

「無効化……」

「感覺的なものなので説明は難しいんですけどね。それよりも〈滅狼化〉が発動しそうになつたことですよ」

「それですよ。あれパッシブスキルでしたつけ？」

「アクティブラススキルのはずです。でもユグドラシルの時に噂が流れたんですよね」

「噂？」

「ええ特定条件で強制発動するつて、でも出来たつて人が現れなかつ

たしその条件も分からぬでデマだつて事になつてたんですけど……」

「満月の時にダメージを受ける……とか？」

「それも試したんですよ。満月の時に瀕死状態になるとか、色々な状態異常にかかるとか、色々試したんですけどね、結局分からなくてオレも諦めたんですよ……」

まだまだこの世界や身体には分からぬことがあると思つた二人だった。

フエンリル自室

「——というわけなんですよ」

モモンガはフエンリルにカルネ村での出来事を話した。
ミラー・オブ・リモートビューリングの操作をしていてたまたま見つけた人間同士の殺戮に介入しその村を助けた事、その村で仕入れた情報、そしてリ・エステイ・ゼ王国という国の戦士長ガゼフ・ストロノーフとの出会い、法国の集団との戦い。

「大体は分かりました。でも今度は一緒に行きますからね」

モモンガはフエンリルがスプラッターを苦手と言っていたのでナザリックで待機してもらつていたのだ。

「分かりました。今度は一緒に行きましょう」

一緒に行くという約束を取り付け笑顔のフエンリルはモモンガの魔法によって再現されたカルネ村で見た地図を見る。まるで一昔前のRPGゲームのような地図だ

「大雑把な地図ですよね。とりあえず分かるのはこの世界がユグドラシルじゃないって事くらい」

この地図を信じるならユグドラシルとは似ても似つかない世界だ。
それよりもフエンリルが気になつたのは

「それと気になるのはやっぱり魔法ですかね」

「ええ、どれもユグドラシルでの魔法でした」領くとモモンガは思い出す。どれも低位の魔法ばかりだったが確かにユグドラシルの魔法だつた。

「という事は、やっぱりどこかに他のプレイヤーがこつちに来ている可能性があるってことですかね、それが何らかの形で影響を与える。例えば口の動きが違うのに言葉の意味が分かるとか」

モモンガが話したこつちの世界の人間が翻訳こんにやくを食べている原因を他のプレイヤーが与えた影響の一つだと考えるとまだまだ他に影響したもののは少なくはずだ。

「まだまだ情報不足で判断できませんけど、魔法がこれ程似ていると
いうより一緒だという事で仮説を立ててみると、1に人々同じだつ
た。2に我々以外のプレイヤーが何らかの形で影響を与えた。2の
場合だと現在ではなく過去にいたということになるけどオレとして
は2の説を押しますけどね」

フェンリルの立てる仮説にモモンガは思考する。人々同じであれ
ばどこまでの魔法が同じなのだろうか、どこまで魔法をつかえるのだ
ろうか、過去に影響を与えたプレイヤーがいたとなるといつたいどこ
までこの世界に影響を与えたのだろうか

「……どつちも説得力はありますね。1の場合だと魔法がどこまで一
緒なのか気になるし、2の場合だと魔法がどこまで伝承されている
か、いや魔法だけじゃなく文化も伝わっているかもしないですね」
「文化か……じゃあ魔法道具とかも伝わってるかも……」

「いずれにしても調査するしかないですね」

調査するのを決定し装備などの準備のため一度解散したフェンリ
ルは複数の無限の背負い袋からいくつもの鎧や武具を広げて悩んで
いた。

モモンガと調査をすると決めたのは良いが、現状ほとんど分からな
いという事が分かっているだけで分からぬに等しい。

人間社会に紛れ込む為にはまずはこの見た目、人間に接触するのに
モンスターの姿で会うのはいけない、ステータスダウンは痛いが見破
る事がほぼ不可能な完璧に人に化ける人化スキルがここで生きてく
る。

だが人の姿になるのは良いが、この姿で戦闘に入った場合にどうす
るかだ。

人の姿のままでは70レベル相当、さらに昼間になると40レベル
まで一気に落ちてしまう、これを装備やアイテムでどう補助していく
か頭を悩ませる。

調査をするにしても地位がある方が調べ物はしやすい、その為地位
をある程度確保しなくてはならないが、目立ちすぎて粗探しされるの

も面倒だ。

無用なトラブルを避けるための強すぎず弱過ぎずな装備が求められる。

人間用の装備でゴッズ級は持っていないレジエンド級では自分はプレイヤーだと言っているようなもの、とすればレリック級が妥当な所だが

「まずは生き残ることを考えると防御力、それと状態異常対策・・・」
防御も物理か魔法のどちらに強いモノが良いのか、並べたアイテムは性能などに関わらずいずれも思い入れのある品々ばかりだ。

「失礼します。マスター」

ドアがノックされネルが入ってきた。

「ん？ああすまない、ネルこっちに来てくれ」

「はい、それでお話とは？」

「人間社会の調査をする為に潜入するんだが、どれが良いと思う？」

ふむと少し考えるネル、鎧とフェンリルを何度も見比べる

「そうですね・・・魔法防御はマントで補うとしてこの鎧がよろしいかと」

ネルが選んだのは金の細工が施された美しい真紅の鎧、これには中位物理攻撃軽減に状態異常耐性などのスキルが付与されている。見た目最優先で友人の鍛冶屋に作つてもらつたアダマンタイト製の全身鎧だ

しかし大きな鎧だ。ユグドラシルだつたら体形など気にせず装備できただがどれもが筋骨隆々なたくましい男が着て丁度良いもののになつてている。

元の自分に比べるとずいぶんと貧弱に見える身体では似合いそうにもない、というよりも本当に着られるのかも怪しい。

真紅の手甲を持ちしげしげと見て見るが外見のサイズが二回りほど大きい、これでは着ることが出来ても満足に動くことも出来ない。

だがまずは試しにと手甲を着けてみると直してもらわなければも鍛冶屋がある合わなければそこで直してもらわなければ

「ぶかぶかだなあああ！」大きくぶかぶかだつた手甲が淡い光を放

つと自分の手や腕ののサイズに合わせて魔法のように自動的に収縮した。

グツパツと手を開閉したり動きを確認すると阻害される感じは無い、それに重さを感じない。

手甲を外すと元のサイズに戻った。つけ直すと手や腕のサイズに合わせて縮んだ。

「不思議だな・・・」

「では、すべて着てみましょう」

鎧など着たことはないがネルに手伝つてもらいながら真紅の鎧を纏う。

「大変お似合いですよマスター」

大きな姿見に映し出されたのはファンタジー小説や映画に出てくるような騎士の姿をした自分、あれほど大きく見えた鎧は自分の体格に合わせて小さくなり身体を動かしてみるとまつたく動きが阻害されず、まるで身体の一部の様な感覚がある。

「動きには問題ない、でも派手じやないか？もう少し大人しい――」

フエンリルの提案にネルが真っ向から反対する。

「何をおっしゃいます！マスターは地が良いのですから私からすればそれでも地味に思います。それにこの美しい顔立ちはいかなる美しい鎧ですら霞みます」

ネルがフエンリルを後ろから抱きしめる。

右側の首筋に顔をうずめるように近づける

いつも見上げるばかりであつたフエンリルが自分よりも小さく、恐ろしくも凜々しい狼の顔は凜々しさは変わらないが美しい少年の中に見える可愛らしさがネルを自らを作り出したマスターへ不敬ともいえる行動を取らせた。

「マスター、わたくしももちろん連れて行つてくれますよね？置いて行かないですよね？」

ネルがフエンリルの耳元で囁く、

吐息を桃色と例えたのは誰かは知らないがきっと今の吐息がそうなのだと思う。

現実では嗅いだことのないような良い匂いが鼻腔をくすぐる。

鏡で見る自分は己の理想の全てをつぎ込んだ美女に後ろから抱きしめられている。

だがその柔らかいであろう肉体の感触は残念ながら鎧に阻まれ確かめることはできない。

フェンリルはこのままでいたいという誘惑を絶ち、抱擁を解き振り返るとネルの目を真っ直ぐ見る。

「お前は俺のパートナーだ。地獄の果てまで共に来い。嫌だといつても来てもらうぞ」

ネルの心がまるで灰色の世界が色とりどりの色彩を帶びていくかのようなかつてない充足感で満たされていく、

初めて自分が創造主であるフェンリルに必要とされた。地獄の果て終わりのその時まで共にいろと隣に居ることを許された。言葉にしてもらえた。

「もちろんです。この身が一片の灰になろうとも命果てるその時までお傍に・・・」

5話

城塞都市エ・ランテル

昼特有の活気に満ち満ちた広場に冒険者組合の斡旋所から二人組の冒険者が出てくる。

頭一つ分低い方がキヨロキヨロと周りを見渡す姿は田舎からのお上りさんに見えるだが行動はお上りさんでも誰も嗤う者はいない、広場に居た者はその二人組に目を奪われ活気はなりを潜めた。

二人組の一人は女性だった。切れ長の瞳は紫水晶のような光りを放ち、手入れの行き届いた腰まで伸びた白金の髪、褐色の肌は日差しを浴びて黒真珠のように艶と輝きを放っていた。

何よりも目を引くのは妖艶な雰囲気を持つその美貌と身体、浮かべた微笑はサキユバスのように見た者を魅了し、美しい金の刺しゅうが施された深い紫色をしたチャイナドレスに似たドレスによつて惜しみなく強調される男の理想を具現化したような身体の線、スリットから覗く長く伸びた生足に幾人もの男が生唾を飲み込むが、誰も声をかけることはしない何故なら右手に握られている長い木製の杖が彼女が依頼を頼みに来たのではなく、本人が冒険者でありマジックキャスターであることを物語っているからだ。

もう一人は、風にさらさらと流れる輝く銀色の髪、長いまつ毛に透き通る湖を思わせるアイスブルーの瞳、白磁のように白い肌、その気高く高貴に満ちた整った顔立ちは女性が一目で釘付けになるのには十分で、隣の女性と比べ若く頭一つ分背が低いがまるでおとぎ話に聞いた王子様が目の前に現れたかのようだ。

そして彼が纏う豪華絢爛な全身に施された金の細工が美しい真紅の全身鎧も美しく陽光を七色の光に変えて跳ね返す。夜の闇を切り取つたような漆黒のマントは一目で高級生地で出来ているのが分かる。

両者ともに胸には冒険者の証である銅のプレートが下げられており真新しく輝いていた。

(さてと登録は終わったしこれからどうしようかな)

銀髪の王子が周囲を見渡す。視線の先に入った女性達が「私を見る」ときやあきやあ騒ぐとそれが合図になつたのか再び広場は昼間の賑わいを取り戻し始めた。

銀髪の王子が鼻歌交じりに先に歩き出す。目指す先にあるのは数多くの露店が並び、様々な食欲をそそる匂いが鼻腔をくすぐる。

(いい匂いだな、まずは軽く腹ごしらえといくか、おつあれは)

肉の焼ける匂いに誘われるがまま足を向ける。店先で焼かれるいくつもの串肉、肉から滴る脂が熱せられた炭に落ち良い匂いの煙を上げる。

「おじさん、これいくら?」

「あ〜? こ〜に書い・・・て・・・」いつもは客引きに大きな声を出し肉を焼いていた店主は声をかけてきた冒険者らしからぬ二人組の高貴さと妖艶さに度肝を抜かれた。

「おじさん? お〜い」呆けた顔をしている店主の顔の前で手をパタパタと振る

「ん? ああ一本、1銅貨だよ」

「じゃあ二本くれ、はい2銅貨」

ズシリと重い白い巾着袋から銅貨を一枚取り出し店主に渡すと串肉を二つ受け取る。

露店を離れると一本の串肉をパートナーの女性に差し出す

「歩き食べは下品ですよ。ウォルフ」串肉を受け取らず注意する。

「いいじゃないカルネ、周りを見てみなよ美味しそうに食べてる。郷に入つては郷に従えというじゃないか」

言い訳をするウォルフことフェンリル

「それでもです。品のない行為は慎んでください、それとお金の無駄遣いはいけませんよ」

ルネと呼ばれたネルはやはり串肉を受け取らず注意する。フェンリルの所持していたユグドラシル金貨を10枚ほど潰しただの金塊として換金したため、お金にはまだ余裕はあるが浪費癖のある主のため換金したお金の大半とユグドラシル金貨の全てをネルが預

かつては、生活に影響が出るほどの事は出来ないが奢めなければ後先考えず湯水の如く使つていく。

だが当の本人はどこ吹く風でまつたく気にせず自分の分の串肉を一齧りする。口の中に広がる味付けされた肉の味、香辛料の香ばしい匂い、噛むごとに強くなるその味は合成ではない本物の肉の味だ。（焼いた肉の方が美味しいな、いや味付けされてるからなのか？しつかしモモンガさんの言つてたことは本当だな）

疑つていたわけではないが実際に体験すると驚きがある。

モモンガ達と関係性を探られないため一日遅れでエ・ランテルに入つたフエンリルとネル、モモンガがモモンと偽名を使つたのに習い人の姿に化けたフエンリルはウォルフ、ネルはルネという冒険者になつた。

確かにこの世界の住人は翻訳こんにやくを食べている。そしてどこの文字も読めない。

大気汚染が進んだ現実では黒く汚れた空はどこまでも青い、その素晴らしさにフエンリルは心が躍る。

だが何よりも気分をうきうきさせるのはRPGゲームや映画のセットのような町並みや行きかう人だつた。住居としての機能や性能は現実で住んでいたアパートの方が上だらうが見た目や雰囲気がやはり違う。

行きかう人は誰も防毒マスクをしていないし、着ている服はどれも粗雑だがやはり映画やゲームで見るような衣装のようだ。そして顔は西洋系ばかりで東洋系の顔は見ない。

それを横目に焼き串肉を頬張りながら歩く、こんな簡単な事でも元の現実世界では考えられなかつた。

本来であればどこかで先に潜入しているモモンガと会う予定であつたが、モモンガとナーベラルが名指しの依頼を受けてしまつたために午後の予定は全て潰れてしまつた。
(宿屋を探すか)

食べ歩きと街を散策しながら組合に紹介された日当ての宿屋を見つけ入る。

店内は窓が閉められている為薄暗かつたが暗視の能力を持つフエンリルには十分な明るさだった。室内は十分に広く、一階は酒場になつており奥にはカウンターその後ろには酒瓶の並んだ棚がある。何卓もある丸テーブルにはちらほらと男の客ばかりで入つてきたフエンリル達に踏みするような視線が向けられる。

そんな宿屋の光景にフエンリルは口角がわずかに上がった。

モモンガはガツカリすると言つていたがフエンリルにとつては食ベカスが落ち歩くたびに軋む床、奇妙な壁のシミ、この薄汚さもファンタジー世界を構成するエッセンスの一つとして見えていた。

店の奥に目を向けると恰幅のいい中年の女店主が堂々とフエンリル達を観察していた。

冒険者に酒や宿を提供する店主だけあつて腕は太く険しい顔は用心棒のようだ。

「宿だね。何泊だい？」

「二人部屋を一泊で」フエンリルが答える。

「ああ? 一人部屋あ? 銅プレートのペーパーが、死にたいのかい?」

店主の言う「死にたいのか」という言葉には色々な意味が含まれている。

新米冒険者が宿屋を使う時は相部屋で自分の顔を売るなどをして顔見知りになりチームとして冒険に出る。そうして自分に合つたチームに入るもしくは作つていく。それが出来なければ冒険に出ても魔物の餌になるか同業者の餌になるかそれとも失敗して死ぬだけだ。

それを店主は言葉数少なく乱暴に教えてくれたのだ。

「そういうのはいいんだ。面倒なのは好きじゃないし何より足手まといはいらない」

笑顔で冷たく言う。下手に仲間など作つてこちらの秘密を知られたくないそういう意味もある

「ふん、その鎧は見掛け倒しじゃないってわけかい。二人部屋は夕飯付きで8銅貨。前払いだよ」

料金を支払うと女主人は酒場の隅にある階段を指す。

フエンリルがネルを後ろに従え歩を進めると邪魔するようすに男が立ち塞がる。ネルよりも背が高く筋肉質の大柄な男だ。

フエンリルが男を見上げる。嫌らしい笑みを浮かべた男、その男の仲間と思しき丸テーブルに座り酒を飲む三人の男たちも同様に嫌らしい笑みを浮かべている。

店の女主人、その他の客、誰も止めようとする者はいない。
（もしかしてあれか？出る杭は打たれるとか新人いじめ的なやつか？）

「何か用ですか？先輩方」

穏便に済まそようと笑顔で対応するフエンリル

それを腑抜けだと勘違いする男

「なにちょっと見てたらよ。立派な装備のデカい口を叩く新人が挨拶も無しに俺達の前を通り過ぎちまいそくだからよ」

座っていた男の仲間の一人が立ち上がる。

ネルの身体を舐めるように見回し舌なめずりする。

「まあこの良い身体したエルフを一晩貸してくれただけでお前を俺たちのチームに入れてやるつてとつてもいい話をしてるだけだよ」男がネルの肩を掴もうと手を伸ばす。

だがその手は触れるることは出来なかつた。

嫌らしくも不用心に伸びてきた腕をフエンリルが左手で目にも止まらぬ速さで捕まる

「この手は何だ？」フエンリル自身でも驚くほど低く冷たい声、

「は、はあ！？てめえふざけつぐああああ！」

男の掴まれた腕がミチミチと音を立てて締め上げられていく、フエンリルの顔から笑みは消え無表情になる。

「この手は何だつて聞いているんだろうが、答えてくれよ先輩」

締め上げられた腕に悲鳴を上げ蹲る男、それを見るフエンリルの目は恐ろしい程に冷たく、絶対零度の視線に一瞥されただけで仲間の男達は声を上げることも出来ず体の芯から凍てつき動けずにいた。

もう少し力を込められると握力のみで腕を骨ごと碎くだろう。

フエンリルの異常なまでの怒りにこのままではまずいとネルが止

めに入る

「ウォルフ！もういいです！私は大丈夫ですから！」

ネルの声に我に返つたフエンリルが手を放す。

開放された男の腕には手の形をした痣がくつきりと残っている。

「これに懲りたらちよつかい出す相手は選んだほうが良いですよ。先輩」

それにブンブンと音が鳴るほど頷く男達、フエンリルは周りを見る
ことはせず部屋に急いだ。

簡素な部屋のベッドにドサツと腰を落とすと巻き上がる埃、本来で
あれば嫌な要素であるがそれが気にならないほど気が昂っている。

「ごめん迷惑かけた。まさかあれ程頭に来るとは・・・」

沈痛な表情で謝るフエンリル。ネルに何かされると思つた時、マグ
マのよう怒りが湧き出ててきた。

自分でも信じられないほどの感情の起伏は初めてだつた。

もしかするとこれも種族特性の一つなのかもしれない、アンデッド
であるモモンガは精神が昂つたり一定以上になると強制的に精神が
抑制されると言つていた。

人狼であるフエンリルには狼の部分が出たのかもしれない、狼は孤
高であるというイメージがあるが、雌雄のつがいを中心とした2～1
5頭ほどの社会的な群れを形成する。自分の群れつまり仲間に危害
が加えられそうになり怒りが湧いてきたのかもしれない。

（あとでモモンガさんに相談しとくか）

氣落ちしているフエンリルをネルが正面から包むように抱きしめ
る。

「私の為にあんなに怒つてくれるなんて嬉しかったですよマスター、
だからそんなに落ち込まないでください」

「ありがとう、そう言つてくれて助かる」

ネルから身体を離し立ち上がる。

「頭を冷やしに少し街をブラブラしてくる。ネルはどうする？」

「ここで待つてあります」うつすらと笑みを見せる。

「そうか、夕食までには戻つてくるから、それで夕食は良い物でも食べ

てさつきの事は忘れよう」

フエンリルは再び外へ出ると喧騒は相変わらずで一人になるべく人のいない方いない方へと歩き気が付くと人気は無くなり全く分からぬ場所にいた。

周りの景色はどこか古めかしいだがそれがフエンリルの冒険心をくすぐつた。

時を忘れ、さらに奥へ、奥へと、誘われるままに

そして日は落ち夜が訪れる。

冒険心の赴くままに来た結果、エ・ランテルの貧民街さらに廃棄された区画に迷い込んだ。

周囲は廃墟と呼ぶにふさわしい朽ち果てた建物ばかりが並びもはや人の住む場所ではないことを物語っている。

そんな場所でフエンリルの優秀な嗅覚は微かな血の臭いを捉えた。流れた血とその臭いの違いでおおよその人数を把握する。

(これは・・・3人、いや4人分か・・・足音は一つ、面倒事は簡単なんだけどなあ)

そう思つていると、血の匂いがする方からマントを羽織つた女が走つてくる。

すでに捉えていた足音通り一人だつた。

「あれ、おかしいな、気配はなかつたはずなんだけど、アンタ誰?」

女が問いかけてくる。短いブロンドの髪に顔立ちはどこか猫科の肉食獣を思わせる。

「ただの通りすがりだよ」

ぶつきらぼうに答える。

「ただの通りすがりね」女が笑う、口が裂けたかのような笑いフエンリルはそれに嫌な予感が走る。

(こういう感じに笑う奴つて・・・)

「んなわけないじやん、こんな誰も来るはずのない所に・・・ふくんアンタ冒険者か?」

女がフエンリルの胸に下げられた胴のプレートを見る。

「銅か・・・まあいいわ、見られたんだしただで返すわけにはいかない

んだしー」

女が羽織っていたマントを外すと胸や腰などの最低限以下の鎧いわゆるビキニアーマーと呼ばれる鎧が露になる

(おいおい、痴女かよ)

だがビキニアーマーには冒険者のプレートが数多く縫い付けられていた。それも駆け出しである銅や鉄だけでなく銀や金、果てにはミスリルやオリハルコンのプレートがいくつか混じっている。

(殺した奴のをハンティングトロフィーとして持つてゐるつて事か、趣味悪つ)

「あれ? 驚かないんだ? それとも分からぬだけかな?」

普通なら驚き絶望に染まるものを、特に顔色を変えないフェンリルに女はつまらないという顔をする。

「あー、大丈夫分かつてるから」

(しまつたな、驚いた方がよかつたのか、でもあの痴女からは全然強い感じがしないんだよな)

フェンリルは人化のペナルティでレベル70程度までダウンしているが

「ふうん、まあいいや、いいもの見せてア・ゲ・ル」

そう言うと一瞬で間合いを詰め、女が右手にステイレットを握り、高速の突きを繰り出してきた。

人化でのペナルティといくつかのスキルが発動していない為、スローとまでにはいかないがそれでも十分に目で追い、対処できる速度だつた。

三度繰り出された高速の突きの全てを見切り避ける。それを見た女が大きく後ろに飛び距離を取つた。

「アンタ本当に新人? それとも運が良かつたの?」

「あれ位なら普通に避けるだろ?」

女の雰囲気が変わつた。どうやらフェンリルは馬鹿にしたつもりはなかつたのだがそのように聞こえてしまつたようだ。

「ああ!? この人外、英雄の領域まで足を踏み込んだこのクレマンティーヌ様を馬鹿にするとはテメエ、身体はばらばらに切り刻んで豚

の餌にするだけじや許さねえ、その綺麗な顔おぐちやぐちやにして晒してやるよお」

（なんで怒るんだよ！まつたく、軽く相手してスタンファイストで気絶させたら逃げるか）

そんなことを考えていると、クレマンティーヌが姿勢を変える。クラウチングスタートに近いが立ったまでの異様な姿勢から動いた。

その疾走は超人的肉体を持つフエンリルも驚くものだつた。

瞬く間に間合いを詰め、その速度を利用した鋭いステイレットの一撃が無防備な顔目掛け加えられる。

刹那の攻防だつた。

フエンリルが顔を逸らす事で避け、ステイレットの刃を噛んで止めた。

信じられない光景にクレマンティーヌは一瞬驚いたが、再び笑みを浮かべる。

ステイレットの柄を捻ると爆炎が起こつた。常人いやモンスターですら頭を軽く吹き飛ばす威力に笑みはより歪む、しかしそれは驚愕に変わる。

「何で!?」

クレマンティーヌは確かに見た。燃え盛る炎の中でフエンリルが睨み、そして噛んでいた世界最高の金属であるオリハルコンで出来たステイレットの刃を噛み碎いたのだ。

あり得ないと驚愕するクレマンティーヌとは逆にフエンリルは冷静だつた。ステイレットの爆炎には驚いたが、今着ている火属性に高い耐性を持つ炎帝の鎧のおかげで無傷、そして歯を食いしばつたらステイレットが碎けた。

スタンファイストを右の脇腹に打ち込む。

クレマンティーヌは何が起きたのか分からなかつた。自分の身体に衝撃が来た。そう思つた瞬間意識が刈り取られた。

フエンリルは自分では軽く打ち込んだつもりだつたが、クレマンティーヌは打たれた脇腹を破裂させ突風に遊ばれる木の葉のように十メートル先の長年の放置と風雨によつて脆くなつていた壁に衝突、

クレマンティーヌの上に瓦礫が覆いかぶさる。

「おい！大丈夫か！」

予想外の威力に驚きながら駆け寄り瓦礫の中からクレマンティーヌを掘り起こす。壁に打ち付けられた衝撃から意識は混濁し、左脇腹からは大量の出血、息は絶え絶え、即死は免れたがこのまま何もしなければあと数分で死に至るのは目に見えていた。

「やばい、完全にやり過ぎた。こういうのってポーションとかで直せるのかな？」

殺すつもりのない相手を殺してしまったのは目覚めが悪いという気持ちには不思議とあまり起こらないが弱い女を殺してしまうという方の気持ちが大きかった。

フエンリルが中空に手を突っ込み自分のアイテムパックから血のよう赤い液体の入った小瓶を取り出した。

ユグドラシルのアイテムでハイポーションというポーションの上位アイテムだ、ゲーム内ではHPを完全回復させるありふれたアイテムだがこの世界で効くのかは分からぬ、だがこれしか手はない。

小瓶を開けクレマンティーヌに無理矢理飲ませる。すると全身が淡い光を放ち傷が逆再生映像のように元に戻っていく、それを見て安堵する。どうやら処置は間違つていなかつたようだ。

光が收まり身体が元通りになると

「ん、あつ」

クレマンティーヌの目が覚め、最初に目に入ったのは自分を半殺しにした相手だつた。

「起きたか？」

まだうまく動かない手で鎧を着ているのを確かめる。

「何もしてねえよ！」

助けたといふに心外だつた。確かに力の加減を間違えて一撃で半殺しにしたのは悪かつたが

「何で？意識ないなら犯すチャンスだつたじやん、だからポーションで直したんじゃないの？」

「馬鹿か？腹から血を流してゐる女を犯すわけねえだろ、それにやり過

ぎたと思つたんだよ」

そして童貞だからだよ、とは言わなかつた。

「ふくん、変な奴、こんな奴に負けちやつたんだ。私」

「変な奴つて・・・」

「好きにすればいいじやん、それが勝者の権利だし、何なら今から犯つとく?」

「するか馬鹿! つーかお前本当に強いのか? まさか自称とか言わないよな? 人外とか英雄の領域とか言つてたし」

「そんなに疑問もたれる程度の強さだつて事? ははつ、ねえアタシがさあどうやつてこの強さ手に入れたと思う?」

虚しい笑い。クレマンティーヌが見せた人間としての一面、悲しみだ。

才能があつた。人類を超える圧倒的強者としての才能、そしてこの才能を磨くのにどれほどのものを捨てた事か、いつから自分は壊れたのか、いつから人間を捨てたのか、クレマンティーヌの壊れた心に初めて虚しさが訪れた。

「お前力が欲しいか?」

「当たり前じゃん、なあにアンタがくれるの?」

クレマンティーヌは笑う。そんなことは不可能だと、人間の限界を超えた人外の英雄たる者がこれ以上強くなることなど出来ない。

「じゃあ、これを使ってみろ、ただし命の保証はしない。これを使つて死ぬかもしれないし何も起きないかもしない、全てはお前次第だ」 フエンリルが差し出したのは八角形の小さな宝石、それはユグドラシルで風の結晶という1キヤラにつき1度しか使えない恒常的に素早さを10アップさせるステータス向上アイテムだ。

「なにこれ? 宝石でアタシの気を引こうつての?」

「言つたろう? すべてはお前次第だつて」

「なんでアンタを殺そうとした奴にこんなことしてくれんの?」

「お前に興味が出た。殺すのは簡単だがお前がどこまで強くなるのか非常に興味が出たんだ」

クレマンティーヌのいう事が本当ならこの女は人外それも英雄と

いう領域に踏み込んだ希少な人間だという事になる。それを簡単に殺してしまうのは非常に惜しい。

「アンタ悪魔か何か？」

クレマンティーヌは笑う、悪魔は相手の命を代償に願いを叶えると いう。だがそんなもの存在しないことは知っている。自分でそんなことを口走ったのが可笑しかつた。

「悪魔？ そんなんじゃないさ、でもオレの正体を知りたいか？」

「なにそれ、脅しのつもり？ 言つとくけどアタシ、アンタの想像もつかないほど修羅場潜ってきてんだからね」

そうだ。かつて法国に属していたころには様々な相手を殺してきた。同じ人外の領域に踏み込んだ者、モンスター、何度も死にそうにもなつた。足を折られ。腕を潰され、何度も血反吐を吐いた。

「オレの正体を知つたらもう生きて返すことは出来ないぞ、それでも知りたいか？」

フェンリルの雰囲気が変わる。

「なにそれ、脅してるつもり？ もつたいぶらずにさつきと言ひなさいよ」

どうせどこぞの貴族、もしくは自らの血脉を秘匿している王族、そ う高を括る。

「いい度胸だ。ならば見せてやろう」

そう言うと鎧を脱ぎ、一糸まとわぬ裸になる。

「エツチ、スケベー、やつぱり犯る気なんじやくん」

体をくねらせおどけて見せる

「阿呆が、こうしなきや鎧が壊れるかもしれないんだよ。本番はここからだ」

フェンリルの目が大きく見開かれると、アイスブルーの瞳は金色の 獣特有の瞳に変わる。そして人の姿からは想像もつかない人狼の姿 へと変わり果てる。

クレマンティーヌは初めて人外の化け物を美しいと思った。身体 は雄々しく、純白の雪のような体毛は月の光に照らされ銀に輝く、圧 倒的強者にのみ許された美しき存在にクレマンティーヌは目を奪わ

れた。

初めて他者を、自分以外の存在を美しいと思つた

「・・・ビースト・・・マン?」

クレマンティーヌは自分で言つておきながらそんな存在ではないことを分かつてゐる。食欲と性欲そして暴力の粗暴な存在がこのようないい美しい獣であるわけがない。

「そんなちやちなモンスターと一緒にするなよ」

「・・・神・・・様・・・」

法国に居た時から神など信じた事は無いが、人をモンスターを超えたこの美しき獣が自分を神だと言うのなら信じようやそう思わなければならぬ。

だが美しき銀の神は否定した。

「オレは、いや、我は万物に滅びをもたらす白き獣なり」

形持つ滅びの獣。殺すことに喜びを覚える性格破綻者であるクレマンティーヌは魅了された。

今までの絶対的強者を誇つていた自分がいかに矮小な存在であったか。

そしていつの間にか壊れてしまつていた心が満たされるような未知なる感覚がクレマンティーヌを包む。

「今一度問う、世界に絶望した女よ。己が全てを捧げ我が手を取るか、それとも安らかなる滅びを受け入れるか」

迷うことなくクレマンティーヌはおずおずと手を伸ばす。眩しく輝く白い闇に、いつの頃にかいびつに歪んだ心で待つてゐた美しい純白の破壊の化身、世界を滅ぼす存在に

「捧げます。この身、魂の全てを貴方に捧げます」

捧げた。全てを、常人なら発狂する破壊の神、滅びの獣、という存在に全てを捧げる。いつの間にか枯れ果てたはずの涙を流すクレマンティーヌはかつてない幸福感に満たされた。

5・5話 幕間

フェンリルが無事クレマンティーヌを仲間にしてから約1時間後、宿屋の2階その一室でそれは行われていた。

「それでどこから拾つてきたのでしょうか？この野良猫は？」

この部屋に一つだけある粗末な作りの椅子に座り、腕を組む表情は柔らかく笑顔のルネだがその後ろには怒りの炎が燃えている。怒りの矛先であるフェンリルは部屋の真ん中で正座し冷や汗を搔きながら下を見ている。

野良猫と呼ばれたクレマンティーヌはフェンリルのベッドに腰掛け不機嫌そうに見ている。

「それはーそのー何と言うか・・・ですね」

言葉の歯切れ悪く答えに迷つてている。人生で来ることのない無縁の事だと思つていた女での修羅場にフェンリルはどう対処して良いのかが分からなかつた。

「別にマスターが約束を忘れて遅く帰つてきたこととか、野良猫を拾つてきいた事とかを怒つてはいませんよ。ただ忘れた理由とか拾つてきた理由とかを説明して欲しいだけですから」

(それを怒つてるつていうんじゃないのかよ)

と心の中で思つても決して口には出すことが出来ない。原因は自分にあるのだから

「さつきから一言もおっしゃつてくれませんけども、聞いていますか？」

「はい！聞いてます！」背筋を伸ばし返事をする。

「なら答えてください。私に解るように、納得できる理由を」

「あのですね・・・ちょっと街をブラブラしてたらですね・・・こう何と言つうか、道に迷つてしまつて、そこで会つたのがこのクレマンティーヌとして・・・」

嘘は言つていない、ただ殺しにきたので戦つたというと心配をかけるので言わないだけだ。本当だよ。余計なことを言つてこれ以上怒られたくないとか思つてないよ。

「道に迷つて…ふくん、まあ一万歩譲つて遅れたことは許しましょう。それで?どうして野良猫を拾つてきたのかしら?」

一万歩は納得してないのと同じじやないのかとは口が裂けても言えない、そしてクレマンティーヌを名前で呼び事無く拾つてきた野良猫扱いするところが怒りの最たる原因が分かる。

「いや、それはそのく仲間にしたつていうかく」

まさか正体をばらして従者にしたなど言えないと。

「仲間?仲間にしたんですか?」仲間という言葉に反応する。

「野良猫ごときが何の役に立つと?まさか愛玩用ですか?」

主人であるフエンリルにそうあれと創造された私がいるのに、まだ手を出さないのに愛玩用として女を連れてくるとは、嫉妬どころではない。

ネルの話をずっと不機嫌に聞いていたクレマンティーヌが立ち上がる。

「あのさく黙つて聞いてれば何なの?つうかつこの女なに?」

ルネがギロリとクレマンティーヌを睨む。身体が泡になつて消えてしまうかと錯覚するほどの殺意に意識はからうじて持つたが膝から崩れ落ちる。滝のような汗が額を伝う。

「ふくん、度胸はあるようですね。ですが……」

ネルが肩で息をするクレマンティーヌを見下ろす。それを荒い息を吐きながらも負けじとルネを睨む。

「テメー、殺してやる」

明確な殺意をあらわにするがそれをぶつけられたネルは一切怯えるそぶりすら見せない

「この程度で膝をつくなど、とても役に立ちそうにもありませんが」「ネルやめないか、大丈夫か?」一触即発の事態にフエンリルが割つて入る。

いつもなら身体が先に動くクレマンティーヌだがネルの挑発に鼻で笑つた。

「役に立たない?はつ!ここでぐだぐだしてお前より役に立つ情報を持つてるつづーのつ、ねえフエンちゃん一気にランクアップしたくな

い？」

何か言おうとしたネルを口論になる前に先に止め話を促す。

「待つた。それはどういうことだ？」

「それは、普通だつたら昇格試験とか面倒くさいことやらなきや冒険者つて上に行けないんだけど、特例で一気に昇格出来る事があるんだ／＼知りたい？」

「知りたい」

そうそうに旨い話があるわけなどないが裏技の様なものがあるのならば話を聞きたい

「ど／＼しよつかな／＼」愉快そうに笑顔のクレマンティーヌ

「もつた／＼ぶら／＼に教えてくれ」

「も／＼そん／＼顔／＼しないで／＼でもそん／＼顔／＼してもか・わ・い・い・ぞ、それは上位クラス相当の依頼を達成すること簡単でしょ？」

上位の依頼と言われても確かに達成する力はあると思うが受ける事の出来る依頼はクラスによつて決められている為、最低位である銅では上位依頼を受ける事が出来ない。

「それを受けられないからコツコツやつていかなくちやいけないんだろ。突発的にでも起きればいいんだけどそう都合よく起きるわけ——」

「それが分かつていてるとすれば？」不敵な笑みを浮かべる

「——なに？」

「だから／＼オリハルコン級の依頼が突発的に起きるのが分かつてるんだ／＼だつてば」

「は？ どんなのが？」

「あのね／＼、アタシがフエンちゃんに拾われる前に、まあカジツちゃんとかはまだ仲間だつて思つてるかもしけないけどズーラーノーンが／＼、あつアタシこの組織の幹部ね、それでこの街を死の旋風で死都にするつて計画をアタシが手伝つて明日やる予定だつたんだけどアタシ、フエンちゃんの仲間になつちやつたから」

さらりと重要な言葉が流れてきた気がする。

「手伝うつてお前は何をする予定だつたんだ？」

「んうとね、ンフィーレア＝バレアレをさらってこれを使わせる予定だつたんだよね～」

そう言つて、覗者の額冠を出すと手でクルクルと回す。

「なんだそれ？」

「これはね～、スレイン法國の最秘宝の一つで、着けた人間を～超高位の魔法を引き出すマジックアイテムへと変える素敵なアイテムだよ～、まあそれを盗んだんだけどね～」

クレマンティーヌは笑う。

「ちよつと待て、盗んだのか？それを？」

「そうだよ」

それがどうしたの？とでも言う表情のクレマンティーヌにフェンリルが頭を抱える。まさか色んな爆弾を抱えている奴だとは、スレイン法國という国を裏切り、なおかつ最秘宝の一つを盗み、そしてズーラーノーンという組織の幹部、面倒事が両手で抱えるほどクレマンティーヌは持つている。

「ねえ嫌いになっちゃった？」

上目遣いにフェンリルを見るその目は潤んでいた。まだ女に免疫の付いていないフェンリルには威力は十分で怒る事など出来ずに許してしまう。

「はあ、仲間にした以上は仕方がない。面倒事を一つずつ潰していくか、それとクレマンティーヌ」

真剣に重みのある声で名前を呼ばれる。そしてその目にはあの美しい獣の目を思い起こす光が宿っていた。

「お前はオレに全てを捧げたな？」

「はい、この身、この魂の全てを」今度はうつとりとした表情を見せるクレマンティーヌ、だがその言葉に嘘偽りはない。

「ならば我はお前の全てを許し守ろう。だが裏切りは決して許さない、我への利益をもたらすズーラーノーンへの裏切りをもつてお前の最後の裏切りとせよ。そして・・・」

アイテムパックから取り出したのは小さな狼の横顔の形をしたイヤリング、これはユグドラシルでギルドを作つた時に知り合いの鍛冶

師に作つてもらい、かつての仲間にも送つたものだ。

「これをお前に送ろう。お前が我的仲間いや群れの一部であるその証だ。これがお前の元にある限り我の元にいる事を許そう」

「決して御身に後悔などさせません」

「良き返事だ。では今一度ズーラーノーンに戻り情報をさらに引き出してこい」

「承知いたしました」

そう言い残しクレマンティースが部屋から出ていくとフエンリルは一仕事終えた気分になつた。だが最大の仕事はまだ残つていた。「身を捧げたとはどういうことですか？」

古い機械仕掛けの人形のようなぎこちない動きでネルを見るとその目には涙が今にも零れ落ちそうなほど溜まつっていた。

「そういう意味じやないから！本当にそういう意味じやないから！」

「ならどういう意味があるというのですか！」

フエンリルがネルの誤解と機嫌を直すことが出来たのは夜明け前の事だつた。

朝方、フェンリルがモモンガとメッセージのやり取りをする。クレマンティーヌの事とズーラーノーンが立ててている計画の事だ。

『——という計画が今あるそうです』

『それは使えそうですね』

その情報が正確であるならば対処することが出来る。その計画のピースとなるンフィーレアはモモンガと行動しており、情報を流すクレマンティーヌはフェンリルが仲間にしている。ランクと名を上げるチャンスだ。

『どうしましょう？』

『そうですね。そのズーラーノーンとやらを監視して機会をうかがいつつ対処するのが良いと思います』

モモンガの頭にデミウルゴスの事が浮かんだがこれくらいの事で頼るのも気が引けたので頭の隅に追いやつた。

『ですね。情報収集しながらモモンガさんが帰つてくるの待つてます』

冒険者モモンと一行がエ・ランテルに着いたのは満月が空に浮かぶ夜の事だつた。

ンフィーレアと漆黒の剣は荷を下ろす為に店で別れ、モモンガとナーベラルはハム助の登録をしに行く、その道中は街の住人達に見られるという羞恥プレイを味わうことになつた。

登録を済ませるとモモンガはナーベラルとハム助と一旦別れ、フェンリル達とエ・ランテルの廃棄区画で落ち合う。

モモンガを迎えたのはフェンリルだけだつた。

「お待たせしました。あれ？ 一人ですか？」

「お疲れ様です。ネルには周囲の警戒をしてもらつています。どうでした？ 冒険者としての初仕事は？」

「いや、何と言ふか夢のない仕事でしたよ。でも良い経験にはなりましたね」

「そうなんですか？何かショックだなうでもまあ仕方ないのかな？」

「それよりも例の件の方ですよ」

「おつと、そうでしたね。情報源のクレマンティースは今ズーラーノーンって組織の方に行っています。計画は深夜、ンフィーレアの事は誤魔化してもらいました。廃人になられるのは困るので。首謀者の名前はカジット、他に数名がいるという事です。とりあえず今わかつているのはこれくらいですね。あとはモモンガさんに探つてもらうしかないんですけど」

フェンリルがモモンガに丸投げした。

「分かりました。ちよつと待つてくださいね」

モモンガが漆黒の鎧を脱ぎ捨ていつもの姿に戻ると、十本の巻物を取り出すとそれを順番に展開させていく、魔法での情報収集を行うためのふにと萌えさん考案の『誰でも楽々PK術』による基本戦術である防御対策を行うと、〈千里眼〉と〈水晶の画面〉を同時に発動される。空間に浮かぶ画面には無数の人型が映し出される

「うーん見たところ強いモンスターは居ないみたいですね」
見えるのはいずれも低位のアンデッドだが大群だ。

「これだと他の冒険者に横取りされそうですね」

一気にクラスアップを狙っているモモンガとフェンリルは他の冒険者に出来ないことを成し遂げなければならぬ、それだけに大規模なだけではなくその質も伴わなければならぬ。他の冒険者も出張つてくることを考えるとアンデットの大群だけでは心もとない

「どうしましょうか？」

「うーん」

困る二人、その時フェンリルに一つの考えが浮かぶ

「そうだ。モモンガさんの魔法で多少盛れませんか？」

「盛る？ つてまさか、こちらでモンスターを用意するつてことですか？」

「そうです。デスナイトとかを召喚してそれを俺達が倒すんです。いやこういうのはどうです？」

フェンリルが提案したのは、墓所からスケルトンを大勢とデスナ

イト2体を外に放ち、他の冒険者をそつちに釘付けにしタイミングを見てデスナイトをフェンリルとネルの二人で撃破、それまでにモモンガとナーベラルで墓所の中で首謀者を討伐するという計画だ。あくまで別のチームとして解決する。

「それでいきますか」

最初にそれを見つけたのは墓所の衛兵たちだつた。

墓所に溢れかえるスケルトンの大軍、その前代未聞の異常事態に衛兵たちは抗つたがこの異常を伝えに走つた衛兵一人を除き皆殺しされた。

門を破壊し蘇つた死者の軍勢が生者の住む町に侵略を開始する。まるで地獄の釜の蓋が開いたかのように押し寄せるスケルトン、それを迎え撃つのは冒険者組合から緊急の依頼を受けた冒険者たち、死者の軍勢を押し返そうと躍起になる冒険者、数では圧倒的に不利ではあつたが数多くの場数を踏んだ冒険者たちは協力して押し返していく

だが冒険者たちの前にわずかに見えた希望は絶望によつて粉々に打ち砕かれた。

オオオアアアアアアアアアーーーー！

雄叫びと共にスケルトンを蹴散らしながら現れたのは2体のデスナイトだつた。

「こんなモンスター見たことないぞ」

その右手にはフランベルジユ、左手には巨大なタワーシールド、鎧を纏つた死靈の騎士、冒険者たちにこれから絶望をもたらす災厄オオオアアアアアアアアアーーーー！

おぞましい雄叫びに冒険者たちの背筋は凍り付いた。

だがデスナイトはお構いなしに一番近くに居た男の冒険者を

「えつ？」

フランベルジュで縦に真つ二つにした。

それに他の冒険者は我を取り戻した。

「下がれ！魔法打てる奴は何でもいいから打て！絶対に接近するんじゃない！」

数名のマジックキヤスター『マジック・アロー』を放つ、幾つもの光球が2体のデスナイトに襲い掛かる。だがほとんどをタワーシールドで防がれたが幾つかがすり抜け本体に当たつたが仰け反る事すらせずまるでダメージを感じている様子はなく、獲物を捕らえる肉食獣の如く獲物である冒険者を捕まえ殺していく。

それはまさに無慈悲に吹き荒ぶ死の暴風のようだつた。フランベルジユで斬りタワーシールドで殴り倒れた者は踏みつけ、同族であるはずのスケルトンごと時には建物、障害物を破壊し冒険者を確実に屠っていく、その光景は地獄だった。デスナイトの雄叫び、冒険者の悲鳴、阿鼻叫喚の地獄絵図

それを建物の上から見て いる二つの影、フエンリルとネルだ。ネルが使用した第9位階魔法『パーエクト・アンノウアブル』によつて誰にも気づかれる事無く、劇的な登場のタイミングを窺つて いるのだ。

「そろそろかな？」

「もうよろしいかと、これ以上は死人が出過ぎてしましますし何よりデスナイトを倒す者が訪れないとは限りません」

デスナイトを今ここにいる金や銀の冒険者では倒せないはずだが、この都市最高の冒険者であるミスリル級冒険者がどれほどの実力を持つて いるのか判らない為、到着する前に倒さなければならぬ。

そう思つて いるどち ょうど20人目の冒険者が殺されたところだつた。

「そうだな、これ以上はランクアップにケチが付きそうだしな」

フエンリルが腰に掛けた二つの剣を抜く
パリツ、パリツ、バチチツ、
二つの刃から雷光が走る。

斬撃と共に雷属性の攻撃を与える事の出来るレリック級アイテム

でその名をサンダーブレード〈双子〉、刃から走る雷光のエフェクトからフェンリルのお気に入りの武器の一つである。ただのビジュアルでのお気に入りなので武器としての性能はユグドラシルでは中の下といったところだがデスナイトなどの中級モンスターを相手にするにはレベル差を考えると十分な威力を持つている。

「それじゃ行くかな、どどめはお前に任せたからド派手な奴を頼むぞ」

「分かりました。派手なやつですね」

ネルが『パーエクト・アンノウアブル』を解くと、フェンリルが軽い足取りで空中へ躍り出る。

「はあはあ、何なんだこの化け物は」

どれほどの魔法を撃つたのだろうか、どれほどの斬撃や打撃を加えたのだろうか、だがどれほどの攻撃を浴びてもこの化け物は決してひるまない、おぞましい声を上げ嬉々として人を殺していくあまりの恐ろしさに後方では逃げ出した者もいる。

冒険者達をかつてない絶望が支配していた。危険なことや困難は冒険者には付き物だ。時にはその命をも簡単に落とす瞬間だつてある、それは冒険者全てに言える事だ、だから周到に準備するし身に余る危険であるならば逃げる時もある、だが今日の前にいる死霊の騎士はそれを許さない。

金や銀といった歴戦の冒険者が容易く屠られ、殺された者がスクワイア・ゾンビとして蘇りかつての仲間に牙を向ける。

そんな絶望が満ちていたその時だつた。

「オルアアアアアアアア!!」

空から雄叫びを上がり、それにデスナイトいやこの場にいる全ての視線を釘付けになつた。

真紅の鎧を纏つた男が雷光と共に降ってきた。

落下と共にサンダーブレード〈双子〉がデスナイト目掛け振り下ろされる。

ガキイイイイ!!

だがデスナイトは容易くタワーシールドでフェンリルの攻撃を防ぐ、ユグドラシルであれば攻撃は防がれたのでダメージを与えることは出来ないのだが、

グアアアアア！

一瞬の眩い光と空気を引き裂く轟音、デスナイトの身体を雷が貫いた。ユグドラシルでは起こりえない現象、金属で出来たタワーシールドを雷が走り抜け本体に雷属性のダメージを与えた。

（通電したのか!?）

雷に打たれ白煙を上げるデスナイトが地面に片膝をついた。

冒険者たちにそれは信じられない光景だつた。だが奇跡の光景はまだ続いていた。

「まだまだ!!」

まだ片膝をついているデスナイトに職業クラス「ソードマスター」を習得しているフェンリルがサンダーブレード「双子」での怒涛の連撃が襲う。斬るたびに雷光が走り、デスナイトはなすすべなく斬撃と雷の属性攻撃の嵐により瞬く間に体力を擊破寸前までにするもデスナイトの能力である1回だけHP1で耐えた。しかしフェンリルの攻撃で麻痺が付与されたため直ぐに動けないでいる。するとフェンリルはすぐに2体目のデスナイトに狙いを定め、雷の様に速く懐に潜り込む。

それは周囲の冒険者には真紅の稻妻が走った様に見えた。それが後にフェンリルことウォルフの二つ名「真紅の稻妻」の由来となつた。

2体目のデスナイトが嵐のような斬撃によつて雷に包まれると瞬く間にHPを削られ能力によつてHP1で耐えたその瞬間にフェンリルは後ろに大きく飛び距離を取る。

「ルネ！」

「滅びなさい」

偽名で呼ばれたネルが百万人に一人レベルの才能持ちが放つ事の出来る第5位階魔法である『ドラゴン・ライトニング』をとどめの一撃として放つ、周囲を昼間の様に明るくする程の光と建物が震える程の轟音を残し2体のデスナイトそして周囲にいたスケルトンは塵と

なつて消えた。

この魔法によりネルは『雷光姫』の二つ名を得ることになった。

「馬鹿な……」

冒険者の一人がつぶやく、それがここにいる生き残った冒険者全ての思っていた事だつた。

悪夢の様に金や銀の冒険者が束になつてもまるで刈られる草木の様に何もできず蹂躪される一方だつたのに、芸術品の様に美しい真紅の鎧を纏つた男と見たこともない凄まじい魔法を放つたエルフの女、まるで夢やおとぎ話の様に二人の美男美女があの悪魔の様な死靈の騎士を倒したのだ。

そしてこの後さらに驚かされたのは一人が冒険者として駆け出しの銅である事だつた。

見事にデスナイト2体を倒すことに成功したフェンリルは（決まつたな、登場も倒し方も最高だ）と内心で自分のことを褒める。「お見事です、ウォルフ」

ネルが建物の上から降りてきた。

「いやいや、ルネのトドメの魔法も良かつたよ。これで一気にランクアップもするだろう、だが……」

迫りくる残存しているスケルトンの大軍を見ると一つため息をつく

く
「はあ、もうちょっと頑張りますか、そうだMPに余裕はあるだろうけど一応『ドラゴン・ライトニング』が切り札つてことにして、あとは『マジックアロー』とか低位の魔法で他の冒険者をサポートしてくれ」

「分かりました。サポートに回ります」

「それじゃよろしく！」

フェンリルがスケルトンの大軍へ雷光の尾を引きながら走り出し、ネルが杖を構え魔法を唱える。

その姿を見ていた冒険者は昔話に聞いた英雄譚を思い出したといふ。

「……づ……け……彼らに続け！」

「そうだ！彼らに続け！」

声を上げ、フエンリルの後ろ姿に英雄の幻を重ねる。

それに鼓舞された冒険者は武器を構え走り出した。その中にモモンと依頼を行つた〈漆黒の剣〉もいたのは偶然の事だつた。

後に彼らはこう言つてはいる「二人の英雄の誕生に出会えたことは生涯一の幸運だつた」と

フエンリル一行と冒険者達がスケルトンの軍勢を一掃し終えたのは朝日が差してきた頃だつた。一掃するのは簡単な事だつたがモモンガに少し時間が欲しいと言われたので時間を伸ばした結果だ。

墓所に踏み込むとそこには静けさを取り戻した墓地と首謀者であるズーラーノーンを討伐したモモンとナーベそしてハム助だつた。

その場に見えないクレマンティーヌは当初の打ち合わせ通りズーラーノーンに在籍していた自らの痕跡を全て消し現在はとある場所に身を隠している。

ズーラーノーンによつて起きたこの事件を解決に導いた冒険者、モモンとナーベそしてウォルフとルネは見事にミスリル級へと昇格を遂げることが出来た。

だが喜ぶフエンリルとモモンガの元にアルベドから一つの凶報が告げられたのはすぐの事だつた。

シャルティアの離反、モモンガにとつて最優先の事柄だが、モモンガそしてフェンリルはナザリックではなく冒険者組合の一室に居た。冒険者組合に緊急の要件として呼ばれた為だ。

部屋にはモモンガ達2人の他に、冒険者組合の組合長AINザック、そしてミスリル級冒険者の『クラルグラ』のイグヴァルジ、『天狼』のベロテ、『虹』のモツクナツクの4人の男、いずれも緊急の要件で招集された者たちだ。

これから話し合いが開始されるという時にイグヴァルジがモモンガとフェンリルに絡んできた。

「AINザック組合長、私はモモンガもウォルフという名も聞いたことが無いのですが、いつたいどういう偉業を成し遂げたのだろうか？」

言葉の端々に敵意を含む言い方だがAINザックはそれに気付いていないうやうな明るさで答えた。

「モモンガ君は森の賢王を服従させ、昨晩の墓地の事件を解決、そしてウォルフ君も大量のアンデッドを掃討し事件の解決に大いに貢献してくれた」

「その一件だけでか？たつた一つの事件を解決しただけで？他の冒険者が不満に思うぞ？」

「だがモモンガ君はたつた二人で2体のスケリトルドラゴンを退治し首謀者一味を討伐、そしてウォルフ君も二人で見たこともない凶悪なアンデッドを2体その後、他の冒険者達の先頭に立ち千体以上のアンデッドの軍団を倒している。そしてウォルフ君のパートナーであるルネ君は第5位魔法の使い手だ――」

アンデッドはモンスターの部類でも弱い部類に入るモンスターである。リツチ等例外もいるが大抵はスケルトンなどの弱いモンスターを指す。スケルトンは新米冒険者でも2・3体なら対処可能なモンスターではあるが、それを千体になると話は変わってくる。

30体程度で並みの武器は壊れ、集中力も体力は無くなり、不意の一撃で傷ついたが最後そこに群がる様に押し寄せ殺されてしまう。

それを千体も倒すという事は、特別な武器を持ち、常人ではない人外の領域に踏み込んでいるという事だ。

それにパートナーは第5位階の魔法を使うという、それが本当ならもはやアダマンタイト級の実力者だ。

そしてスケリトルドラゴンを2人それも2体倒し首謀者一味を討伐したとなるとこちらも相当な実力者ということになる。

イグヴアルジはそんな英雄譚の一説の様な話を信じられなかつた。

「馬鹿な！そんな事出来るわけがない！」

立ち上がり強く否定するイグヴアルジにフェンリルが不機嫌に声を上げた。

「あのさあ、うるさいんだよ。俺もこつちの人も緊急だつづーから眠いの我慢して来てんだよ。これ以上話が先に進まないんなら、お前出て行けよ」

「貴様つ！——」

フェンリルの挑発にイグヴアルジが顔を真っ赤にさせて睨んだ瞬間、目の前に弱く雷を走らせる刃の切つ先が突きつけられていた。

「な・・・・

フェンリルが剣を抜きイグヴアルジに突き付けるまでの動きはモンガ以外には見えなかつた。ゆえにこの場にいる誰もが驚愕していた。

「黙つて席に着くか、出て行くか、どつちか選びなよ先輩」

突き刺すような視線と冷たい言葉にイグヴアルジは背中に冷や汗を搔きながら大人しく席に着くことを選んだ。

「さあ話を進めようか」

「そうだな、では——」

AINZOUKが話した緊急の要件とは突如現れた吸血鬼の事だつた。その吸血鬼とはもちろんシャルティアの事だ。

そのことが分かるとモモンガは、その吸血鬼は自分が追つてゐる非常に強力な吸血鬼の1体であり名前はホニョペニヨコであり、詳細は極秘裏の任務であるため伝えられない、そしてこの事は国対国の話にはしたくなくその場合は自分はこの地を去りホニョペニヨコはこの

国の冒険者に任せること。

AINZOUKはモモンガを睨んだが何の痛快も感じず、これだけは何物にも邪魔をさせないと、微かな怒氣をはらみ告げる。

「偵察は我々で行う、もしその場に吸血鬼がいたら滅ぼそう」

とそう断言する。そこには己に対する自信と、決意があり、空気が揺らいだのではないかという圧力に息を飲む。では他のチームを、と言われたがその言葉を遮り拒絶する。足手まといはいらないと傲慢不遜な態度だが、その場にいたFERNRILを除く男達はそれが決して傲慢や自惚れ、驕りから来たものではなく、そう言い切れるだけの力を有しており常人の域を超えた英雄と呼ばれる男であると感じた。

AINZOUKが問いかける

「報酬は？」

「その吸血鬼を滅ぼした場合、最低でもオリハルコンを約束して欲しい。もう一体の吸血鬼を探索するのに一々力を証明するのも面倒だからな」

なるほど、と部屋に居る者は納得する。

するとモモンガの隣に座っていたFERNRILが笑った。

「クハハッ、良いなそれ、なら俺も付いて行こう。同じ依頼をするんだから俺もオリハルコンになれるんだろう？組合長殿？」

AINZOUKはその提案に渋い顔をする。

モモンは良い、オリハルコンになるという理由も分かる。だがウオルフには疑問に思うことがある、力はあると思う、先程見た目にも止まらぬ神速の抜刀に千体以上のANDEEDの軍勢を倒したのだから、だからと言つてこの依頼を完了したとして容易くオリハルコンを与えて良いものか

「構わないが、ついて来たら確実に死ぬぞ？全滅かどうかは知らんがな」

「良いね、ゾクゾクするよそういうの。で？オリハルコンになれるの？組合長殿」

モモンが確実に死ぬと断言する依頼をこなすのであればとAINZOUKは渋々だが自分を納得させ首を縦に振る

「良いだろう、ただしモモン君の報告によつて精査する。それによつて君をオリハルコンにするかどうかを決めさせてもらう。これが条件だ」

「その条件で良いよ。それじゃよろしくモモンさん」「ええよろしくお願ひしますウォルフさん」

握手を交わすとイグヴアルジが立ち上がつた。

「俺達も付いて行く！大体その吸血鬼が本当に強いのかも不明ではないか！第一お前の強さを信頼できない！」

モモンガは軽く肩を竦めると

「警告はした。それでも良いなら付いて来い」

「も、もちろんだ！」

イグヴアルジを見て若干余裕を取り戻したアインザツクがモモンガに問い合わせる

「自信があるのはいいが、その根拠となるものは何かね？勿論君の強さは理解しているつもりだ。だが吸血鬼の強さを考えると、私達も君に任せて良いか不安があるんだ。・・・もし君が負けてしまつた場合の対処もある」

「切り札はここにある」

懷の内から水晶を取り出す

「それは？」

「第8位階の魔法が込められている魔封じの水晶だ」

「なんと！？それは本当か！！」

「鑑定しても良いが、今は時間が惜しい。吸血鬼は日光下であつた場合ペナルティで行動が遅くなる」

「そうだな、では何卒頼む」

「了解しました。これから出来る限り急ぎで出る」

森の大きく開けた場所、そこに真紅の鎧を纏いうつむいたまま微動だにしないシャルティアを胡坐をかいて座る白い人狼が一定の距離を保ち警戒しながら注視している。

すると人間には聞き取る事の出来ない距離の断末魔の悲鳴が耳に届いた。

（あ、死んだか、しかしユグドラシルでもこんな状態は見たことないな）

届いた悲鳴はイグヴァルジのものであつたが特に気にすることもなく再び意識をシャルティアへと向ける。

アンデッドであるシャルティアは精神作用を無効化する。ならば精神支配など受けるわけがない。それはフエンリルも知っていること、ならばやはりモモンガの言つていた通り我々の未だ知りえないこの世界の何かによるものなのだろうか、だがそれほどまでに高度な魔法もしくは技術ならば情報収集を行つて他の守護者の誰かの耳にしているはずだが、その欠片も入つていないのでどうということなのだろうか。

そんなことを考えているとアルベドに先導されモモンガが来た。

「お疲れ様です。何か動きは？」

「何もありません、ずっとあのままです」

たしかに〈水晶の画面〉に映つた姿格好と何も変わっていない、その姿勢すら少しも動いた形跡が見受けられない。

「シャルティア」

モモンガの問い掛けにシャルティアは何の機微も見せない。モモンガにその名を呼ばれただけで嬉しさを示すほどに忠誠心に溢れていたナザリックのNPCにあり得ない行動にモモンガはしげしげとシャルティアを眺める。

無視したのではない。その見開かれた真紅の瞳は空虚なもので、意識がそこに宿つているように思えなかつた。

アルベドがそんなシャルティアに憤怒の炎を上げる

「シャルティア！言い訳の言葉すら無く、さらにAINズ様に對しての無礼——」

「静まれ！動くな！・シャルティアに近づくことは許さん！」

一步踏み出しかけたアルベドを乱暴な口調で制止する。普段であれば滅多に取らない行動であるが、この瞬間だけは自制が利かなかつた。

それほどまでにシャルティアの現状に衝撃を受けていた。

「まさか・・・そんな・・・信じられん・・・」

「どうしました？」

「確定です。シャルティアは今精神支配を受けている」

「アンデッドが精神支配？ふむ・・・色々疑問はありますが、何の行動もしないのはおかしくありませんか？」

フエンリルの問いにモモンガは腕を組み、シャルティアを鋭く睨む。

「確かに何故という疑問はあります、おそらく何者かによつて精神支配を受け、そして命令を受ける前に何かが起こつた。この場合相打ちになつたと考えて、そして命令が空白の状態で置かれた」

モモンガの推理にアルベドとフエンリルが頷く。

「となると不用意には近づけないです」

接近したり、攻撃をすれば防衛行動を取る可能性がある。悪属性に偏っているシャルティアがとると考えられる行動は攻撃だ。

「AINズ様、ここで時間をかけるのはシャルティアを精神支配した何者かが生きていた場合、長居は危険かと」

「全くだな」

どうやつて精神支配を受けたかは謎であるが、ここに居続けるのはモモンガも危険であるため

「これで手つ取り早く無効化するとしよう」

モモンガが指を動かす。そこにはまつてある指輪を見てフエンリルが驚きの声を上げた。

「それは！まさか!?」

モモンガが勝ち誇った笑みを浮かべた。

「そうです。超位魔法〈星に願いを〉をリスク無しに、三度まで行うことが出来る。超々希少アイテム、流れ星の指輪です！」

課金ガチャのアイテムの中でも、その出現率の低さに運営が意図的に絞っているんじやないかという炎上騒ぎにまでになつたアイテムだ。

フェンリルも金額はあえて言わないが、中々につぎ込んだが結局出なかつたアイテムだ。

「おお、実物初めて見たー!!」

〈星に願いを〉は自分の経験値を消費して使う超位魔法である。そして消費した経験値によつて魔法の効果が選択肢としてランダムに出て来るシステムになつていて。

モモンガが狙う願いは対象の全効果の打ち消しだ。それ以外にもいくつかあるが直接的な効果としてそれを狙う。

「指輪よ！ I W I S H！」

だが、この時、モモンガもフェンリルもシャルティアはこの世界のまだ見ぬ魔法や技術のせいで精神支配を受けていた。だがユグドラシルにもたつた一つあつたのだ。超位魔法を超える力が

「シャルティアに掛けられた全ての効果を打ち消せ！」

ただの魔法とは違う。強力な超位魔法の発動にモモンガは勝利を確信して叫んだ。

だが超位魔法は発動しなかつた。いや発動はしたのだがそれよりも巨大な何かに願いは打ち消されたのだ。

「なん・・・だと・・・」

主人の動搖に不安げにアルベドが声を掛ける。

「どうかなさいましたか、AINZ様？」

ユグドラシルを長く遊んだ経験と攻略サイトで得た情報、そしてこの世界に来てから得た様々な情報を結び付け、〈星に願いを〉を使用した時に流れ込んできた情報と使用感。結論が出た瞬間

フェンリルも同様の結論を出していた。

「モモンガさん！」

「撤収だ！アルベド！フェンリルさん！早く！」

転移の魔法を発動させ、ナザリックのすぐそばまで戻つてきたが、余裕なく命じる。

「アルベド！追尾して転移してくる者に警戒せよ！」

「はっ！」

武器を構えアルベドがモモンガの傍に立つ、モモンガとフェンリルも変化する状況に対応できるように身構える。

そのまま時間が過ぎ、モモンガが緊張を解くとフェンリルとアルベドも戦闘状態から平常状態へと戻る。

「クソが！」

緊張感が落ち着くと、モモンガに湧き上がったのは憤怒だつた。抑え込まれる怒気だがその度に新たに湧き上がつてくる。

「クソ！クソ！クソ！」

モモンガが地面を蹴り上げるたびに大量の土が掘り出される。

主人の今まで見た事のない憤怒にアルベドが恐る恐る声を掛ける。

「あ、AINZ様、どうかお怒りを御静めください・・・」

アルベドの声にモモンガの冷静さが急速に戻る。

「すまない、今の失態は忘れてくれ」

絶対の主人らしからぬ行動を取つた事を謝罪する。

「どんでもございません。私のお願ひを聞いていただきありがとうございます！ご命令通り全てを忘れさせていただきます。ですが、いつたい何がAINZ様のご不快に思わせたのでしょうか？お伺いできれば二度と――

「お前のせいではない、アルベド。指輪は発動したが、その願いが聞き届かれなかつたと知つたからだ」

黙したまま聞き入るアルベド、そこに割つて入るのはフェンリルだつた。

「モモンガさん、あれは・・・」

「超位魔法で敵わない力は一つです」

モモンガと同様の答えを導き出したフェンリルは忌々し氣に吐き出す

「となると、やはりワールドアイテムですか・・・」

ワールドアイテム、ユグドラシルに存在した二百のアイテム、他のアイテムを超越した世界一つと同等の力を持つバランスブレイカー、それであるならばアンデッドの精神支配など容易いことだ。

「そうです」

それを失念していた。こちらがギルド拠点ごと転移したなら他の誰かが同じく転移したとしてもおかしくはない。そしてその誰かがワールドアイテムを所有していてもおかしくはない、自分が持つているのだから、そうあつて当然だ。

そして思い出したのは外に出ている他の守護者達の事だった。「アルベド、外に出ている守護者をすぐにナザリックに戻せ。帰還したら精神支配を受けていないか調べる必要がある。すぐに玉座の間に戻るぞ、それが済み次第、宝物庫に向かう」

モモンガがシャルティアとの対決の準備を済ませ、戦いの場へと赴こうとしたときフエンリルが自分も共に行くと言い出した。
その申し出に首を横に振る。

「これは私がやります」

フエンリルの力を借りればシャルティアを圧倒し何もさせぬまま倒すことが出来るだろう。

断る事は非合理的だと自分でも思う。勝つための手段、それも必勝という重要なピースを自分で手放すなど普段ならばあり得ないことだ。

だが、シャルティアを殺す。これは他の誰にもさせる事が出来ない、自分だけが、ギルド長である自分にしかできない仕事だ。

それにフエンリルにこれを手伝わせてしまえば守護者達に無用な恨みを買わせてしまうかもしれない。

「そうですか、モモンガさんならそう言うと思つてました」「え？」

断つておきながらモモンガはフエンリルがあつさりと引き下がつ

た事に不思議に思った。

「まあ断られると思つていました。モモンガさん責任感強いですか
ら、俺にシャルティアを倒す手伝いをさせる事で他の守護者に恨みを
抱かせるような事はさせないだうなつて。それにAINZ・ウー
ル・ゴウンのギルド長としてこれは他の誰にもさせる気はないでしょ
?」

見透かされていたのかとモモンガは頭を搔いた。

「そうですね。変だと思われるでしようけど、私は守護者達の事を子
供のように思っています。そしてその子供たちが殺し合うのを見た
くないんです」

「そんな事はありませんよ、誰でも大切なものはあります。守りたい
んですよ。AINZ・ウール・ゴウンの全てを、だからギルド長と
しての仕事をしようとしている」

「そうです。AINZ・ウール・ゴウンは私の全てです。だからこれだ
けは私がしないといけない」

「分かりました。でも付いて行きますよ。モモンガさんの邪魔をさせ
ない為に周囲の警戒くらいはさせてくださいよ」

「危険です!・シャルティアを精神支配した相手はワールドアイテムを
持っているんですよ!」

「どこにその相手もしくはその仲間が潜んでいるか分からない、だが
フェンリルは特に恐れる態度を出さない。」

「ああ、それなら大丈夫ですよ。俺ワールドアイテムの効果受けない
んですよ。まあそのおかげでワールドアイテム装備できないんですけどね」

ハハツとまるでその日の天氣でも言うように軽く言い放つた言葉
に、モモンガは驚いた。

「え!?何でですか!?」

「俺の種族忘れてませんか?」

「人狼ですよね?」

「それも一つですけど、俺の種族へ世界を喰らう魔狼〉ですよ。隠し特
性でワールドアイテムの効果を受けない、また所持できないつてのが

あるんですよ

今、思い出した。そうだフェンリルはユグドラシルで世界の敵とされている種族であった。

「そうでしたね」

「ゲーム内でもなれる人が限られる、というよりも人が少ないレア種族ですからね。それにその情報が出たら更になる人が少なくなってしまって、そのお陰でなれたっていうのもあるんですけどね」

「世界を喰らう魔狼」という種族はユグドラシルでは各ワールドで一名のみがなることが出来る非常に珍しい種族である。公式に世界の敵という設定である為非常に強力で凶悪なスキルやステータスを秘めている。

ある条件と幾つかの特殊なクエストでのみ稀にドロップするアイテムを大量に必要とする為、そのアイテム収集で挫折する者が多く、さらに初めてなった者がその隠し特性の情報を流した為、実際になつたことがある者はフェンリルを入れて30人にも満たないレア種族である。

そして何よりも目指す者が少ない理由は、死んだ場合、種族を?奪されその座が空席になり再度なるには再び大量のアイテム集めが必要となる。その苦行と維持し続ける困難からなろうとする者が少なかつたのである。

「だから行きますよ。モモンガさん、せめてそれ位はさせてください」「分かりました。では周囲の警戒お願いします」

モモンガの言葉にフェンリルが胸を叩く

「任せてください。誰にも邪魔はさせませんよ」「それじゃ行きますか」

モモンガとシャルティアの戦いは熾烈を極めたものであった。

戦いの場となつた大地が乾いた砂漠となるほどに。

シャルティアは打ち取られモモンガの第一目的は果たされた。

だが懸念されたワールドアイテムを使用した者、もしくはその仲間は現れる事は無かつた。

9話

シャルティアが復活し、モモンガがアダマント級冒険者へフェンリルはアダマンタイトになることは出来なかつたが共に討伐した功績からオリハルコン級冒険者となつてから約2週間が経つた。ナザリックのモモンガ自室でフェンリルと机を挟んで話をしていた。

他愛もない話であつたがフェンリルの放つた言葉にモモンガが驚きの声を上げ、腰掛けっていた革張りの椅子から立ち上がつた。

「どうしてですか!?な、何か、不満でも」

突然仲間が居なくなるかもしけないという事態にモモンガのトラウマが触発される。物理的に失われている脳に何かしてしまつたんだろうかと色々な事が駆け巡る。骸骨の表情は変わらないがもしこれが人の顔であれば青くなつていると言われてしまう事だろう。

モモンガの慌てようになだめる様に話を続ける。

「落ち着いてください、不満とかそういうのではないですから」「ならなぜですか!?

不満ではないのならば、なぜ急にナザリックを出て行くなどと言い出したのか、モモンガには分からなかつた。

「いや、単純に冒険をしたいなあと思いまして」

へへッと子供の様に笑う、それに吐けないため息を吐きモモンガが脱力する。

「もう、驚かせないでくださいよ。急に出て行くっていうから」「いや、言葉足らずで申し訳ない」

頭を搔いて謝罪を口にするその姿を見て、モモンガは椅子にドカツと深く腰を下ろした。言葉が足りないなどというレベルではない。「でも冒険ならもうしてるじゃないですか、冒険者になつてますし」

モモンガの言う通りこの2週間の間、幾つかの依頼を受けてこなしたが、いずれもフェンリルを満足させるものではなかつた。

「そうなんですけどね、今ままあの都市に居てもつまらないといふか」

「つまらない……ですか？」

「何と言えばいいんですかね、ん、冒険者モモンと活動拠点が重なっているっていうのも危険だと思うんですね」

「危険？」

「ほぼ同時期に現れ、同じように昇進、まあ俺はオリハルコンですけど、これを奇跡と見てる人もいれば——」

「知り合い、もしくは仲間であると思う人がいる」

「そうです。そう見るのも不思議じゃありません。今のところ協力して吸血鬼を倒した程度で接点を持たないようになりますが、もしシャルティアにワールドアイテムを使つた本人もしくはその仲間さらにはそいつ等が属しているかもしれない組織や国の目や耳に入つた場合、現状のままというのは不味いと思うんですよね」

フエンリルの意見にモモンガが、ふむ、と頷く

確かに、見る者、話に聞いた者がどう予測するかは分からない、だが聰いものが見聞きした場合、仲間もしくは何かしらの繋がりがあると考えるだろう。そうなると早めに手を打つべきだ。

「分かりました。そういう理由なら仕方ありませんね。でもだつたら私が——」

「いやいや、ほら！モモンは吸血鬼を追つて来たっていう設定があるじゃないですか！それなら俺のウォルフは特に設定無いですし！ね！」

その慌てようモモンガが疑惑の目を向ける。
「本当に？」

モモンガのプレッシャーに膝から崩れ落ち感ねんしたように本音を吐き出す。

「くつ、モモンガさんつ！オレ、冒険したいです！」

それが本音か、良くも悪くもフエンリルは正直である。だが確かにフェンリルの言う危険もそのとおりだ。これからはなるべくモモンとウォルフは別々に行動した方が良いだろう。

「まつたく、仕方ないですね。分かりました。良いですよ、でもどう言つて行く気なんですか？」

「ああそれなら、武者修行つてことで行こうかと思うんですね。見た目が若いのでそれでいいのかと」

確かにウォルフの姿は10代半ばか後半と言つた所だ。武者修行

という事なら不自然ではないですね。でいつ頃にするんですか?」

「ナザリックの鍛冶師に頼んでる鎧が出来るのが明日なので・・・諸々の準備を考えて3日後くらいですかね」

「場所は?」

「そうですね・・・名前の響きで・・・帝国!」

案の定アインザックに帝国に行くと言つたら必死で引き留められた。しかしモモンを見ていたら更なる修業が必要だと押し切つた。だが都市長まで出て来るのは思わなかつた。

それから3日後のエ・ランテルで2番目に大きな宿屋の一室、そこでフェンリル達が荷の最終確認をしていた。

クレマンティースの話ではここから帝国までおよそ5日はかかるであろう道程だ準備は入念にしなければいけない。

「えつと、大きい荷物はもう積んであるんだつけ?」

真紅の鎧を纏つた銀髪の青年の問いに長身の妖艶なダークエルフが答える。

「ええ必要なものは昨日のうちに用意して、もう積んであります」

「そうか――」

「ねえもう準備できたあ?」

ノックすることもなく入ってきたのは氣だるげなクレマンティースだ。その姿を見るなりネルの目が鋭く光る

「あなたがなぜここに?表の馬車を見張る様に言われていたはずでしょう」

「見張りつてさあ、あの馬がいるんなら必要なくない?」

クレマンティースの言うあの馬とは、この宿屋の前につながっているフェンリルの馬の事だ。

名を黒帝号といい、フェンリルがユグドラシルで育てていた移動用

のペツトにしてレベル40程度の速度に優れた魔獸で速度向上系のアイテムを装備させることでさらに速度が速くなっている。八本足の馬スレイプニールに酷似しているが姿が似ているだけでこの世界のスレイプニールより二回りは巨大だ。普段は召喚用の指輪に封じられているが、帝国までの足として召喚したのだ。

宿屋の柱に細いロープで大人しく繋がれ、その後ろには旅に必要な荷物の積んである大人六人は乗れるであろう幌馬車が付いている。だが道行く人からは理不尽な暴力が形を成したようなその姿に遠巻きに見ているだけだった。

フェンリルが部屋の窓から下を覗いてみると誰一人、黒帝号の近くによるどころか誰もいない。

これではこの宿屋の営業妨害もいい所だ。

「確かにクレマンティーヌの言うとおりだな、誰も近づこうともしない。ところでその鎧はどうだ？」

「最高だよ。まるで鎧が身体の一部みたいで重さもまるで感じない、さすがフェンちゃんの用意した魔法武具って感じ」

クレマンティーヌが今身に着けているオレンジ色の鎧は、フェンリルが材料を出しナザリックの工房で作らせたものだ。ミスリルを中心に一部にアダマンタイトを使用することで以前のビキニアーマーのような鎧よりも肌の露出が激減している分、鎧としての耐久性と防御力が上がっている。さらに筋力向上、素早さ向上、低位の毒・麻痺の抵抗、などの能力も付与されたことで以前よりも力が強くなり、より素早く動くことが出来るようになつた。どの能力もユグドラシルでは初心者向けの構成だがこの世界では十分にその威力を発揮してくれるものばかりだ。

改めてフェンリルがクレマンティーヌを見る。露出は確かに減っている。前の鎧としての意味がまるでないビキニアーマーよりは鎧の意味を成している。

胸だつてちゃんとプレートで守られている。

だが腹や内腿が丸出しだ。その白く柔らかそうな肌をしている腹と内腿に目がいく、男なら当然だよね

「なに？どうかした？」

腹と内腿を見ていたなどと言えるわけもなく、さりげなく目を外す。

「いや、何でもない。そうだ。忘れてないだろうな？」

「忘れる？・・・ああ、ここを出たらってやつ？」

「そうだ。この部屋を出たらお前はもうクレマンティーヌじやなくなるからな、ちゃんと名乗る名前と設定覚えてるよな？」

「大丈夫、大丈夫、名前はエルネスタ、フエンちゃんのお義姉ちゃんでしょう？」

「フエンちゃん言うな、ウォルフの姉だ」

「お義姉ちゃんでしょ？」

俺の言う姉となんだかニュアンスが違うようだが大丈夫だろう。などと思つていると

「マスター・・・」

「どうした？ネル・・・さん」

振り向くと頬を膨らませむくれた顔のネル、この顔はまずい

「私の時の偽名よりちゃんとしていませんか・・・」

確かにネルの偽名はただ単純に逆さまにしただけのルネだ。ちゃんとしていないと言わればそうかもしけない

「いや、いやいや、ほらネルは誰も知られていないでしょ、クレマンティーヌはバレると色々面倒だし、だから全く違う名前にしないといけないし、クレマンティーヌとエルネスタなんて何も共通点無いでしょ、ね！」

必死に言い訳を考える。自ら作り出したN P Cとはいえ今生きている全てを作り出したわけではない、ネルとエ・ランテルで数週間暮らして分かつたことがある。

それは意外と嫉妬深いという事、いや他の女性もそうなのかもれない、アルベドという例もあるがリアルで女性との接点があまりなかつたフエンリルには色々と分からしいことが多い。

とある日、冒険者組合の受付嬢に良い依頼を回してもらおうと思い、精一杯褒めていたらそれをネルにナンパしていたと2日ほど不機

嫌だった。

また違う日には、クレマンティーヌに忠誠の印として不意打ちで唇を奪われた際には、ネルの雷が落ちる前にクレマンティーヌはさつさと逃げ出し、自分だけ一晩中正座をさせられ雷をいくつも落とされた。おかげで許してもらう条件に毎日最低1回キスすることで許してもらえた。キスの箇所を指定されずに済んだのはネルのミスで、頬にするたび最初は嬉しそうだつたのに段々と不満気になつていつたのは目をつぶろう。

「どうでしようか？」

「そうだよ！それにネルって名前は俺が付けたものだ。それを余り弄りたくないなかつたんだよ」

我ながら上手くない言い訳だがいけるだろうか

「そうですよ・・ね・・・そうですよね！私にはマスターから頂いた名前がありますよね！」

いけた！

一気に機嫌が良くなり満面の笑顔のネル、だが今度はクレマンティーヌの機嫌が急降下している。

「何か、私蚊帳の外じゃない？ねえウォルフ、お義姉ちゃんの機嫌も良くしてえ」

後ろから覆いかぶさり耳元で囁くような猫なで声で甘えてくる。もう付き合つていられないと少々乱暴に振り解く

「もうー出発するぞー！」

ドスドスと怒つているとアピールするようにワザと大股に足音を立てて部屋を出て行く。

「ちえ、また奪おうと思つたのに」

「マスターの機嫌が悪くなつたのはあなたのせいですよ」

「はあ？アンタが面倒なせいですよ、自分の機嫌直すためにキスしてもらうなんて、愛されてない証拠じやないのか？しかもほつぺたに」ほつぺたというワードを強調して挑発するクレマンティーヌに、ネルの目が変わつた。

今この女は何と言つた。造物主であるフェンリルにそうあれかし

と創造された私を愛されていないだと、心の中に嵐が訪れる。何もかもを薙ぎ倒し吹き飛ばす嵐が

「殺すぞ、メス猫があ！」

「やつて見せろよ。黒豚あ！」

二人ともその美しい顔を殺意に歪ませ、膨れ上がった殺意が弾け飛び、今まさに殺し合いが始まろうとしたその時、絶対零度の氷柱のような殺意が背中を貫く、それが無理矢理に二人を冷静にさせる。二人の背中から貫いた殺意は部屋 자체の温度も急速に下げていくような錯覚さえ覚える。

「二人とも、何をしているんだ？俺がいつまでも何もかもを許すと思っているのか？ そうだとするなら俺は悲しいな」

部屋の出入り口に先程、出て行つたはずのフェンリルが静かな怒りを灯らせた目で二人を見ていた。

ネルとクレマンティーヌは震えた。絶対である主に殺意を向けられていることもどうだが何よりも、忠誠を誓つた主を悲しませてしまっている。この事実が二人を現実に引き戻した。

「も、申し訳ありません…」

「ごめん」

謝罪の言葉を口にし俯く二人だが、これで許されるとは思っていない、思えない。たとえここで捨てられようとも仕方がない。泣いてすぐる事は許されないだろう。

罪人が首を刎ねられるのを待つような沈痛な面持ちの二人に、しまつたと思った。だがここで簡単に許してしまつては元の木阿弥だろう、ならこそ条件付きで許すのが良いのだろうか、こういう時に主として立派に上に立つモモンガがすごいと心の底から尊敬する。

本当に、この雰囲気を作つたのは自分が怒り慣れていなかから胃が痛い、これがモモンガさんの言つていた胃の痛みか、本当に尊敬します。

沈黙が続く中、まずいよなあ、とか、これからどうしようとか、ぐるぐると考えていると意を決し、自らを落ち着かせるために一つ息を吐き、態度を和らげる。

「はあ、今回だけだ。もう無理に仲良くしろとは言わないが、二度と俺の前で醜く争うな。分かつたら顔を上げて出発するぞ」

「はい」

二人の下がつた気分はそう簡単に上がるわけもなく、フエンリル達は気まずいまま帝国へと出発することになった。

その日の天気は雲一つない快晴だつた。

バハルス帝国、帝都アーウィンタール

この帝都に入るための門、その横には2階建ての建物がある。

検問所、ここは皇帝ジルクニフの大改革によつて、国の歴史上最大の発展を遂げていく中、日々多くの物資や人材が流入に目を光らせてゐる。

「なあ、あれなんだ？」

検問所の2階で寛いでいた兵士の一人が何かに気付き、隣で同じく寛いでいた同僚に話し掛けた。

「ああ？ どれだよ」

「ほら、あれだよあれ」

窓から示された先を見るところに向かって進む幌馬車が一台、それ以外は特に異常はない。わざわざ話し掛けて来るからなんだと思えば

「ただの馬車だろ」

「良く見て見ろつて、幌馬車に比べて馬が大きくないか？」

もう一度よく目を凝らして見て見ると、確かに普通の馬より遥かに大きい、それに足の数が多い

「まさかスレイプニール？ おい今日、貴族が来る予定あつたか？」

「いや、そんな報告聞いていないぞ。それに貴族が来るなら護衛が付いてくるだろう」

もつと言うなら幌馬車などではなくもつと作りのしつかりした馬車で来るだろう。スレイプニールという馬に似た魔獸は非常に高価なもので並みの金持ちでは手を出す事すら出来ない。そんな魔獸が引いているのが高級な馬車ではなくただの幌馬車というアンバランスさが異様だ。

「ではあれは何だ？」

そんな疑問など関係なしにスレイプニールの幌馬車は検問所の前へと到着する。

検問所の近くに居た一般の人々はその走つてくる姿を見るなり到着する前に蜘蛛の子を散らすように逃げ出していた。すると外に居た兵士はもちろん、検問所内に居た兵士たちも混ざり総勢十名でスレイプニールを取り囲む。

巨大な大人四人が手を繋いで一周する胴体は引き締まり、足の一本一本の太さは巨体を支えるには十二分でその足から繰り出される蹴りは今ここにいる兵士など一撃で死を招くだろう。全身を包む艶のある漆黒の毛並み、成人男性の胴回りより太い首に生えた風になびく鬚は王者の風格すら覚え、兵士たちを遙か頭上から見下ろすその黒珍珠のように輝く眼には兵士たちに囲まれてなお怯えは見えず自らが強者であるという自信が見える。これがスレイプニールの王だと言われば百人が百人「そうだ」と言うだろう。

その異様なまでの風貌は周囲の者を圧倒していた。

兵士たちはスレイプニールを見たことが無いわけではない、皇帝の乗る超高級馬車を牽引しているのを何度も見たことがある。だがこれほどまでに巨大なものは見た事が無い。

スレイプニールがフンッとひと際強く鼻息を吐き出すと兵士たちが一斉に武器に手を掛けた。いつ暴れだしても対処できるように臨戦態勢を取る。

だが兵士達の誰もがこの魔獸と戦った所で勝てるとは思っていないかつた。戦いが始まる前特有のピリピリした空気が漂う、それを察知したスレイプニールがグルルツと低くうねり声をあげる。

それを壊したのはスレイプニールの巨体の後ろに隠れていた少年の声だった。

「どうどうどう

いや隠れていたのではない皆、スレイプニールに目を奪われ見えていなかつたのだ。

御車台から降りてきたのは見事な真紅の鎧を着た銀髪の少年、少々興奮しているスレイプニールを落ち着かせるように優しく少年の頭上にある脇腹を撫でる。

敬愛する主人に撫でられたことによりスレイプニールは落ち着き、

それを見ていた兵士の一人が少年に尋ねる。

「こ、これは君の馬かね・・・」

すると馬と呼ばれたことに反応したのか、その兵士を睨み不機嫌そうに鼻息を吐き出した。

「ひつ！」

うかつな言葉を吐いた兵士は短い悲鳴を上げる。それを見ていた周りの兵士は驚いた。この魔獣は人の言葉を理解したのだ。なおかつ人の顔を判断し自らを馬と呼んだ無礼者を睨んだ。それほどまでに高い知能を有しているという事だ。

「どうどう、そうですよ。スレイプニールの黒帝号です」

黒帝号と呼ばれたスレイプニールは機嫌を直したのか所長を睨むのをやめ主人に撫でられるのを堪能する。その姿は大人しい馬と何ら大差はない

「それで君は一体何者だ？」

何者だと尋ねられた少年が答える。

「ウォルフ、ウォルフガング＝ロイエンタール、冒険者をしています」

ウォルフと名乗ったフェンリルがにこやかに笑う。少年らしい無垢な笑顔に兵士は男色の気は無いのに目を奪われた。本人は冒険者と言つたが、傷一つ付いていない美しい顔立ちは演劇で二枚目俳優が演じる貴族そのものだ。

そうであればその見事な鎧を着ているのにもうなずける。

「そうか、では色々聞きたい事もあるのでこちらに来てもらつてもよいだろうか」

相手に警戒を与えないようなるべく柔らかい声で言う。もしかしたら上ずつていたのかもしない、しかしフェンリルは快く返事をする。

「ええ、良いですよ。ルネ！姉さん！一緒に来てくれ！」

呼ばれて幌馬車から降りてきたのは二人、一人は妖艶な雰囲気を纏わせたダークエルフのルネと呼ばれたネル、もう一人は金髪の可愛らしい笑顔を浮かべたクレマンティーヌ、いずれも兵士たちの目を奪うには十分な魅力を持つていた。

「ねえ、まだ入れないの。私疲れちつたあ」

するとフェンリルの所まで来ると笑顔を浮かべていたクレマンティーヌが後ろから覆いかぶさるように抱き着き、耳元で

「……面倒だからあ、みんな殺してあげよっか」

と物騒なことを囁く、その顔は兵士たちからは見えないが先程までの笑顔よりも良い笑顔をしていた。他者の命を何とも思っていない邪悪で無邪気な子供の様な笑顔だ。

そのトラブルしか生まない提案に呆れるフェンリルよりも早くクレマンティーヌを引き？がしたのはネルだつた。

「早く離れなさい！」

一瞬、むつとしたクレマンティーヌだがフェンリルの前で喧嘩をするわけにはいかない、少ない我慢行使して苛立ちを抑え、わざとらしく手を上げてみせる。

「はいはい、離れましたあ。これでいいでしょ？」

「なつ！くうううう！」

その態度にネルは眉をひそめたが歯を食いしばり苛立ちを抑える。

それは何も知らない兵士達にはただの痴話げんかの様に見えた。いや実際はそうだがフェンリルはため息を吐くと二人の頭を軽く小突いた。

「いたつ」

「行くぞ、さつさと手続きを終わらせて宿屋で休もう。……そうだ。

質問は俺が答えるから余計な事を言わないように」

無用なトラブルを起こさないように一人に特にクレマンティーヌに釘を刺す。

「はい」

クレマンティーヌのすねた様な気の抜けた返事に本当に大丈夫なのか一抹の不安が残るが検問所横の建物へと向かう。中に入るといくつか並べられた椅子があり、そこへ座るように指示された。その間に外では幌馬車の中を恐る恐る調べている。

「では名前と出発した場所を」

「ウォルフガング＝ロイエンタール、エ・ランテルから來ました。こつ

ちが仲間のルネでこつちが姉のエルネスター＝ロイエンタールです。

これが紹介状」

一つの丸められた羊皮紙を差し出す。それを開くとエ・ランテルの冒險者組合から発行されたものであり、組合長であるアインザックのサインに偽造防止の印も押されている。

内容は特筆すべき点もない本当にただの紹介状、帝国の冒險者組合に宛てたものだ。

「ふむ確かに本物だ。でここに来た目的は？」

確かにこれは本物だ。それに冒險者が拠点を変えるのはそう珍しくはない、だが目の前の三人からは冒險者特有のギラギラしような危険な雰囲気を感じない。礼儀正しく物腰の柔らかい者がいないわけではないが大抵そういう者は出自のしつかりした教育を受けた者が多い、それ故に実は何か訳ありの、それこそどこかの大貴族の隠しそういうトラブルの元になるのではないだろうか、と兵士は怪しんだ。

「修行です」

冒險者が修行とは、ますます怪しい

「そうか、ではプレートを見せてくれ」

修行中と聞いて、せいぜい鉄が良い所だろうそう高をくくっていたが、鎧の中にしまわれていた物を取り出し差し出されたのは

「これは・・・オリハルコン！まさか！」

裏を見ると二つ名の真紅の稻妻とウォルフガング＝ロイエンタールの名が記されている。

兵士の受け取った手が震える。実力社会である冒險者においてこれを偽造など出来るはずがない。

「し失礼しました」

兵士の疑惑の目は強者への尊敬の眼差しとなり、態度もそれに準じたものになつた。恭しく返されるプレートを受け取りと首にぶら下げる。

「まだ残っている手続きは？」

「いえ！もう行つていただいて構いません！」

「え？本当に？」

立ち上がり直立不動で敬礼する。本来ならこんなことは一冒険者にするべきではないが、強者への尊敬がそうさせた。

「はい！」

「ですか、では・・・あつどこか良い宿屋を知らない？三番目位に」

「ん～なかなか良い部屋じゃない？」

鎧を脱ぎ、大きく柔らかなベッドを一人で堪能するクレマンティーヌが評したように兵士に紹介された宿屋は確かに良い宿屋だった。

「どうでしょうか？」

ナザリックの部屋を知るルネは別の評価を下した。

同じ部屋という注文で用意されたのは三人で過ごすには十分な広さを持つ部屋に文句はない、置かれている調度品も一流とまでいかないが良い物だと思う。だがベッドが一つというのには不満がある。大人三人寝るには十分な大きさだが、おそらく宿屋の主人が気を利かせてくれたのだろうが、それはいらなかつた。

フエンリルが椅子に座り目の前のテーブルの上には持つてある路銀の全てが種類分けされている。

「えっと、金貨で54枚、銀貨が73、銅貨94・・・」

まだこの世界の貨幣というものに慣れないフエンリルは頭の中で一度日本円に換算しなければ正しい価値がつかめない。

モモンガさんが言うには全ておよそだが1銅貨が1000円、1銀貨で1万円、1金貨で10万円、ここにはない白金貨が1枚100万円、つまりここには622万4千円あるという事だ。

三人で普通に1年暮らすには十分な大金だが、オリハルコン級冒険者として暮らすには心許ない金額になつてしまふ。モモンガさんが宿屋にかかる金は無駄だと言つていた事が骨身に染みてくる。

位の高い冒険者になればなるほどそれなりの生活をしなければならない、そうすることで他の冒険者の憧れとなりそなりたいと思わせる。もしトップとなる者がみすぼらしい生活をしていればそういうたいと思う者など現れるわけもなく冒険者組合としても困つた事

態になるわけだ。

より高難度の依頼を受けるためにモモンガと協力してオリハルコンになつたのにまさか生活水準まで上げる必要が出て来るとはとんだ落とし穴だつた。

その為、今の手持ちでどれくらいそれなりの生活は維持し続けられるか計算してみる。

この宿屋が朝と夕食が付いて一泊一人5銀貨、これで一日15銀貨の消費、と銀貨の山から消費される分を一枚ずつ右手で取り、左手に移していく。

飲食不要のモモンガよりさらに面倒なのがこちらは飲食が必要なので余計に金が掛かつてしまう。

店によるがオリハルコン級冒険者となれば、やはりそれなりの店に行かなければならぬのだろう。なるべく食事はこの宿屋で取ることにして昼食代を以前食べた時の事を参考にして一人で一日1銀貨としてみよう、だがここで問題が出てきた。それはフエンリルの身体はひどく燃費が悪いという事だ。人化でパワーダウンしてる分、食事量は落ちるがそれでも一食平均10kgは平気で食べる。

昼食で前に二人の5倍は食べたので軽く5銀貨、いやそもそもこの宿屋の食事で事足りるのだろうか、そうするともつと食費が掛かる下手をすると20銀貨は飛んでいく。

となると一日36銀貨、雑費として1枚追加して左手には37枚の銀貨が小さな山を作つている。

これを日本円に換算すると37万、37万円？

『37万!? ザる計算だとしても高すぎるだろ!』

そんな生活してては1か月も持たない。そして今まで自分がどうほどセレブ生活をしていたのかが分かり、ここでの生活の仕方を考えなければならないとフエンリルは頭を抱えた。

「どうで聞きましたか？」

皇帝執務室で行われていた帝国の行く先を決める熱い討論の休憩中にニンブルが閑話休題として隣に投げかけた。

「何をだ？」

投げかけられた人物の名はジルクニフ・ルーン・ファーロード・エルリニクス、バハルス帝国皇帝にして鮮血帝と呼ばれる若き皇帝だ。

「今、巷である話題が上がっています」

「ほう、どんな話だ」

「何でもつい三日前にエ・ランテルからある冒険者がこの帝都に入つたそうで」

「冒険者？ 何も珍しいことではないだろう」

普段から人の出入りが激しい帝都だ。冒険者が一日に百人入つたところでなにも驚かない。

「その冒険者は巨大なスレイプニールと美女二人を連れていたそうで」

いかにも民の好きそうなまるで演劇の話だ。

「ほう、スレイプニールと美女二人とはさぞかし羽振りの良い者なのだろうな」

並の貴族では到底手に届かぬほどの魔獸を連れているとは、よほど腕の立つ者が大貴族の息子だ。だがわざわざニンブルがその程度の話をここですることは思えない。

「それだけではありません。この冒険者が問題なのです」

「問題？ どうせ粗雑な者で美女と野獸だとでも言うのか？」

ニンブルは首を横に振る

「いえ、美しい銀髪をした年端も行かぬ少年で、芸術品の様な真紅の鎧を纏っているとか」

「なんだそれは、新しい演劇の話であつたか？」

「いえ、私も信じられませんでしたがどうやら事実のようです」
にやりとジルクニフが笑う。わざわざ話すという事はある程度調

べているようだ。

「名は何という」

「ウォルフガング＝ロイエンタール、年は18と若いですがオリハルコン級冒険者のです」

「ほうオリハルコンか、その男見て見たいな。」

帝国は、ジルクニフは、常に人材を欲している。わずか18でオリハルコン級冒険者となる程の実力者であるならば帝国最強の四騎士に並ぶ程の逸材、いやそれ以上になる可能性を持つてゐるならばこの手に欲しい。

帝国に来てから四日、到着の翌日には組合に挨拶がてら依頼を探してみたが目ぼしいものは無く、オリハルコン級冒険者にふさわしい依頼は今は無いという返事をもらつた。

その旺盛な食事ぶりに一人に「見ているだけで胸やけがしてくる」と断られ、一人でフェンリルが百舌鳥亭で二度目の夕食を食べていると、急に店が混み始め一人の男が入ってきた事で周囲の気配が変わつた事に気付いた。

「ここ、よろしいですか？」

原因の男がにこやかに話し掛けてきた。

「どうぞ、連れもいなくて寂しく食べていただので」

「そうですか、私も一人で来たのでちょうど良かつた。料理が来るまで話をしませんか？」

にこやかに微笑みを浮かべる男の服装を見れば平民が着る物と変わりは無いが、わずかに見えるアクセサリーからはわずかながら魔力を感じる。

非常に緊張した面持ちで店員が男から注文を取ると奥へと下がっていく、店員が緊張するのも仕方が無いことだろう何しろこの帝国の皇帝ジルクニフなのだから

「それにしてもすごい量を食べますね」

フェンリルの前には半分ほどまで食べられた山盛りの料理、それが

面白いぐらいにフェンリルの胃袋へ収まつていく

「体が資本だからね。いざという時に腹が減つて動けないじや話にもならない」

いくらなんでも食べ過ぎだらうとジルクニフは思った。

「どうい事は、お仕事は冒険者ですか？」

「そうだよ。まあ飯屋に鎧を着ている奴なんか冒険者位しかいないでしょ？」

この店で武器を腰にしている者は幾人か居るが、鎧を着ている者はフェンリルだけだ。

「たしかに、それにしても見事な鎧ですな、さぞかし名のある名品と見た」

「身に着けた者に力を与えあらゆる災厄から守ると言い伝えられている先祖伝来の鎧さ」

もちろん嘘だ。先祖伝来という程の歴史も当然あるわけない。

だがジルクニフはほう、と頷いた。長い歴史を誇る帝国でもこれほど見事なまでの鎧など見たことが無い。やはりただの冒険者などではない。さぞかし名のある名家の出身であると予想を立てる。

「ところで、さつきからこつちをうかがつているのはアンタの仲間かい？」

まるで今日の天氣でも言うようにさらりと言われた言葉にジルクニフは驚いた。表情には出さないがなぜ分かつてしまつたのかと、「ううん、店内に3・・・いや4人、店の外に8人つてところか」「何をおつしやつているのか分かりませんが」

数も合っている。なぜ分かつたのか素直に聞きたいところだがそんな事聞けるわけもない。店内にいるのはいずれも客に変装した帝国きつての変装の名人ばかりで、見事に客に溶け込んでいる。「そうか？じゃあ試してみるか」

「なにを——」

目にも止まぬ動きだつた。テーブルの上に置かれていたナイフが消え、ナイフの背がジルクニフの左の首筋に当てられている。周りの客が気付くよりも早く反応した者がフェンリルの言つた数と同じ

4人いた。

それを見たフエンリルは満足した顔でナイフを他の客が気付く前にまたも目にも止まらぬ速さで元置いてあつた場所に置くと立ち上がり

「何を目的に近づいたのかは知らないが、今度からはもつと上手くやるべきだな」

そう言い残し店員に勘定を払うと店を出て行つた。

後に残つたジルクニフはフエンリルの姿が見えなくなると、どつと額から汗が流れ出た。

帝国の権力争いから幾度も死にそうになつたことはあつたが今は死んだと思つた。

何もかもあの男の手のひらだったという事か、だが幸いなことに自分の身分までは分からなかつたようだ。考え込んだままピクリとも動かないジルクニフを心配した護衛の4人が傍にやってきた。

「お前達、今の動きは見えたか？」

4人が互いの顔を見たが誰も見えた者はおらず、首を横に振つた。

「いえ、あまりにも速過ぎて——」

「そうか、あの男はお前達いや店の外で隠れていた者全てが分かつていたぞ」

「まさか、そんな」

4人は信じられないと言つた顔をした。

「城へ戻るぞ、あの男に着けた尾行もすぐに戻させろ。不興を買うわけにはいかん。城に戻つたら執務室にニンブルを来させろ」

慌ただしくジルクニフが城へ戻つてから約30分後

「失礼します陛下」

ニンブルがドアをノックし応答を待たずに部屋に入る。中ではジルクニフが考え方をしていた。

「来たかニンブル、早速だがたしか近隣の村にモンスター被害を訴えていた所があつたな？」

帝都から北へ人間の足で3日程の距離にあるコルヘ村に大規模な

モンスター被害が出た。

「はい、討伐軍の編成が終わつたところで明日には出発しますが」「そこにウォルフガング＝ロイエンタールをねじ込め」

「なぜと聞いても？」

大規模と言つても十分に軍で対処できる案件だ。そこに冒険者を組み込むと兵の士氣にもかかわつてくる問題だ

「先刻会いに行つたのだ。想像以上の男だつたよ。なんとこちらが客に紛れ込ませていた兵、全てが見通されていた。あの男の実力が見たい、お前も同行して見極めてこい」

この程度で四騎士の一角を担うニンブルが出ることはないが皇帝であるジルクニフに命令されたのでは行かないわけにはいかない。

「分かりました。では、いかほどで依頼を出しますか？」

「そうだな、私財から金貨で百枚出そう。これならオリハルコン級の依頼に見合うだろう」

沈む夕日に赤く染められた大地を帝国の騎兵隊が駆けていた。

軍馬の群れは何かに追い立てられるようにいつもよりも速く走っている。

背には乗り慣れているはずの兵士が振り落とされないようにしがみついていた。

この異様な状態は帝都を昼前に出発して少ししてからだつた。いつものように整然と行進していると後ろからついてきた黒帝号が唸り声を上げたと同時に騎兵の命令を無視して軍馬が急に走り出した。そこからネルが軍馬に速度向上などの強化魔法を掛け休みなく走らせ続けた結果、丸一日かかる日程を半日以下で済みそうだ。

後ろから追い立てて来るもの、黒帝号は軍馬を威嚇しながら走る。もつと速く走れ、足が折れようと、心臓が裂けようと、もつともつともつと、もつと速く走れ、我が主を戦の場へと赴かせる為に、そう黒帝号が張り切り走っている後ろで当の主人は悩んでいた。

（やつぱり、怪しいよなあ）

今朝、突然舞い込んできた名指しの依頼、依頼主の身元ははつきりしているし依頼内容もモンスター討伐、場所も帝国の領土内で他国と争っている場所ではない、報酬も申し分ないどころかおいしい。

だが昨晩の事が引っかかる。誰か知らないがこつちに探りを入れてきた者が接触してきた翌日に指名の依頼、タイミングが良すぎる気がする。

しかし依頼主が依頼を出しても良い人物なのか内偵してきたとも思える。

時折、本人は分からぬようにしているのだろうが、何かをうかがうように依頼主である帝国四騎士の一人ニンブルが見てくるのも気になる。

（モモンガさんに相談してみるか？でも今さら聞くのもなあ）

と一人悩んでいると

「ウォルフ殿、村が見えてきました」

ニンブルに声を掛けられ、前を向くと目的地の村があつた。

夜の帳に包まれた村は痛々しい襲撃の跡を残しているだけだつた。先遣隊によつて検分は済んでおり、食い散らかされた残飯のように残つていた人の残骸は死靈を发生させないよう一か所に集められ燃やされた。

命からがら帝都に知らせた村人には残念だが痕跡を見る限り他の村人は絶望的だろう。

明かりのない家中を、光りを発する魔法石のランプを借りてフエンリル達が見て回る。

「どう思う？」

村を見て回つての間にクレマンティーヌは血が飛び散つた壁を興味なさげに見ながら

「特に珍しいことじやないからねえ、ご愁傷様つて感じ？」

ネルは一考すると

「そうですね、一匹のモンスターなどではなく複数のモンスターと言つた所でしようか」

襲撃でメチャクチャになつてゐる部屋をとある探偵の様に隅々までフエンリルは見るが襲つたモンスターなど予想がつかない。

ユグドラシルで數えきれないほどの冒險とモンスター退治をこなしたが、襲撃の痕跡を調べるなんてしたことが無い、いやそこまで再現されていなかつた。

一通り見て回つたところでフエンリルはまるで分らなかつた。

(分かる訳ないじやん。こういう頭使う系の事苦手なんだよなあ、爪痕とか見ても大きいとか小さいとか位しか分かんないし、何かホラーゲームやってる気分)

「ネル、モンスター探知系魔法で村の周囲に結界を張つてくれ」「分かりました」

ネルが結界を張り終え、家を出たところでフエンリルが足を止める(あつ、手を合わせておくか、南無南無)

いくつもこういった場面を見てきたニンブルは慣れるものではないと思っていると、凄惨な現場に手を合わせているウォルフが目に入つた。

「何をしているのですか？」

「ん？ 祈つているのさ、死んでしまえば皆仏って俺の国では言うからな」

見た事のない祈りの仕方だが、死者に祈りを捧げる姿にニンブルは好感を持つた。

「優しいのですね」

「そうか？ 普通の事だろ」

そう言いながらもフエンリルは不思議に思つていた。本来の獣の姿の時には特に大した感情も湧かなかつたのに今は同情している。モモンガも言つていたように心が身体に引っ張られているのだろうか

「ウォルフ、来ました。オーガ3、ゴブリン30」

ネルが結界に引っかかったモンスターの襲来を短く告げる。それに頷くフエンリル

「お仕事しましょかね。エルネスターはゴブリンをルネは周囲の警戒を、何かあつたら連絡してくれ」

「分かりました」

「ひつさしぶりの狩りだあ」

嬉しそうに腰のステイレットを抜く。

透き通る翡翠色の刀身に金の装飾が施されたユグドラシル製の新しい刃、この世界の未だ見ぬ技術で作られたかつてのステイレットはフェンリルを通してナザリックに贈られた為、フエンリルが作らせた鎧と共にモモンガから贈られたものだ。

モモンガからしてみれば未知の技術をユグドラシルでかつてドロップした自身では使う事の無いレリックアイテムで手に入る良い取引だつた。

クレマンティーヌにとつては特別製ではあつたが献上するすることでより強い、それこそ伝説級の剣が手に入るならば安い取引だ。

獲物はゴブリン30匹と少々物足りないが、存分に力を振るつて良い相手だ。

顔が裂けたように笑うクレマンティーヌ

「言つとくが普通に倒せよ」

「大丈夫、大丈夫、普通に殺すから、ふ・つ・う・にい」

可愛らしい笑顔がフェンリルに向けられる。それが心配なんだと頭が痛くなつてくる。

「はあ、まつたく、ニンブルさん先に行きます」

「いつたいどこへ」

「依頼された通りモンスターの討伐に。それでは、遅れるなよエルネ

スタ」

「まつ」

ニンブルが呼び止めるよりも早く、フェンリル達は襲い来るモンスターの元へ走り去つてしまつた。残つたネルはニンブルを無視してより襲撃を感じしやすい場所へと移動し、残されたニンブルが警戒に当たつていた兵によつてネルの言つていた襲撃の知らせを聞いたのはそれから少ししてからだつた。

月明りの照らす大地でゴブリンたちは怯えていた。
人間の女一人に。

現れたのは突然だつた。前に襲つた人間の村に新しいエサが來た。だからオーガ達に気付かれる前に仲間を集め襲撃しようとしていた時だ。

それは現れた。女だ。綺麗な女、白い肌をした旨そうな女、人間を食うなら女が良いそれも若い女、男は硬く筋張つているのが多い、子供は柔らかく美味いが食べる部分が少ない、だが若い女は子供より少し固いが美味く食べる部分が多い。手を食おうか足を食おうかそう考えるとゴブリンたちは下卑た笑みを浮かべる、だがゴブリンたちの願いは叶う事は無かつた。

最初は3匹だつた。捕まえるために襲い掛かつた仲間の頭が空を

飛んで地面に落ちた。

次は女の姿が消え、女の笑い声が聞こえる中、いくつもの仲間の悲鳴が上がった。

それからは何が起きたのかは分からなかつた。

「あつはははは、良いよこれ、最高だあ」

クレマンティーヌは上機嫌だつた。

新たな武器の切れ味は本人の超人的技術と相まつて骨すら豆腐のように切り裂き、ゴブリンの半数は斬つた翡翠の刃は欠ける事無く朱色の血に塗れていた。

そしてフェンリルに禁止されて以来の命のやり取りに興奮が隠せないでいた。

幽鬼の様にクレマンティーヌの身体が揺らめいた。その動きは軽やかでまるで鎧など着ていなかのよう速い、次々と上がるゴブリンの悲鳴と血しぶき、草木のよう簡単に刈られていく命にクレマンティーヌの顔は笑顔になつっていく。

「ほらほらほらあ、死ねえ、アツハハハハハツ」

簡単には殺さない、1匹1匹丁寧に剣の切れ味を確かめる様に切り刻む。

手、肘、肩、足首、膝、性器、腹、目、最後に首を切り落とす。数が減つていくごとに丁寧に、丁寧に、痛みを苦しみを与える。残酷なまでに簡単に殺されていく仲間の姿に本能から湧き上がつてくる死の恐怖に動けなくなつていた1匹だけが残つた。

「ん？ああアンタで最後かあ、でも飽きちゃつたから逃げていいよ」

左手で、野良犬を追い払うようにしつしつ、と手を振る。

気まぐれが何かなのだろうが、それで命が拾えるのはありがたいとゴブリンが逃げ出した。心の中にあるのは復讐心、この屈辱を晴らしてやる。

「ほらほらもつと死ぬ氣で逃げなきや、もつともつと逃げて」

クレマンティーヌの足なら簡単に追いつくことが出来るが、あえて追いかげずステイレットに込められた魔法を試すことにした。

逃げる。逃げる。必死で逃げる。あと少しで隠れる場所の多い森

に逃げ込める。そう希望が見えてきた時、死神が笑いながら切つ先をゴブリンに向ける。

その必死の様を見て死神が囁つた。耳まで裂けた様な凶悪な笑み。

「ザンゲイル・ウインドブレイド！」

翡翠の刃が緑に輝くと魔法が発動し、真空の刃が一直線に飛んでいった。

逃げられた。そう思つた瞬間、真空の刃はゴブリンを胴体から切り裂き、上半身だけが森へと飛んでいった。

クレマンティーヌの新たな武器の名はザンゲイル、日に5回まで込められた真空の刃を飛ばす風属性の中位魔法ウインドブレイドが使える魔法武器だ。

「バツカだなあ、逃がすわけないじやん。アンタらは皆殺しつて言われたんだからさあ、つて聞いてる奴いないかあ」

けられらと笑うその姿は狂人そのものだつた。

その後、凄惨な現場を見た兵士は吐き、恐れおののき、兵士たちの間でエルネスターの名は異常者と恐怖の代名詞となつた。

暗闇に雷光が三つ横に走つた。その跡に残つたのはオーガの死体が3つ、いずれも雷に打たれたように黒焦げになつてゐる。

「やつぱり、弱いよなあ」

ため息をつき、肩を落とす。この世界でいくつかのモンスターと戦つたがいずれもフェンリルを満足させるものは現れていない。

今や黒焦げのこの世界のオーガも初めて戦つたが今までのモンスターよりもいくつか耐久力はあつたが動きに速さが無く、試しに一撃、頭に喰らつてみたがレベル差からなのか体感的に一桁のダメージを受けた程度に感じた。その為に一方的に攻撃して終わつてしまつた。

剣を納め、とぼとぼと村へ戻つていた所にニンブルが兵士たちを連れてやつて來た。

「ウォルフ殿！…ご無事でオーガ達はどこに」

「ああ、もう退治しましたよ。あ、首持つてくるの忘れた」

「まさか、お前達確認をして来い」

オーガ3匹をいくらオリハルコンといえど一人では早過ぎる。

決して疑うわけではないが確認せねばならない。

命令された兵士数名が確認をしに走る。戻ってきたその手には額に生えた2本の角が特徴の黒焦げになつたオーガの首が3つ下げられていた。

ニンブルは驚愕した。この冒険者達は異常だ。

モンスターの接近を誰よりも早く察知したダークエルフのルネ銅級冒険者でありながら30匹ものゴブリンをわずかな時間でばらばらに殺戮したエルネスタ

3匹のオーガをこちらも短時間で黒焦げにしたリーダーのウォルフ

強過ぎる。異常なほどに。

彼らの見た目に騙されてはいけないとニンブルは自分に言い聞かせる。

言葉を間違えてはいけない、間違えて彼らの不興を買うような真似は帝国の不利益になる。それだけはしてはならない。

「お強いのですね。ウォルフ殿のチームは」

「これくらい出来なきや、オリハルコンになれないでしょ？」

ニンブルは耳を疑つた。

オーガは大きな体と強靭なパワーと防御力を誇るモンスターだ。その強さは1匹討伐するのに訓練された兵士が20人は必要だ。それも犠牲が半数出る事を覚悟でだ。

それをこれくらい、オーガ3匹をこれくらいと言つた。

普通の冒険者ならもつと自慢げに自分の強さを誇る様に言つてくる、それをさも当然のことのように言うフェンリルの底知れない強さに恐ろしいと思つた。

「う、ウォルフ殿はなぜ冒険者になられたのですか？これ程お強いのであれば士官など容易いのです？」

「士官？士官ねえ、考えた事もなかつた。俺はこの世界を色々見て回

りたいし、より強い者と戦つてみたい。だから冒険者になつたし誰かの下に就く気もない、今のところはね』

フエンリルの嘘偽りのない心、何者にも縛られる事無く自由に世界を旅を冒険をしたい。それよりもニンブルは士官をする気は今のところない、という言葉にジルクニフに報告することが出来たと考えた。もつと何かを引き出さねば些細な事でも良い

「自由ですか、では、何か欲しいものはありますか?」

欲しいものと聞かれ考える。

(欲しいものか、武器も防具もあるし・・・あつ宿代が馬鹿にならないから賃貸の部屋とか良いなあ)

「家かなあ」

ぽつりと出た言葉にニンブルが食いつく。

「家ですか? 帝都の宿ではござ不満が?」

「いや宿ばかりだと金が掛かるからね。それに自分の部屋つていう落ち着く場所が欲しいかな。あつ、ニンブルさん有名人なんですよ、良い物件知らない? 3人で暮らすから広さは適度に部屋は一人一部屋欲しいので最低3つ、あと場所はなるべくなら治安が良さそうな所かな、そんな感じの物件ないかな? セめて相場だけでも知りたいんだけど?」

「申し訳ありません。今心当たりが無いのですが帝都に戻つたら私の伝手を伝つて何か良い物件がないか調べてみましよう」

「本当に!? いやあありがとう。組合にも聞いてみるけどさ、物件探すなら住んでる人にも聞いてみないとね。借りが出来ちゃうかもな」
あははと笑うフエンリルに笑顔でニンブルは領きながら良い情報を聞いたと心の中にやりとした。

そして借りを作るためにもジルクニフに報告し怪しまれない程度に良い物を紹介しなければ

依頼完了から2日後の昼、戻つてから物件探しをしていたフエンリルはニンブルが皇帝ジルクニフと繋がつているなどと考えもせず紹介したい物件があると呼ばれネルとクレマンティーヌを連れ喜んで出て行つた。

ニンブルに紹介された物件は、帝都で貴族が住む区画にある屋敷の様な外観をしている綺麗で真っ白な壁が特徴の3階建てのフラットマンションだつた。

中を見て見ればワンフロアに一部屋で4人が暮らせる広さを持つた部屋が四つ、望んでいた一人一部屋、3人で暮らすには広すぎるくらいだ。外壁や中が痛んだ様子もないそれどころか組合に紹介された物よりも全てにおいて数段以上に良い物件だつた。

3人とも気に入つたのだがただ気になるのは隣人というよりも誰も住んでいないことだ。

その理由を聞くとニンブルはにこやかに答えた。この建物自体を賃貸するのだという。

この建物は地方に領地を持つ貴族が会議などが行われている間、帝都で過ごすための家、町屋敷だつたが持ち主が没落し借金の方として売りに出されたのをニンブルの親戚が買い、使っていなかつたのをその縁で紹介したのだという。

もちろんニンブルにそんな親戚はいない。

だが元貴族の持ち物だつたというのは本當だ、いや正確に言うならジルクニフが鮮血帝と呼ばれる切つ掛けになつた改革の際に肅清された貴族の町屋敷を没収した物だ。それを市民に貸し出そうとしたのを取りやめフエンリルに貸し出そうとしているのだ。

くれてやつてもジルクニフには良かつたが譲渡する理由も無くそんなことが出来るはずもなく、あまり欲を出して近づきすぎれば怪しまれてしまう。

そんな裏側などを知らないフエンリルにはたしかに良い物件だつた。1年後に家主が使うという期限付きの条件で家賃も金貨10枚

でかなり安い。

そんな普通なら考えられない好条件にようやくフエンリルはこれは不味い事態なのではないかと考えた。

よくよく考えれば帝国四騎士とわざわざ呼ばれるくらいなのだから皇帝と繋がりどころか面識を持つていて不思議ではないというよりあつて当然だ。

という事はあの名指しの依頼は何か裏があつた。ここでフエンリルは不味いと思つた。

ニンブルに一度考えさせてくれと言い答えを保留し別れるとフエンリルは急いで宿に戻りモモンガにメッセージを送つた。

ナザリック9階層

モモンガがコキユートスにリザードマンの村へ襲撃を命令し、執務室で書類仕事をしていると

「モモンガさん、今大丈夫ですか？」

「ん？」

メツセージの声はフエンリルだ。久しぶりに聞いた友の声に手が止まる。

「どうしました？」

滯りなく進んでいた仕事の手が突然止まつたのを見て隣に居たアルベドが何かあつたのだろうかと不安げに声を掛けた。

「アインズ様どうかいたしましたか？」

「フエンリルさんからメツセージが入つた。少し集中する」

静かに頷くと一步下がる。そして表情には出さず心の中で呪詛を吐く。

（なぜナザリックを出て行つた者がアインズ様に連絡を取る事が許される。友であるというだけで真の名を呼ぶことを許されているだけでも憎いというのに・・・）

外へ漏れ出さぬよう憎しみの炎を静かに燃やすアルベドに気付かずモモンガは久しぶりの友との会話を楽しむ

「——なんてことがありますて」

「はははつ、それは大変ですね」

「そうなんですよ。ちょっとあの一人仲悪いんですね……で、あの、実はですね。ちょっと相談がありますよ」

「実はちょっとまずいことになりますて……」

声のトーンが一段下がる。

それに何かあつたのかとモモンガは心配になつた。

「どうしました？ 私でいいなら相談に乗りますよ」

「実はちょっとまずいことになりますて」

「まずいこと？」

「帝国の皇帝に興味をもたれちゃつたっぽい」

可愛く言われた爆弾にモモンガは一瞬理解できなかつたが、無いはずの脳に言葉が滲みると絶叫に近い声を上げて立ち上がつた。

「えええええええ！」

驚きが沈静化され冷静になると咳払いをする

「ア、AIN兹様？」

聞き慣れない主人の絶叫にアルベドは目を見開いて驚いた。

「すまない、今のは忘れてくれ」

「わ、分かりました」

「ほいつじやないですよ！まさか正体がばれたんじや」

フェンリルの正体がばれたとなるとナザリックとの繋がりもどこからか漏れているかもしね。そうなつてしまつたら

「まだ正体はばれてない……はず……です。どういう経緯で興味を持たれたのかは分からないですけど、今かなり良い物件を紹介されていまして」

「物件？ 家買うんですか？」

「いや、宿代が馬鹿にならないのでどこかに良い賃貸でもないか、と二ンブルつて人に軽く言つてみたら貴族が持つていた3階建てのマンションみたいな紹介されて」

「マンション？ それなら別に——」

冒險者としてそれなりの地位にあるならそれ位なら許容範囲ではないのだろうか、それがなぜ帝国皇帝につながるのだろうか

「いやそれがワントロアじゃなくて、その建物丸々何ですよ。しかも家賃が金貨10枚のかなりの好条件」

「え!? マンション全てですか!? それは怪しいですね。でもそれが皇帝につながるというのは飛躍し過ぎじゃ」

「それが、さつき言つた紹介してきた人が帝国四騎士の一人なんですよ」

「帝国四騎士? いかにも凄そうな名前じゃないですか! 絶対皇帝と繋がりますよ!」

「ですよね、ごめんなさい」

なぜ皇帝が活動していなかつたフエンリルに興味を持ったのかは謎だが、このまま何も手を打たずに飛びつくのは危険だろう。

「もう一こつちで話をしてみますから待つて下さい」

「すいません。お願ひします」

ふうと一息つくとアルベドに命令を下す。
「アルベドよ、デミウルゴスをここに呼べ」

「――という訳なのだが、デミウルゴスよ。お前ならどう対処する？」

ふむとモモンガから聞いた話を整理し、少し考える

「そのまま受けてよろしいかと」

怒られると思つていたモモンガは意外な言葉に聞き返した。

「なぜそう思う?」

「皇帝がフエンリル様に興味を持つたのは、おそらくその見目麗しい容姿とかけ離れた強さかと、皇帝が耳にするほどですので帝都ではすでに噂なつて いるはずです」

確かにフエンリルのウォルフとしての容姿はエ・ランテルで強さよりもすぐに有名になつた。帝国に行くとの話が広がつた時には多くの女性が泣いていたのを覚えて いる。

「アインズ様、失礼をご承知でお聞きしたいことがござります」

「良い、フェンリルさんのことであろう?」

「はい、フェンリル様とはいつたい何者なのでしょうか？アインズ様のご友人であり歴戦の勇者であることはお聞きしました。ですが未だ何かを御隠しになつていられるのかと、例えば人狼でありながら常に獣人形態で居続けられることなど」

沈黙、それはデミウルゴスにとつてとても長く感じた。

主人の友人を疑うなど激高されても仕方がないことと考えているからだ。だがそれでも聞かずにはいられなかつた。フェンリルの無謀な行動はナザリックひいては主人の不利益につながるからだ。

だがこれはデミウルゴスだけでなくアルベドも聞いたかつたことだ。

少しの沈黙ののちモモンガが口を開く

「さすがはデミウルゴスだ。もはや隠し続ける事は出来まい。だがまづデミウルゴスの間違いを正さねばならん、今のフェンリルさんは人狼だ。もつと正確に言えば狼型の獣人ベースの人狼だ。彼は少し特殊な種族の重ね方をしてな」

ユグドラシルではモンスター種は種族レベルを上げてより上位の種族へとなつていく、基本種をスケルトンから始めたのであれば次はスケルトンソルジャーやスケルトンメイジなどより上位種となつていく、この種族は通常より上位種へと昇つていくだけがある特定の組み合わせによって同種族でありながら異なるスキルを発揮することがある。それは変異種と呼ばれそれがフェンリルだ。

人狼は本来、獣化スキルを持つていて、これはルプスレギナの様に通常は人の姿をしているが夜にこのスキルを発動することで狼の姿となりステータスアップする。

これがフェンリルの場合は獣化スキルが人化スキルに変化し、狼型獣人から完全な人に変化しステータスダウンする。

「どうようくにフェンリルさんは少し変わつた人狼なのだ。そしてここからが本題だ。アルベド、デミウルゴス、ワールドエネミーを知つているな？」

「はい」

頷く二人だが、実際にはモモンガ達の話を伝え聞いた程度だ。世界

の敵、ユグドラシルで最強の敵

「フェンリルさんはワールドで唯一一人になる事の出来るワールドエネミー、世界を喰らう魔狼だ」

「なつ」

「なんとつ」

二人は絶句する。世界の敵、すなわち主の敵、そう認識した瞬間に敵意が膨れ上がった。

「待て待て！落ち着け！話はまだ終わつておらん！」

「申し訳ありません」

2人は深々と頭を下げる。

「お前たちの全てを許そ。不穏な言葉を使つてしまつた私に責任がある」

モモンガは内心で大量の冷や汗を搔いていた。

（ええく、種族名言つただけでこれなのく、これじやあユグドラシルの説明文のまんま言つたらフェンリルさん殺されちゃうよ）

なるべくソフトに誤魔化しながら説明しようと見え黙つているのを、アルベドとデミウルゴスは主人の不興を買つたと思つた。

「…話を続けよう。世界の敵と言つたがそうではない、彼は世界の終末にその真の力を目覚めさせ終わりを告げる狼なのだ。そういう意味での滅びゆく世界の敵という訳だ」

もちろんそんな事などあるわけがない。昔、設定魔であるタブラから聞いたユグドラシルの元ネタになつた神話などを必死で思い出しながら継ぎ接ぎした出鱈目な話だ。

「そう、彼は人間世界に終末をもたらす巨大な狼だ。人間共が驕り高ぶり世界の支配者を語つた時、眞の姿を現すのだ。人間が築いた全てを破壊し喰らいつくす終末の魔狼、それがフェンリルだ」

出鱈目な話故所々矛盾しているかもしれないが大げさに演技しながら話したが信じてくれるだろうかと、モモンガは無いはずの心臓がバクバクと早く動いている気がしていた。

二人は静かに聞いていた。そしてモモンガの話が終わつても何も言わない。

その姿にモモンガは嘘を見破られ親に呆れられている子供の心境だつた。

(やつぱり信じないよな、こんな大嘘信じる方がどうかしてる)

デミウルゴスを見ると小さく震えている。それにモモンガはやはり怒られると思った。

だがその口から出たのは怒りではなかつた。

「……なん……と……なんと素晴らしい！」

「……え？」

デミウルゴスは怒りで震えていたのではなく感激に震えていたのだ。

「フェンリル様が人間世界に終わりを告げ、新たなる世界の支配者としてアインズ様が立たれるのですね」

(信じたー！……でもフェンリルさんになんて言おう。えらいことになつちやつた)

まるで舞台俳優の様に大げさに喜びを表現するデミウルゴスと対照的にアルベドは静かに喜んでいたが、その内心ではフェンリルへの嫉妬が渦巻いていた。

(アインズ様の隣に、終わりと始まりの対を成す存在など……)

デミウルゴスが何かに気付いたように動きを止めた。

「——そうか、全ては予定調和なのですね」「ん？」

予定調和？何がだろう？モモンガの頭には？が無数に浮かぶ

「今、ナザリックのもとを離れ帝国に行つているのも世界をいつ滅ぼすかどうか見ているのですね。そうであれば全てに納得がいきます。帝国も愚かですね、全てはアインズ様とフェンリル様の手のひらの上で転がされているとも知らず近づいてくるとは愚の骨頂と言わざして何と申しましよう。私が申し上げるべきことなどありません、全てはアインズ様とフェンリル様のご計画の通りに進んでおられるのかと」

(違う違う、あの人ただ遊びに行つてただけだから)

デミウルゴスの中で急上昇するフェンリルの株価に、モモンガは心

の中でツッコミを入れる。

悪魔の中でどんどん間違ったフェンリル像が出来上がっていくがモモンガは訂正出来ず

「そうか、やはりデミウルゴスには見透かされていたか」と相槌を打つしかできなかつた。

「見透かすなどとはとんでもございません。AINZ様にフェンリル様のお話を聞くまでは気付く事すら出来ませんでした」

これ以上話をしていては化けの皮がはがされると考えたモモンガは話を打ち切る。

「では、話は以上だ。下がつてよい。私はこれからフェンリルさんと連絡を取る」

「分かりました。それでは失礼いたします」

モモンガが連絡を取ると、フェンリルは良い家を借りれるとたいそ
う喜んだ。

その喜びようにモモンガは言えなかつた。フェンリルに色々な捏
造設定が付いたことを。

このモモンガが付けた捏造設定はたまたま守護者達の話を立ち聞きしたルプスレギナによつてさらに歪められ、終末をもたらす白き魔狼としてプレイアデスやメイドたちに広まつていくことになる。

新居が決まって数日、フェンリル達は新居に置く家具や必要なものを前日に買い終え、今日は何か掘り出し物が無いかと昼間の帝都北市場に来ていた。

露店に並ぶアイテムを見て回る。

見た事のない何に使うか分からぬ色々な道具を楽しそうに見るフェンリルだが、それとは反対にネルとクレマンティーヌの顔はつまらなそうだった。気に入つたものがあれば買って良いと言われているがどれもが冒険者やワーカーが使つた中古品ばかりで気に入るものが無い。

プラプラと見ながら歩いていると一件の露店の所で足が止まる。

立派な天幕に並んだ商品はさつきまで見ていた冒険者が使うようなアイテムではなく、生活に使われるようなアイテムが並んでいた。その中にはフェンリルにとつて見知った品物がいくつかあつた。

フェンリルがその一つ、自分より少し大きい長方形の白い箱の扉を開けてみると中は棚になつており、そこから冷気が漏れてきた。

「……冷蔵庫だ」

他の商品を見て見れば、扇風機、ライトスタンド、など多少形は違うが現実世界の物とそん色ない物が並んでいた。

驚いているフェンリルに

「冷蔵庫買うの？」

クレマンティーヌが声を掛けた。

「知っているのか？冷蔵庫」

「ん？、まあ珍しいっちゃ珍しいけど、そんなに驚くようなものでもないでしょ？ずっと昔に口だけの賢者が発明してから貴族とかなら普通に持つてるよ」

「口だけの賢者？」

「ずっと昔にミノタウロスでそういう奴がいたんだって、色々なアイテム考えたんだけどそれを作る能力もなんてそうなるのか、説明できなかつたんだって、だから口だけの賢者」

「へー」

店を後にし再び歩き始める。

それは偶然なのだろうか、元いた世界とほぼ同じ外見に同じ機能の物、こちらのは魔法の力で再現されているという差異があるが、こうも似る物だろうか、その口だけの賢者をユグドラシルプレイヤーだと考えれば腑に落ちる。

だとすれば自分たちよりも前に来たプレイヤーはいた。どれほどいたのかは分からぬがクレマンティーヌでも知っている口だけの賢者のように伝承に残るような者もいたという事は世界各地にその伝承伝説は残つてゐるはずだ。

「ん？」

普段なら無意識に気付き対処するのだが深く考え込んでいたフエンリルは避けることが出来ず何かとぶつかってしまった。

目の前には尻もちをついた少女がいる、どうやらこの少女とぶつかつてしまつたようだ。

「すまない、考え方をしていて気づかなかつた」

「いえ、私がぶつかつたのですから謝るのはこちらです」

少女は立ち上がり頭を下げた。

フエンリルは観察するように少女を見る。手には長い鉄の棒、ゆつたりとしたローブに厚手の服、一目でマジックキヤスターと分かる格好

「君はマジックキヤスターなのか？」

突然、自分の職業を言い当てられた少女アルシェは警戒しながらフエンリルを観察する。見た事もない真紅の全身鎧、腰に下げられている二つの剣は装飾からかなりの業物だろう、だが冒険者であれば下げられている胸のプレートがないことから貴族の息子と判断する。

「それが何か？」

元々感情を表に出すことが苦手なので表情は変わらない自分の見た目から舐められたと思い不機嫌に答える。苦労を知らないそうな綺麗な顔立ちにアルシェの目は鋭く嫌悪を帶びていく。

それに気付いたフエンリルは素直に謝罪する。

「ああすまない、別に君がマジックキャスターだからどうこう言うつもりはないんだ。本当にすまない。許してくれ」

頭を下げ謝罪するフェンリルの姿に周りがざわついた。アルシェと同じようにフェンリルをその姿から貴族の息子と判断していたのだ。

それにアルシェは慌てた。鼻持ちならない貴族の息子と思つたフェンリルがこうも簡単に頭を下げるとは

「許しますから、頭を上げてください」

「そう言つてもらえると助かる」

頭を上げるフェンリル、だがその後ろに居たルネとクレマンティーヌはその行動に不満だつた。

自ら神と崇める者が軽々しく頭を下げるとは、それもとるに足らない人間の小娘に許しがたい行動だ。

それを察知したのかアルシェはフェンリルの後ろで鋭い眼光で見下す様に見てゐる二人を見る。

いや正しくは見れなかつた。危険な香りのする薄い笑みを浮かべたクレマンティーヌを見た瞬間、自分の身体が泡になつて消えてしまふかと思つた。向けられた殺意が目に見えない何百もの剣となつて身体を貫く幻覚すら見えた。

一般人であれば軽く氣を失う程に恐ろしい殺意だが幾つもの死線を潜り抜けたアルシェには耐えることが出来たしかし、ネルを認識した瞬間、自らの異能、魔力系マジックキャスターの力量を見破る看破の魔眼によつてトドメを刺されることになつた。

「うぐっ！」

ネルの人を遙かに超えた魔力に耐えられずアルシェが膝から崩れ落ちる。身体から一気に汗が噴き出て息も荒く絶え絶えだ。

「え～ちょっと大丈夫～お嬢ちゃん」

「脆弱な」

「大丈夫か!?一人ともやめろ」

周りの人間には何が起つたのか解らなかつた。ただアルシェが突然具合が悪くなつただけにしか見えなかつた

「・・・だいじよ・・・うぶつ」

吐き気が止まらない。身体に力が入らない。

「大丈夫じゃないだろう。宿屋に送つて行こう」

普段なら断るところだが、この場を、ネルから一刻も早く離れたかった。

「・・・家・・・ではなく、歌う林檎亭・・・に・・・」

「分かつた。歌う林檎亭だな、二人は先に帰つてくれ、俺はこの子送つていくから」

「分かりました」

「はい」

二人は嫌々ながらもそれに頷いた。

歌う林檎亭、普段からワーカーのたまり場の一つになつてゐるこの酒場も他の酒場と変わりなく、昼間から酒を煽つてゐる者たちが多くいた。

それを横目に見ていたフエンリルは、こういうのはどこも変わらないのだと思つた。丸いテーブルの反対側にはいくらか顔色の良くなつたアルシエが水の入つたグラスを見つめている。

「気分は落ち着いたか？」

「ええ、だいぶ良くなつたわ」

「オレの仲間がすまなかつた」

「いえ、ここまで具合が悪くなつたのは私の体質のせいだから気にしないで」

「体質？それはタレントというやつか？これは聞いてはいけない事か？」

情報が命というの冒険者でもユグドラシルでも変わらない、特にそれが自分の生命線の一つとなつてゐるならなおさらだ。

「べつにいい、私はマジックキャスターの力量を見破ることが出来るの」

「見破る？もしかしてそれでルネを見たから？」

「そう、そのルネっていう人が初めて見る位すごいマジックキャスターだつたから」

マジックキャスターの力量を見破るという所にフエンリルは疑問を感じた。力量という事はユグドラシルでのMP、この世界でいう魔法の力、魔力の総量が分かるという事なのだろうか？それはマジックキャスターだけなのだろうか？格闘職中心に習得しているフエンリルでもLv100となればLv60のマジックキャスター位にはなる。昼間で人化でLv40までステータスダウンしているとはいえるLv24分のMPはある。

「そのタレント能力は本当にマジックキャスターだけなのか？俺からはそういう力を感じないのか？」

アルシェは何を言われたのか理解できなかつた。見た目から戦士系であるフエンリルから魔法の力を感じるはずがない。

「いいえ、貴方からは魔法の力は感じない」

「そうなのか」

フエンリルは一つの仮説を立てる。MPを所持しているのに魔法の力を感じずマジックキャスターからは感じる、つまりアルシェの能力は魔法職を納めている者のみの魔法の力を見破ることが出来るという事になる。

これは面白い人間を見つけたと初めて見るタレント能力に興味がわいたフエンリルはさらに色々な事をアルシェに聞いていると

「うちの仲間に何か用？」

ハーフエルフの女が話し掛けてきた

「イミーナ」

名前を呼ばれアルシェを見ると顔色が悪いことに気が付いた。

「ちよつと、アルシェどうしたの!?」

イミーナが睨む、おそらくフエンリルが何か顔色が悪くなるようなことをしたのだろうと思ったのだろう。当たらずとも遠からずだが「どうやらお知り合いの方が来たようですので、俺はこれで失礼します。色々お聞きしたいこともあるのでお話はまた今度にいたしました。それでは」

席を立ち店を出て行こうと歩き出す。

「ちよつと！まつ——」

「違うの！待つてイミーナ！」

アルシエ 出て行こうとするフエンリルに食つて掛かるイミーナを制止する

「あの人は気分の悪くなつた私をここまで連れてきてくれたの」

それを後ろに聞きながらフエンリルは店を出て行く。

モモンガにアルシエという面白いタレント持ちの興味深く良い話が出来たと思いながら

宿屋への帰路の途中でフエンリルはニンブルとばつたり会つてしまつた。

「げ」

「これはウォルフ殿、丁度良い所でお会いできました」

「丁度良い所？何の御用で？」

色々と裏で糸を引いている人物だけにフエンリルは不信感は隠さない、しかしニンブルはそれを意に介さず表情を崩さず話を進める。「明後日の食事会に是非とも出席をして欲しいのです」

「何で？俺堅苦しい食事嫌いなんだけど」

「食事会と言つても堅苦しいものではなくウォルフ殿のチームを入れても8人程度の小さなものです。実は今回中々手に入らない珍しい食材が手に入りまして、それを私の仲間たちで楽しむという食事会なのですが、そこで是非ともウォルフ殿が体験した冒険の話をお聞きしたいのです」

「話と言つてもなあ」

渋るフエンリルにニンブルがトドメの一言を放つ

「ウォルフ殿の舌を満足させる食事をお出ししますので」

満足させる食事、すなわち美味しい食事、それにフエンリルの目が輝いた。

「美味しい食事？」

「ええ帝都の中でも特に腕の良い料理人に作らせますので、そこはご心配なくそれに——」

「参加します。是非とも参加させてください。冒険の話でいいならいぐらでもしましょう」

あまりの変わり様にニンブルは少し引いた

「そ、そうですか、それは良かった。では明後日に迎えを行かせますの

で

「分かった。待ってるよ。それじゃ

「ええそれでは」

ニンブルと別れるとモモンガへの面白い話を忘れて明後日の食事会の事を考え足取り軽く宿屋へと帰つていった。

15話

モモンガから借りた魔法衣装の礼服に身を包んだフエンリルを送り出すネルとクレマンティーヌニンブルが開いた食事会にフエンリル側で参加したのは一人だった。

ルネは帝国がエルフを奴隸と暗黙する国であることから何らかのトラブルの要因となるかもしれないと食事会への参加を断つた。

クレマンティーヌは面倒臭いと拒否した。

以上の理由からフエンリルは一人で行くことになったのだがこれは結果的に正解であつた。

馬車がニンブルの邸宅につき通された部屋にはニンブル側の客は揃っていた。

縦に長い漆黒のテーブルの上座に主人であるニンブル、そこからニンブルを通して裏で暗躍していたであろうジルクニフ、その隣に第五位階魔法を使えるというネルを見に来た帝国の主席宮廷魔法使いであり、帝国魔法省最高責任者であるフルーダーそして帝国四騎士のバジウッドにレイナースと並んでいる。

（そうだよねー、 そう美味しい話がある訳ないよなー）

出て来る料理は非常に旨いものであつたが楽しいものかと言わればそうではなかつた。食事をしながらフエンリルは圧迫面接でも受けている気分だつた。

特にジルクニフは分からぬようにしているのだろうが前にあつた時と同じようにこちらを值踏みするように時折視線が鋭くなる。

食事も終わりユグドラシルでした時の話を軽く混ぜながらかつてした冒険の話をしてみるとフエンリルの鼻にこの世界に来て嗅いだことのある不快な臭いが漂つて來た。その臭いはレイナースから漂つてくる。

「なあ、レイナースさんだけ？」

「あんた、 状態異常受けてる？」

「なんか？」

フエンリルが感じた不快な臭いとは状態異常の臭い、ユグドラシルではアイコンで表示されたがこの世界に来てからはフエンリルは臭いとして感じるようになつた。ただそれが毒なのか呪いなのか詳細は分からぬ同じ不快な臭いとして感じる。

「は？」

状態異常の言葉にフエンリル以外の人間たちの空気が凍つた。

レイナースは顔の右半分が膿を分泌する歪んだものになる呪いを受けている。そのせいで人生を狂わされた。そしてそれを指摘されることを何よりも嫌う、指摘してきた相手を殺したくなるほどに

それを知っているフエンリル以外の人間は不味いことになつたと対処をしなければウォルフを殺す前に、だがそれよりも早くレイナースの殺意がふくれ爆発しそうになつた時

「状態異常が何なのか分からぬきや、対処できぬだろ？」

一瞬理解できなかつた。だが言葉の意味が分かつた時レイナースの破裂しそうな殺意は急速に萎んでいつた。

「は？・・・対処？・・・治せるの？」

「ん？だから状態異常が何なのか分からぬと対処できぬだろ？まあ治せるかどうかは知らないけど、そつちに行つても？」

レイナースは頷いた。何度も希望を絶望に替えられたが希望にすがらずにはいられない。それに話を聞いた限りでは様々な冒険を経験してきた身だ。もしかしたら何か自分の知らない未知の解呪方法や薬を持っているのかもしれない。

フエンリルがレイナースの元へ行き呪いを受けた顔を見る。それを特に興味深く見るのは魔法の深淵を見たいフルーダと治されては困るジルクニフだ。

特にジルクニフはレイナースの呪いを解くすべを見つける条件で四騎士の一角を担わせている。ゆえにレイナース個人には皇帝への忠誠心は無い、利害の一致だけでの関係だ。もしここで本当に治されてしまえばレイナースは簡単に四騎士を降りてしまうだろう。そうなると帝国の威信に関わる事になる。

(こんなのは初めて見る)

ユグドラシルでの呪いの効果は受けるダメージの増加とHP回復アイテムの使用不可だつたが、今見ているような姿を変質させるものは見たことが無い、これにユグドラシルのアイテムが効くのだろうか、モモンガの話ではポーションや角笛などのアイテムは問題なく使えたようだが

「どうでしようか？治りますか？」

助けを求める、すがるようなレイナースの目に、フエンリルは息を一つ吐くとジャケットの内ポケットから一つの小瓶を取り出した。

ネルに何か毒を盛られた時様にと念のために持たされた菱形の小瓶には緻密な細工が施され中には薄い紫色の液体が入っている。ユグドラシルのアイテムで全ての状態異常を回復する万能靈薬だ。万能靈薬と名はついているがユグドラシルでは極ありふれたアイテムの一つに過ぎない。

「これはあらゆる異常を正常に戻すとされる薬だ。これを使えば治るかもしれない」

レイナースの望んだ希望が目の前に出された。

呪いを解く方法を探していたレイナースは探れば探る程、自身が受けている呪いが強力で解呪が難しいことを嫌と思い知らされた。ゆえにこの呪いを解呪することが出来るほどのアイテムがどれほど希少なのかも分かる。

だがレイナース以上に興味を示したのはフルーダだ。

「それを見せてくれないだろうか？あなたの言う通りのものであれば大変興味深い」

「ええ良いですよ。マジックキャスターなら鑑定の魔法が使えるはずだ」

フルーダへと手渡す。鑑定の魔法を使いアイテムを調べると確かにフェンリルのいう通りの効果があることが分かった。

「これは凄い！まさか伝説とされるアイテムをこの目で見ることが出来ることは！」

フルーダはそれに興奮した。あらゆる状態異常を回復する魔法アイテムなど見たことが無い。呪いと一口に言つても効果は千差万

別だ。レイナースの様に体の一部を変質させるものから対象者を徐々に弱らせ命を奪うものなどいくつもの種類がある。解呪を行う者はその呪いを調べ、それに適した解呪を行わなければならぬし下手に手を出そうものなら呪いは進行し最悪、受けた者が死に至る。それを種類も選ばず解呪するなど古い伝承に神人が持っていたとされるあらゆる病を癒すとされるアイテムと酷似したものいやそのものを今この手に持つている。

フールーダの異常なまでの興奮にジルクニフが内心で舌打ちする。フールーダのお墨付きを得たとなればレイナースは何をしてでも靈薬を得ようとする。

それはジルクニフの恐れる四騎士の脱退に繋がる。何とかそれは阻止しなければ

フエンリルはフールーダの異常事態とアイテムの評価に驚いていた。

(え、ステータス回復のアイテムつて普通じゃないの?)

「こ、このお爺ちゃんのお墨付きを得たわけだけど……」

フエンリルは何となくだが、アイテムを渡すのは不味いことなどと周りの雰囲気を察した。

「なあ、お爺ちゃんこれつてどれくらい価値がある? ……お爺ちゃん?
?お爺ちゃん!」

穴が開きそうなほどアイテムを見ているお爺ちゃん呼ばわりされていることにも興奮のあまり気付かないフールーダはこれの価値を考えた。

「そうだのう、あらゆる病を癒す伝説の靈薬とすれば……金貨で5000枚いやそれ以上じやな、どうじやその二倍を出すからこれを譲つてくれんか?」

せいぜい金貨10枚にでもなれば良いかと思つて出したアイテムが帝国魔法省最高責任者に伝説の靈薬とされ、まだいくつもストックのあるなんてことのないアイテム一つに金貨1万枚、大変魅力ある提案だ。そして靈薬を出した事を後悔した。

「駄目だ。先に交渉しているのはレイナースさんだ。こつちが終わつ

てないのにそつちと交渉は出来ない、だからさつきの話は聞かなかつたことにするよ。でどうする？」

名残惜しそうになかなか返さないフールーダから奪うように靈薬を取り返す。

レイナースの希望は潰えていなかつた。フールーダのお墨付きを得た伝説の靈薬だ、これを逃せばいつになるか分からぬ解呪方法をまた探さなければならぬ。それは嫌だ。

だが何を出すかだ。フールーダの提案を聞かなかつたことにはしてくれたが金貨1万枚の提案を超えるものを出さなければならない。（何がある、私には何が出せる）

金は解呪方法探しで使つてしまつてかき集めたところで金貨500にも届かない、靈薬に並ぶアイテムも所有していない、ならば何がある、自分には何がある。そう考えた時、フェンリルが何をしている人間なのか思い出した。

冒険者をやつている。ならば力のある仲間が欲しいはずだ。レイナースには帝国四騎士の一人という申し分ない名がある。それに実力ならば冒険者のオリハルコン級に相当する上、四騎士の中で最も攻撃力がある。

これが自分に出せる最大のものだ。

「私を貴方のチームに入れて、腕には自信がある。そして金貨で1万枚分になるまで私の取り分の半分を貴方に収める」

ジルクニフの恐れていた事態になつた。

冒険者ならレイナースの申し出を断る理由など無い、実力もそうだが見た目の美貌も相当なものだそれだけでも男なら断らない。これで四騎士の一角は崩れ、帝国の暴力としての力が大きく削がれてしまう。

これだけは阻止しなければならない、いつそのこと靈薬を床に叩きつけて壊してやりたい気分だ、したが最後怒り狂つたレイナースに殺されてしまうだろうが

だがジルクニフが策を考え付く前にレイナースの提案はフェンリルに拒絶されてしまった。

「いや、それは出来ないよ」

「な、なぜ!?」

レイナース、いやフエンリル以外の全員が理解できなかつた。冒険者としてレイナース程の実力を持つ者を仲間に出来る事は戦力の増強としてみるなら最高の条件だ。

「仲間ならすでに一人いるから」

「そんな・・・そうだ！私の身体も自由にしていい！」

「そんなことしたら！俺が一人に殺される！」

もちろんフエンリルが殺される事など今のところ無いが絶対じや無い、嫉妬というものは男でも女でも恐ろしいもしもこの条件を飲んで仲間にしたことが知られたら嫉妬に狂つた二人がレイナースを殺してしまうかもしねれない。

レイナースの万策が尽きた。もう何も出せるものが無い。希望がこの手から滑り落ちたそう思つた時レイナースの目から呪いを受けた時に枯れ果てたはずの涙が零れた。

それを見たフエンリルが一つ息を吐いた。

「分かつたよ。さつきの条件は聞かなかつた事にするからこれはレイナースさん、貴方に渡すよ」

フエンリルにはこの世界に来て出来た弱点がある。正確には言うなら人の姿をしていてる時に出来た弱点だが、それは女の涙だ。なぜか罪悪感が胸に重く圧し掛かってくる。

「どうして？私は貴方の満足するものを差し出していない」

「俺が勝手にアンタを治すと言つてしまつたから、それにまだ効果が出るとは限らない。後はそうだな、女が涙を流してるんだ。なら男はそれを止めるべきだ」

格好つけてはいるが今吐いた臭い言葉は昔見た映画か何かの受け売りの言葉だ。臭すぎて現実の世界なら笑い飛ばされるとこだ、現にフエンリルは全員に背を向け顔が赤くなつてているのを隠している。(臭すぎるだろ俺！なんだよ今のセリフ！ヤバい恥ずかしい、恥ずかしすぎる。帰りたい、いやもう帰る)

心中でもだえ苦しむフエンリル、しかしレイナースの心には響い

ていた。

四騎士としての立場から表向きには敬意を払われているが裏では顔に受けた呪いから怪物扱いされている。そんな自分が女性として扱われるのは久しぶりだ。

鼓動が速くなる。

身体が熱くなる。

これは恋だと感じるレイナースが前にフェンリルが帰ると言い出した。

「帰るよ。食事は美味しかった。見送りとかはいいから、それじや」矢継ぎ早に言うと引き留める間もなく部屋を出て行つた。

「・・・ウォルフ様・・・」

恋する乙女になつたレイナースが愛する男の名を呟く、今まで見た事のなかつた姿にニンブルとバジウッドは戸惑い、フルーダはレイナースの手にある万能靈薬にしか興味は無く、ジルクニフは恋煩いとなつたレイナースを利用できいかと考えていた。

15. 5話

フェンリルを送り出してから1時間ほど経ったころ、ネルは夕食を食べ終え部屋に戻るとそこには果実酒を飲むクレマンティーヌがいた。

それを見たネルはフェンリルの前では見せない心底嫌そうな顔をした。フェンリルが仲間として迎え入れてから数か月経つたが未だにネルはクレマンティーヌが嫌いだ。

敬愛する主に気安く抱き着くのが嫌いだ。

フェンちゃんなど気安く呼ぶのが嫌いだ。

ネルがクレマンティーヌを嫌いな理由を上げればきりがないほどに嫌いだ。

そしてそれはクレマンティーヌも同じことだつた。

「アンタさあ、酒が不味くなるからその顔やめてくんない」

「あなたに良い顔をする理由がありませんから」

「はあ、まあいいや、丁度いい機会だからちよつとこつちきて」

「なぜ？あなたの近くに？」

「私だつてさあ、好きで言つてんじゃないの、フェンちゃんの為なの！」

フェンリルの為と言われればネルは従うしかない、フェンリルにして意味の無い嘘を吐くクレマンティーヌではない事を知つてingからだ。渋々ではあるが体面の椅子に座る。

「それでマスターの為とは何でしようか？」

「アンタ私の事嫌いでしょ、私もアンタの事嫌いだし」

「当然です」

「でもさ、それじやダメじゃない？」

「ダメ？なにがですか？」

クレマンティーヌはネルの察しの悪さに頭痛がしてくる思いだつた。フェンリルに仲良くしろと言われているのに当事者同士が一切歩み寄りを見せないのだ。相手の事など一切考えないクレマンティーヌだが仲の悪さを理由にフェンリルに捨てられるのだけはご

免被る。

「だから！仲良くしろって言われてるのに仲が悪いこと！このままだといずれ捨てられるよ」

「捨てられる？まさかそんな事あり得ません」「一度聞いてみたかったんだけどさ、アンタのその自信はどうからくるわけ？」

なぜネルはフエンリルに捨てられることを恐れないのか不思議だつた。いやそもそも捨てられるなど考えていないのかもしない。「自信？そんなものマスター、フエンリル様にそうあれと生まれた私に今さらというものです」

クレマンティーヌは頭痛がしてくる。やはりネルは絶対に自分は捨てられないと思っている。何とも危険な考えだ。神と崇めるフエンリルとて心を持ち生きている限り心変わりが絶対に起きないという保証はないというのに。

「アンタさあ、本気でそれ思っているなら絶対捨てられる。今は良くてもあと何年かすれば絶対に捨てられる。私としては良いんだけどさ、アンタの巻き添えを喰らうのは絶対に嫌！」

「あなたがそうでも、私が捨てられるなどそんな事あり得ません」

話を聞いても自分の意見を曲げないネルにクレマンティーヌは腹が立つた。

「私たちがいがみ合っている間に他の女が近寄ってきたらどうすんのさ！フエンちゃんはモテるからね！この前のマジックキヤスターも絶対に惚れて来るよ。もしかしたら私たちがいがみ合つてる内にを作つて、その女に夢中になつて捨てられるかもしれない。アンタそれで良いの？私ら以外にフエンちゃんの傍に女が居て良いの？どうなの？私は絶対に嫌だからね！」

そんなもののネルも絶対に許せない、クレマンティーヌが嫌いなのは変わらないがこれ以上フエンリルの寵愛を受ける敵を増やすわけにはいかない。

「分かりました。あなたといがみ合い続けるのはやめましょ。ですが勘違いしないでください、あなたを嫌いな事に変わりはありません

から

「安心して、私もアンタが嫌いなのは変わらないから」

二人はグラスを合わせる、休戦の誓いだ。

それからフエンリルに対してのとある作戦を立てながら何本目かの果実酒を開けた頃、フエンリルが帰ってきた。

「ただいまー」

フエンリルが部屋に入ると酒の匂いが押し寄せてきた。

「うつ

「おかえり！」フエンリルにグラスを掲げ迎えるクレマンティーヌ、その顔は紅くなっている。

「おかえりなさい」ネルはいつもと変わらず迎えてくれたがその手にはなみなみと酒の入ったグラスがテーブルの上と下には幾つもの酒瓶が並び、そのどれもが空になつた物ばかりだ。どうやらこの前購入した酒をほとんど飲んでしまつたようだ。

「あれ、なんかフエンちゃん暗くない？なに晩餐会の食事美味しくなかつた？」

「食事は美味かつたよ・・・そこでさ」

フエンリルは全てを話した。レイナースという呪いを受けた女性に万能靈薬を上げた事、そして対価を受け取り忘れた事、その万能靈薬がこの世界では伝説的アイテムとして興味を持たれたこと。

モモンガが聞いた後者の問題を気にするだろうが二人は違つた。レイナースの事が気になつた。

「フエンちゃんは何でその女にアイテム上げようと思つたの？」

「何でつて、変な臭いが気になつたからで――」

「本当にそれだけ？」

クレマンティーヌが酒臭い顔をフエンリルに近づけた。

「それだけって――」

「その女が綺麗だつたからとかではなく？」

今度はネルが迫つてきた。

「いや、そんな下心は無いよ・・・綺麗だつたけど・・・いやでも――

」

「そこに座りなさい」

眼の座つた二人が指したのは床だ。

これ以上女を近づけさせない誓いを立てて数時間も経たないうちに女の気配を作ってきたフエンリルに二人は初めてのタッグを組んだ。

その迫力にフエンリルは何も言わず素直に床に正座した。

この日の説教は一人に酒が入っていたこともあり深夜には終わつたが精神的ダメージは今までで一番だった。

ニンブル邸

フエンリルが去った後、レイナースはジルクニフ達に背を向け、小瓶に入つた万能靈薬の中身を飲み干す。

味はいかにも薬という苦みを感じた。今のところ身体に異変は無い、すると呪いを受けた顔右半分が熱くなり青く幻想的な淡い光に包まれた。

顔の熱と淡い光が消えると持つていた手鏡を恐る恐る覗き見ると、醜くおぞましい歪んだ呪いが消えていた。鏡に映る自分の顔、どれ程この時を待つたのかわからない

「呪いが……解けた……」

いとも簡単に消えた事が信じられないと念入りに顔を見るが最初からそんなものなど無かつたかのように滲み一つない。本当に消えたのだと確信すると自然と両目から涙が零れた。

ジルクニフがニンブルとバジウッドに目配せするとフルーダが動き出す前に抑え、ニンブルが何やら耳打ちすると大人しく部屋の外へと出て行つた。

「良かつたなレイナース呪いが解けて、だがどうする? ウォルフ殿にお前は何を返すのだ?」

そうレイナースは返さなければならない、待ち望んでいた時をくれた恩を、だが仲間になる事は断られた。金もフルーダが提示した金

額など持つていない。

「そこでだ。金なら私がお前に貸そう、お前は帝国四騎士として変わらず働き支払う給金から返してくれればいい、お前の今までの働きから利子などは取らぬとしよう」

「ありがとうございます。陛下」

これでジルクニフはレイナースへ新しい恩を売る事が出来た。しかしまだ完全ではない、貸した金をレイナースはウォルフへと支払うだろう、だが帝国四騎士として帝国に残るとは限らない、借金を踏み倒してどこかへと逃げる可能性が全く無いとは言い切れないとジルクニフは考えているからだ。

だから新しい楔を打たなければならぬ。

「だが、それでウォルフ殿は満足するのだろうか？」

「満足？」

「そうだ。伝説とまでされる靈薬を何の見返りも保証もなくお前に渡すような優しい人間に、金だけを払つてそれでお前は良いのか？それでお前の心は伝わるのか？」

ジルクニフの言う通りだ。金だけを支払つて終わりにしてしまうそれは嫌だ、自分の心に生まれた恋いや愛をウォルフに伝えなれば、仲間に女が二人いるというだから言葉だけではなく行動で伝えなければ

「陛下のおっしゃる通り、きっとあの方を金だけでは満足させられないでしよう。私の気持ちを伝えるには金以上の何かをあの方へ差し上げなければ」

ジルクニフは心でほくそ笑む。これでレイナースはウォルフが帝國にいる限りどこへも行かぬであろう、そしてレイナースを利用してウォルフを帝国へ根付かせる。

二人を結婚させるのもいい、そうしてレイナースを帝国貴族として復帰させウォルフに爵位をくれてやろう、仲間にダークエルフと義姉がいるという事だが何の問題もない貴族に妻を持つ者は多いし、義姉には良い縁談を紹介すれば良い、さらに強い父母から生まれる子は将来帝国の役に立つことだろう。

その為に幾つもの策を弄さねばとジルクニフは頭脳を働かせる。これによりフェンリルの悩みが多くなっていくことになる。

帝国の夜空には満月が浮かんでいたがフエンリルがいるカツツエ平野はアンデッド反応を持つ薄い霧に覆われている為に朧月の様に見えた。

この地は赤茶けたさから血染めの大地などと呼称され、また有名なアンデッドの多発地帯である為、昼間でも軍や冒険者による討伐以外では好き好んで近づこうとする者は無く、ましてアンデッドの行動が活性化する深夜となれば死にたがりかズーラーノーンを代表とする怪しげな者以外は現れる事は無い。

ゆえにフエンリルは偽装を解き本来の姿へと戻っていた。
真っ白な毛並みに覆われた筋骨隆々な巨躯に装備されている腕甲や脚甲、胸当ては黄金に輝き、物理無効などを代表するダメージ無効系は付与されていないが伝説級アイテムとして十分な性能を持つ装備品で身を固めている。

人の姿を取っている時は僅かな窮屈感があつたが本来の狼獣人になつているフエンリルはその窮屈さから解放された大きく体を伸ばした。

冒険者として人の姿を取るようになつてから数か月ぶりに戻った身体からはパキパキと関節から音が聞こえた。

固くなつた筋肉をほぐす様にストレッチを入れに行つと

「良し！少し暴れてくる。ネルはどうする？」

フエンリルの傍に控えていたネルに声を掛けた。

「私も久しぶりに全力を出してみようかと思います」とにこやかに答えた。

「そうか、^{エレメンタルウルブス}『四魔狼召喚』」

世界を喰らう魔狼のスキルを発動させると大型の狼が四匹現れた。

大きさはどれも成人男性と同じぐらいだがそれぞれの属性を現す様に体色など違う箇所が見られた。

紅く燃える盛る体毛を持つ火炎魔狼

身に纏う風と翡翠色の体毛を持つ暴風魔狼

フレイムウルフ
ガイルウルフ

真っ白な氷の彫刻のような水晶魔狼
渴き荒れた大地を思わせる荒地魔狼

いざれもユグドラシルではLV40程度のモンスターだ。

「ネルに預ける。何かあつた場合コイツらがお前を守り、俺が来るまでの時間を稼いでくれるはずだ」

フエンリルが四魔狼に頭の中でネルを守れと命令する。主人に命を受けネルの元へゆつくりと歩み寄る。

傍に来た水晶魔狼の身体をネルが撫でるとひやりと冷たい感触が手のひらから伝わってくる。

「ありがとうございます」

「それじゃ行つてくる」

そう言い残しフエンリルは自分が暴れても害の出ない場所へ行くためネルの元を離れた。その姿はまるで吹き抜ける突風のようだった。

日が昇るまで約3時間といつたところだろう、存分に暴れるには十分な時間だ。

「いつてらつしやいませ……さて一足先にこちらは始めさせていただくとしましょう」

深々と下げられた頭を上げるとネルの目が怪しく光る。その視線の先にはスケルトンなどのアンデッドの群れが迫つて来ていた。

「可哀そななどと思う事などありませんが、お前達には私の憂き晴らしに付き合つてもらいましょう」

ネルは苛立つっていた。この世界に来て、敬愛する主人と話をすることが出来たのは良かつたがまさか虫が主人の周りを飛び回るとはしかも一匹増える可能性があるとは思わなかつた。

何よりもそうあれと生み出されてなお未だ寵愛を受けられない事がネルの不満であつた。

「炎の雨」

強く握られた杖の切つ先をアンデッドの群れに向ける。杖の先に小さな火がが出現した。火は燃え盛り炎となり渦巻き球状となり周囲に熱を放つ極小の太陽となつた。

「踊れ」

魔法がアンデッドの群れの上空に放たれると火球が破裂した。

光が周囲を昼間の様に照らし出すとアンデッドの群れに火の雨が降り注ぐ、もがき苦しむさまは舞踏者が燃えるドレスを纏い踊り狂うようでの舞踏会は常人であれば目を背けるような地獄の景色そのものだつた。

主催者である紅い炎に照らされたネルはまるで観劇を楽しむ観客の様に狂気染みた笑みを浮かべていた。

「……までくれば大丈夫かな？」

この世界に来て初めて全力で走つたのでどれ位距離が離れたのか分からぬが十分な距離を取れたと思う。

すると後方から光が走りそれから爆音が轟いた。それがネルの魔法によつて起こしたものだとフエンリルは分かつた。

こちらも始めるかとアイテムボックスから丸い陶器で出来たアイテムを一つ取り出す。死靈香、ユグドラシルで使用するとアンデッド系モンスターを大量にPOPする、経験値稼ぎやクラスの特定条件をクリアするために使うアイテムだ。

死靈香を握り潰すと中から紫色の煙が立ち昇り周囲に溶け込んだ。するとどこからともなく怨嗟に満ちた声が響いてくる、それも一つや二つではない恐ろしいことに慣れているはずの軍人や冒險者でも聞けばその恐ろしさに震え上がるだろう大量の声だ。

四方八方360度見渡す限り、大小様々なアンデッド系モンスターが大地から吐き出され津波のように押し寄せてきた。

歴戦の冒險者や軍隊でも死を覚悟するだろう、しかしフエンリルは笑つた。耳まで裂けた口を歪ませ鋭く尖つたナイフの様な牙を？き出しにして笑つたのだ。

心が躍る。これだ。LV差はこちらにあるだが戦力差では圧倒的な分の悪さ、この絶望的な状況、久しく忘れていた身がすぐむような

思い、高揚する。

心の赴くまま暴れたい、だがフェンリルは頭を振るい自分を諫める。

「ダメだダメだ」

そうフェンリルはここに自らのモンスターとしての性質を真に理解し自戒する為にきた。

帝国に来て以来、失態を何度も犯した。皇帝に目をつけられた件ではモモンガにも迷惑を掛け、さらに自分ではなんてことの無いアイテムだと思ったものがこの世界では伝説級アイテムとされ、それを上げてしまつた。

この世界に来て、元の世界にはなかつた自由を目の前に自分は浮かれていた。

自分の迂闊な行動が友に迷惑を掛けた。自分の望む自由は己が欲望のままに行動するという無責任な自由ではない、己が心を誰にも縛られない心の自由であつたはず、昔見たマンガの水の心の話を思い出す。

状況に合わせていかなる姿にも変わる”水”

あらゆる物を映し、あらゆる物を呑み込む

されど常にその本質は変わることはない

それが水

怒りからも憎しみからも解き放たれた

“心の自由”

人間からモンスターになつてからどうも行動が雑になつてしまつている。人間の時とは比べ物にならないほどの力、反射神経、耐久力、五感、それらが相まって、この世界での絶対的強者としての立場、モンスターの身体に心が引っ張られ自分を見失つていた。自分に言い聞かせていた水の心を忘れるほどに

現状、味方であるアインズ・ウール・ゴウンを除けば敵はない。だがそれはあくまでも今は確認していないというだけでいつ遭遇するか分からぬ、それに備えてこの身体での戦い方をもう一度見直す必要がある

息を深く吸い、吐き出す。

昂る戦意を静め、敵を冷静に見極める。

敵の数は甚大、いざれもアンデッド系モンスター、強敵となる者はいない。力に任せるのではなく人間であつた時に学んでいた武道や格闘技を思い出し丁寧に確実に倒す。

跳躍し空へ躍り出ると鷹が地上にいる獲物に襲い掛かるようにアンデッドの群れの中に突っ込んだ。

息を吐くだけで当たる距離、目をつむつて闇雲に手足を出すだけで当たる程、四方八方を敵に囲まれている。

正面のスケルトンの頭部に狙いを定め拳を突き出す。その動きに無駄は無くまた力もかつてのように込められすぎていない、倒すのに必要な分だけが込められ、スケルトンの頭蓋骨だけが砕けた。

そして薙ぎ払うような蹴り、巻き込まれた数体が粉々に砕け散つた。

水の心を取り戻したフェンリルはモンスターの強力無比な力の手綱を握り飼い慣らし、ユグドラシルで最速とされている人狼らしい高速で無駄のない動きから突き出される拳と蹴り、基本に忠実に丁寧に一体また一体と確実に倒していく。

背後からスケルトンソルジャーの鋳びた剣がフェンリルの背中に襲い掛かる。

「破つ！」

それをまるで見えていたかのように身体を捻つてかわすと裏拳でスケルトンソルジャーの頭蓋を碎く。

あとはその繰り返しだった。

静かな水面のような心に敵を映し出し、絶え間なく襲い掛かる剣や槍を掴めぬ水の様にするりとかわし、敵を川に浮かぶ木の葉の様に飲み込んでいく、朝日が昇る頃には動くものはフェンリルの周りにはなく、赤茶色の平坦な大地はアンデッド系モンスターの死体で埋め尽くされ、真白な身体は傷一つなかつた。

「ふ〜」

深く息を吐き出す。何百何千の敵を打倒してなお呼吸に乱れはな

かつた。

その顔は憑き物が落ちた様な晴れやかなものでここに来た時とはまるで違うものになっていた。その時、気配を消しフエンリルの緊張が緩むその瞬間を狙つた二つの凶刃が背後から襲つて來た。

襲撃者には気が緩んだように見えていたが、フエンリルは武道の残心（くつろいでいながらも注意を払っている状態）でいた為、殺さずに取り押さえる事に成功した。

「誰だ？」

取り押さえられている二人は答えない。いや、この状態に理解が追いついていなかつた。

一瞬の事だつた。襲撃者は氣を窺い絶好の機会に奇襲、強力なモンスターといえど対処は不可能なはずの襲撃に成功したと思つた瞬間、地面に叩きつけられ取り押さえられている。殺されるのではなくだ。二人の両腕は後ろ手にフエンリルが手で掴みそのまま背中に重しとして抑えられ身動きは完全に取ることが出来ない。だが睨むことは出来る。

同じ顔立ちからフエンリルは双子の女と判断する。

「くつ」

「動くな、もがけばもがくほど苦しくなるぞ、もう一度聞く、お前たちは誰だ」

なおも二人は答えない。

（口が固いか、当然だな、おそらくこの一人はプロつてやつだな）

そう考えたが二人が答えないのはフエンリルが人間の言葉を話しているからだ。いや人を食料としか見ていない獣人が殺すことなくコンタクトを取ろうとしている。この事が二人をさらに混乱させていた。

フエンリルの耳がピクリと動いた。

「…二人…いや三人か、こつちに近づいてくる三人はお前たちの仲間か？」

人間を超えた聴覚がこちらに走つてくる足音を捉えた。

二人は答えない。だが誰が来ているのかは分かつてゐる、仲間が助

けに来た。

距離にして50mと言つた所だろうかフエンリルの目が薄い霧の向こうに三つの人影を確認した。

影がさらに近づき半分の距離になり仲間の現状を見るところまで来ると二つの影が武器を構えた。

「待て！何かしようとすれば一人を殺す。そのまま大人しくこちらに来い」

一瞬戸惑ったように足を止めたが人影が互いの顔を視認するまでの距離になつた。

一人は煌びやかな装備に身を包んだ金髪の女

二人目は筋肉の塊の女らしき人間

三人目は仮面を付けた小柄な人間・・・いや人間とは違う臭いこれはシャルティアに近い臭いから吸血鬼か

近くに気配を感じない為これで全員なのだろう、全員の装備を見るに野盗などといった輩ではない冒険者、それもかなり上位の冒険者なのだろうがプレートが見えない為にクラスまでは分からぬ。

金髪の女が喋りだした。

「あなたはどうやら人の言葉を理解しているようですね、仲間を開放してくれませんか？そうすればこの場は——」

「その前に聞きたいことがある」

「は？」

「お前達はなぜここにいる？」

「おいおい、モンスターが問答かよ」

筋肉女が嗤つた。その嗤いにフエンリルは顔を歪めた。その瞬間に全員の毛穴という毛穴から汗が噴き出でてきた。フエンリルのわずかに漏れた殺氣に死を直感したのだ。

「どうか、話す気はないと残念だ」

双子を抑えている手に力が入る、締めつけられる腕に双子が苦悶の表情を浮かべる。

それに慌てて金髪が声を上げる。

「待つて！待つて！仲間の非礼をお詫びいたします！申し訳ありません

ん！私達はアダマンタイト級冒険者チーム蒼の薔薇、私はラキュー
ス、彼女はガガーランで仮面の娘はイビルアイ、そしてあなたに押さ
えられているのはティアとティナ、私達が来たのは依頼を受けたから
です！」

ラキュースの謝罪を受けフエンリルが締める力を緩めると双子の
苦悶の表情は解かれた。フエンリルはラキュース達をよく観察する。
初めて見るアダマンタイト級冒険者という事で警戒するがイビルア
イ以外はいや誰一人として脅威となるような力を感じない。

そのモンスターらしからぬ心の奥底まで見抜くような視線にラ
キュース達はこのモンスターが知者であると判断する。

ラキュースはフエンリルを見れば見るほど不思議なモンスターだと
感じる。獣人を何度か見た事はあるがいずれも気性が荒く粗暴で
人間を食料としか見ていないおよそ会話というものが成り立たない
モンスターであつたが目の前にいるフエンリルのような獣人を見た
ことが無い。今まで見た獣人よりも二回りは大きく堂々たる体躯、一
切の汚れの無い真っ白な体毛は神々しく、金に輝く瞳は知に溢れてい
る、身に着けた黄金の装備品は芸術的な細工まで施されている。

「我が名はフエンリル。地をゆらすものにして神々に災いもたらす悪
名高き狼だ。ではその依頼は我を狙つたものか？」

フエンリルの口上は大嘘だ。以前ナザリックの図書館にあつた北
欧神話から引用したものでカツコいいと思いつか使おうと覚えて
いたのだ。

ラキュース達は当然その様なモンスターや魔神は聞いたことが無
い、が世界は広く自分たちが知らないだけで伝説の魔神を超える悪
神であるのかもしれない、もしそうであるならばこの場は穩便に自分
たちの非礼を詫び、情報を生きて持ち帰らなければならない

「いいえ、我々の受けた依頼はカツツエ平野での増えすぎたアンデッ
ド系モンスターの討伐であつてあなたを狙つたものではありません」
フエンリルの機嫌を損なわぬようラキュースは貴族や王族と話す
ような態度で答えた。いやそれ以上の緊張感を持つている。ただそ
こに居るだけなのに激流の様な圧力を感じ背中は冷や汗で濡れてい

る。

「ではなぜ我に手を出した？お前たちは人間の中では相当な強さを持つ者であると思うのだが、我とお前たちの差を測れないのか？」

強者は相手と自分の実力差を見ただけで測ることが出来ると言うが、フエンリルにはラキユース達と戦うとしても今ペナルティで30%のステータスダウンしているが少々面倒であつても負ける事は無いと思つている。ゆえにシャルティアの一件から自分を殺す武器をラキユース達の誰かが持つてゐるのではないかと疑う。

「…それは」

機嫌を損なわぬ為に何と答えればよいのか、ラキユースは俯き何か言いづらそうにしている。

「そうか、だから奇襲を仕掛けてきたのか」

恐らく戦力の比は出来てゐるのだ。ラキユース達も苦戦を強いたとしても勝つことが出来ると見たのだろう、だから少しでも勝率を上げる為に奇襲を仕掛けてきたのかとフエンリルが気付いた時、大口を開けて笑いだした。

「ククックッハハハハ！ そうか、それはすまないこととしたな、捕まってしまった。ああすまない、失礼だつたな、この二人は解放しよう」二人を開放すると、ティアとティナは警戒しながらラキユースの元へ行く

「ごめんボス、下手を打つた」

「貴方たちが無事でよかつたわ」

ラキユースが一人を抱きしめ無事を喜ぶ、しかしそれもつかの間の出来事

「さてと、それではやろうか」

死の宣告が発せられた。

「え？」

やる？ 何を？ ラキユースの頭には疑問符が浮かんだ。フエンリルの言つたことが分からなかつた。いや分かりたくなかつた。

「お前たちは人間で冒険者だろう、モンスターである俺を退治しなければならない。その為にここに来たのだから、だが俺もここで死ぬわ

けにはいかない、ならばお前たちを殺さなければいけないだろ?」

当然の事だつた。ラキュース達は冒険者としてモンスター討伐の依頼を受けてこの地に来た。そして目の前にいるフェンリルはモンスター、討伐の対象であるしかし戦う事は絶対の死を招く、ラキューはこれを全力で阻止しなければならない。生き残る為に

「お待ちください、我々にはもう貴方と争うなどという気はございません」

「争う気はない?なればなぜ我を襲つた。貴様らは我に奇襲を掛ける事で勝てるとみていたのだろう?我が人間如きの奇襲に後れを取ることでも思つていたのであろう?」

まるでフェンリルの身体が何倍にも膨れ上がつていくかのような錯覚がラキュース達を襲つた。その姿はまさにおとぎ話や昔話で聞いた魔神や魔王そのものだつた。

絶望、この心の奥底から湧き上がる絶対的な死への恐怖を名付けるのであればそれがふさわしいだろう。冒険者として様々な危険を味わい潜り抜けてきた、だがそれが安全であつたと思えるほどの絶望が目の前で口を開けている。

生き残る?

戦いを阻止する?
どうやつて?

ラキュースは目の前の絶望から逃れられないことを知つた。

だが同じく絶望しながらもラキュース達とは違つた反応を見せたのはイビルアイ、仮面の下で驚愕という表情を浮かべていた。

(まさか、そんなバカな、これは……)

戦わずとも解る。二百年前に仲間になつた十三英雄のリーダーにも感じた底知れない強さをフェンリルにも感じる。魔神を超える存在をイビルアイは幾つか知つてゐるがこの獣人は

「……ふれいやー……なのか……」

呟いてしまつた。イビルアイは言葉を発してしまつた。発せられたその言葉をフェンリルの耳は逃さなかつた。

(……ふれ……い……や……ふれ……い……や……ふれ……い……)

プレイヤー!?)

もしかしたらこの世界にはプレイヤーという言葉がすでにあるのかも知れない、そしてその言葉はフエンリルの知っている意味とは違うのかも知れない、だが見過ごせないだから確かめなければならぬ。

「何と言つた? お前は今確かにプレイヤーと言つたな、それは俺の知つているプレイヤーか?」

言葉の意味を確かめるまで逃がすわけにはいかない。フエンリルがイビルアイを睨む。

(ネル! すぐに来い! 誰一人逃すな!)

メツセージで呼ばれたネルと四魔狼^{エレメンタルウルブス}がフエンリルの元へ転移していく。突如現れたネル達に気を取られたイビルアイは逃げるタイミングを逃した。

四魔狼^{エレメンタルウルブス}はフエンリルの四人を逃すなという命令を正しく理解し、ラキユース達を逃れる事の出来ないよう唸り声を上げけん制する、これで下手な動きは出来なくなつた。

「良くやつたネル」

「ありがとうございます」

ネルはにこやかに返事を返すがその視線がラキユース達から外れる事は無かつた。

「このまま動きを封じて置け、俺はこの仮面と話がある」

フエンリルがゆつくりとイビルアイの前に陣取る。

「さて、これからするいくつかの質問に正直に答えるのであればお前の仲間は助けよう。分かるな? お前の返答次第で仲間もお前の命も助かるのだ。だがもし嘘をつくようであれば俺の仲間が一人ずつ骨も残らず消す、チャンスは四回だ」

フエンリルにそんな能力は持っていないがイビルアイは頷いて答える。それをフエンリルは理解したと判断する。

「ではまず一つ目だ。プレイヤーという言葉の意味を知つてゐるか?」

イビルアイは頷く。

「それはどういったものだ？」

「ふ、ふれいやーは世界を救つた英雄の事だ」

嘘はついていない、確かにふれいやーは世界の危機を救つた存在だ。

英雄という事にフエンリルは悩む、自分の思うプレイヤーとイビルアイの言うプレイヤーは違うのではないかと

「ではプレイヤーという名前の英雄という事か？」

「違う、ふれいやーという存在だ。見た目は様々だったがいずれも英雄というのにふさわしい力を持っていた」

いずれもという事は複数人いた事になる。

「プレイヤーは今もどこかにいるのか？」

「分からぬ、私の知つてゐるふれいやーはずつと昔に、二百年も前に死んでしまつた」

二百年前という言葉にフエンリルは頭をハンマーで殴られたかのように衝撃を受けた。フエンリルとモモンガ達がこの世界に来たのはユグドラシルのサービス終了がきっかけでそれは数か月前のことだ。

なぜ同じ時代に飛ばされていなかつて、悩み唸つてゐるとフエンリルの目にふとイビルアイが震えていることに気付いた。

「俺が怖いか？」

何を言つてゐるんだとイビルアイは思つた。恐ろしいなどといふ生易しいものではない、逃れられない死が目に見える形で具現化したような存在に狂わないだけで精一杯なのに、自分が怖いかなどといふ返事に困る質問にどう答えて良いのか必死で考える。

すんなりと答えの出てこないイビルアイを見てフエンリルは分かつた。この世界の者にとつて自分が目の前に現れただけで恐怖する存在となつてゐる事を認識した。

「そうか、無駄な事を聞いたな。では他にお前の知つてゐるプレイヤーもしくはそれらしきものの強大な力を持つ存在は他にいるもしくはいたか？」

「し、知らない。が、ふれいやーかどうかは分からぬが六大神や八欲

王というのがいた

六大神も八欲王もこの世界では有名な伝説上の存在でおとぎ話の一つとして語られることが多い。

「ろくたいしん？はちよくおう？」

「スレイン法國が信奉する600年前に現れた神の事だ。彼らは滅びの危機に瀕していた人間種族を救済したんだ。八欲王は500年前に現れ瞬く間に国を滅ぼし世界を支配したが、欲深く互いの物を欲して争い、最後には皆死んでしまったという。あとは知らない」

法國という言葉は聞き覚えがある。確かクレマンティーヌが元々居た国だつたはず、その六大神の事はクレマンティーヌに詳しく聞くとしよう。

「そうか、お前を信用しよう。よく正直に話してくれた質問は以上だ。約束通りお前達の命を助けよう。それと俺達とお前達は会わなかつた。いいな会わなかつた」

フエンリルに気圧され、頷くイビルアイ

「もしお前たち以外の誰から俺達の事が耳に入つたら、どうなるかわかるな？」

殺される。確実にどこに逃げようと殺される。そうイビルアイは理解した。だが仮にイビルアイ達の口から洩れたところですぐに察知することは出来ない。そういう危険性もあるがフエンリルはイビルアイ達を殺すのではなく貴重な情報源として生かすこととした。

(今のところ聞きたい情報もとれた、少なくとも二百年前にはプレイヤーがいた。それも英雄と呼ばれるような奴が)

フエンリルは考察する。英雄と呼ばれるような存在であるならば何らかの形で情報、伝説や歴史として痕跡が残っているはず。そこで前にクレマンティーヌから聞いた口先だけの賢者の話を思い出した。

その賢者はミノタウロスの姿をしていたと言うが口先だけの賢者と呼ばれるようになつた所以を思えば、この世界に元の世界の技術を持ち込もうとしたプレイヤーだと考えることが出来る。冷蔵庫などの外見や機能を知っていてもそれを再現する技術や知識を持つていなかつたのだろう。

(帰つたらクレマンティーヌにもつと話を聞くとしよう)

フェンリルから盛大に腹の音が鳴つた。

「腹が減つたな」

鳴つた腹をさするその姿が人間であれば緊張感を削がれるところであるが、鳴つたのは人間を喰らう獣人、ラキユース達はさうに緊張感が走る。

「あ、腹が減つたから帰るとするか、ネル」

「はいっ！」

フェンリルの元へ駆け寄る

「我がもとへ還れ四魔狼エレメンタルウルブス」

その言葉でラキユース達を威嚇していた元素狼エレメンタルウルブスが光の粒となり

消えた。

「転移門ゲート」

ネルによつて目の前の空間が捻じ曲げられぼつかりと穴を開かれた。

「では、さようなら蒼き薔薇、約束が守られるこつを祈つてゐる。俺は無用な争いを好まない、お前たちが黙つてゐるなら俺は静かにしていよう」

わざと名前を間違えて言い残しフェンリルとネルは虚空の彼方へと消えた。

その場に残された蒼の薔薇一行は一連の出来事を夢、それも悪夢であつたとthoughtいたかった。

自らを地をゆらすものにして神々に災いもたらす悪名高き狼と名乗る獣人の姿をした規格外の化け物、この事を国に伝えなければとラキユースは使命に駆られた。

しかしそこで冷静な自分が問うてくる。

國へ伝えてどうする？

信じるのか？

あの荒唐無稽な化け物の事を？

仮に信じたとしてもどうするのだ？

軍を使つて追い立てるのか？

あの化け物を？

蒼の薔薇を遙かに凌駕する化け物を？

言えない。あんな化け物が存在しているなど伝えることが出来ない。

フエンリルの静寂を破れば

死ぬぞ、大量に兵士が

滅びるぞ、国が

そんな事はさせられない。

こうしてラキュースは口を噤むことを決断し、蒼の薔薇は生涯この

悪夢の出来事を話す事は無かつた。

17話

朝、クレマンティーヌが目覚めリビングへ行くとフェンリルが居た。

「珍しいじやん、フェンちゃんがもう起きてるなんて」

いつもならフェンリルがあくびしながら眠そうにリビングにくるのをクレマンティーヌとネルが迎えるのだが、今朝はしっかりと起きている。

「たまにはこんなこともあるさ、それよりもクレマンティーヌに聞きたいことがある」

「なあに？ もしかして3サイズの事？ やくん朝から元気い？」

身体をくねらせるクレマンティーヌ

「ちよつと真面目な話だよ。お前、法国に居たんだつたよな？」

法国という言葉にクレマンティーヌは不快感を現した。自分の過去を話すのは好きじゃない

「何、その話ならしたくないんだけど」

「そう機嫌を悪くしないでくれ、俺はお前が過去に何をしていようが関係ないと言つただろう。俺が聞きたいのは六大神と八欲王の話さ」「六大神と八欲王？ 何で今さらそんなの子供でも知つてる事じやん」

子供でも知つていてる事なのかとフェンリルは驚く

「俺が聞きたいのはそんな誰でも知つているような話じやないんだ。お前はプレイヤーって知つているか？」

「どこでそれを聞いたの？」

驚いた。何しろ国を挙げて信奉する六大神の正体に関わる事ながら、その存在は法国でも一部の者しか知らない極秘事項、秘密を洩らそうものなら本人とそれを聞いた者を皆殺しにするだろう。

「その感じ、知つているんだな？」

「先に答えて、どうしてプレイヤーのことを知つてているの？」

「俺がそのプレイヤーだと言つたら？」

「まさか・・・」

言葉を失つた。幼い頃から耳にたこができるほど聞かされた六大

神の話、自分がフェンリルに感じた神としての存在は間違いではなかつた。

「はは何それ、本物の神様じゃん」

「そんなどこにいるかもわからない神様とか言われたくないんだけどな、それよりも六大神とかの話を聞きたいんだけど」

「私も真面目に話聞いたりしてたわけじゃないからそんなに詳しくはないけど——」

クレマンティーヌの講義が始まった。

600年前、人類は他種族との生存競争に敗れ絶滅の危機に瀕していた。その時現れた六人のプレイヤーとNPCによつて人類は救済され、現スレイン法国の基礎を創り上げた。これによりプレイヤーは後に六大神と呼ばれNPCは従属神と呼ばれることになる。

それから100年が経つた頃、新たに八人のプレイヤーがこの世界に現れると彼らは瞬く間に国を滅ぼし世界を支配した。その抗争によつて優れた種族は力を落とし人類が滅びを免れる一因ともなつた。

六大神は現れてから100年の内に多くが隠れ最後に残つた一人は八人のプレイヤーによつて殺され、六大神亡き後彼らの従属神は多くが墮落し、魔神と呼ばれ世に災いをもたらす存在となつた。

八人のプレイヤーは欲深く互いの物を欲して争つた挙句、最後には皆死んでしまつたという。この欲深さから彼らは八欲王と呼ばれることになつた。

また八欲王によつて今の魔法が広まつたといふ。

「——つと六大神と八欲王の話はこんなところかな」

「なあ、子孫は残さなかつたのか？ 神とまで呼ばれる強力な力を持つ存在であるならば子孫を残そうとするもんだと思うんだけど？」

「ああ、神人のことね」

「しんじん？」

「神の力を覚醒させた人つてこと」

面白くなさそうにクレマンティーヌは話始めた。スレイン法国は六大神の血を引き力を覚醒させた者を神人と呼び貴重な戦力または次代に血を残す者として隠匿されている。現存しているのは三名で

いざれも六大神が残した遺産を装備しているという。

「それは誰か知っているか？」

「クソッタレを二人ほどね」

クレマンティーヌの心底嫌そうな顔を見て、フエンリルはそれほど嫌いなのかと深く聞くのはやめておいた。

「もういい？」

「OK、分かった。この話は以上だ」

その日の夜、フエンリルはモモンガの元へ一人で訪れていた。蒼の薔薇とクレマンティーヌから聞いたプレイヤーの話を直接する為だ。モモンガの執務室にはいつもなら護衛の為エイトエッジアサシンが何体か控えているのだがフエンリルがモモンガと二人きりで話がしたいと言った為、緊急の要件以外は何者も通すなどの命令を受け今は部屋の外で見張りをしている。

「——という事です」

フエンリルが話した六大神と八欲王の話をモモンガは頭の中で整理する。

六大神をプレイヤーとすれば従属神はNPCやシモベにあたるのであろう、とすれば彼らは自分と同じくギルドホームごと移動してきたと考えられる。とすればスレイン法国がギルドホームそのものもしくは近くにある。

神の遺産を持つのであればおそらくはシャルティアにワールドアイテムを使用した者もスレイン法国の者である可能性が高い、そう考えた瞬間モモンガに怒りが湧いたがすぐに鎮静化されてしまう。

「ふー厄介な相手ですね。スレイン法国は」

「ですです。きっといろいろ情報を持っていると思うんで、モモンガ

さん怒りは抑えてくださいね」

「分かっています。ですがシャルティアへのつけはいざれ必ず払つてもらいます」

再び沸き上がつた怒りを沈める。

「そう言つてもらつて良かつたです。もしスレイン法国に攻め込む！なんて事になつたらどうしようかと」

もしそうなればこの世界に終末が訪れる事になるのではとフエンリルは心配していた。

「そうしたいのはやまやまですけどね、相手はワールドアイテムを持つているかも知れないとすれば、うかつには手が出せませんよ」
フエンリルが言つたように本当は今すぐナザリック全軍を上げてスレイン法国を攻め滅ぼしてやりたいところだ。

「ところでなんで俺がモモンガさんだけに話したと思います？」

確かに守護者達にも共有すべき話はある。だがうかつに話せばシャルティアの一件で守護者達の憎悪は燃え上がりスレイン法国を攻め滅ぼす手段を考えるだろうだが、モモンガが命令しなければ実行する者はいないはず、特にデメリットらしいものが見当たらない。

「なんであつて……なんで？」

「それはですね……神人の事があるからですよ」

「神人？別に……あつ」

プレイヤーの血を引く者がいると分かれば行動に動く者が出てくるかもしれない主に二人、特に片方は頭が良い分、神人の話をしなくても気づく可能性が大きい。

「アルベドは喜ぶでしょうね！」

ニヤニヤと笑うフエンリル

「いやいや、フエンリルさんもですよね！」

抗議する。立場は同じ、いやまだこちらはアルベドやシャルティアに知られていないだけまだまだと

「俺は……その……そんなんですよねえ、二人とも知つてるんでこれからどうなんのかなあ、だからモモンガさんだけに話したんですよ、感謝してください」

「あ、それはどうも」

「でも、まあ、今すぐそういうのが起きるとは思いませんけど、いざれは覚悟決めたほうがいいのかなあ、どう思います?」

「知りませんよ」

ピシヤリと助けの手を絶つモモンガ

「冷たい!モモンガさん冷たい!……ふふつ」

「あつはははははは」

フエンリルとモモンガが笑い合う

「はあ、でどうするんですか?ナザリツクでもスレイン法国の情報を集めますけど」

どうするのか尋ねられ少し考える

「俺はちょっと手を引きます。さすがに国相手じや下手なことできませんから、それに帝国は法国から距離が離れて いますからね、今は帝国で大人しくしてますよ。藪をつついて蛇どころか竜が顔出したら大変ですかね」

その竜をひつ捕まえて殴り殺しそうだ。とモモンガは思つたが口にしなかつた言つたらきつと、その手があつたかと考えを変えてしまいそうちから、しばらく大人しくして いるというのならそれがいい

「それが良いですよ」

「そういえば、ちょっと話変わりますけど、タレントつてあるじゃないですか、あれって神人とかとは違うんですけどね?」

「違うとは?」

「いえね、ユグドラシルのスキルをこつちの世界のタレントに似たものもしくは同一として、タレントを持つ人間はプレイヤーやNPCの血を引いていて、オリジナルが持っていたスキルをランダムに発生させた存在だとすると、その本質は同じではないのかなと思つたんですよ」

「確かに、その疑いはあるかもしませんね」

「あと、タレントの発生つて完全なランダムなんですかね?どつちかの親が持つていたらそのタレントは子に受け継がれないんですかね?もし受け継がれる可能性があるなら母親と父親がタレント同士な

らどちらが引き継がれるのか」

「それなら同質のタレントを持つ者同士の子はそのタレントが強化されるのかということも気になりますね」

堰をきつた様に出て来る異形2匹の疑問は尽きない、後にこの疑問から家畜の品種改良とも悪魔の所業ともいえるタレント保有者の掛け合わせがデミウルゴス主導の元行われることになる。

モモンガに会つてから数日後、フエンリルがリビングで宣言する。「——と、まあそういうわけで、しばらくは帝国でゆっくり冒険者家業をしていこうと思う。何か聞きたいことはないか?」

テーブルを挟んで聞いていたネルとクレマンティーヌは特に質問することもなくうなずくだけだつた。話があると呼ばれ聞かされたのは帝国で冒険者をするという、というよりも今さら何を言つているのだろうかと不思議だつた。

「あのさあ、何で今さら?」

「ん?ああ、いや特に何という訳でもないんだが、まあ決意表明?みたいなものかな」

「ふうん、そうなんだ」

「それだけさ、それよりもだ。この中で料理が出来る奴はいるか?ちなみに俺は無理だ」

元の世界で料理を一度もしたことが無く、この世界に来て何度か自分で挑戦してみたのだがただ材料を不味いものに変えるだけで料理のセンスは壊滅的だ。なにしろ肉を焼くと言う簡単だと思つていたことも出来ず黒焦げにするというありさまだ。

「私にはその様なスキルはありません」

ネルは魔法職を中心に調合師や鍊金術師などで構成した為、アイテムの調合や作成は出来ても料理に関するスキルを持っていない為、こちらも無理だ。

頼みの綱であるクレマンティーヌは

「材料バラバラにするなら得意」

無理だつた。

自分だけなら生肉を食べたところで腹を下すわけもないのだが、せつかく元の世界でも食べる機会の無かつた合成食ではない本物の料理を食いたい。今のところ外食で済ませているが一番金のかかる食費を抑えるためには自分たちで作るほかないのだが悲しいことにこの中に料理を作れるものは誰もいなかつた。

「どうするかなー」

メイドという存在が頭の中に浮かぶが、どうやつて雇うのかが分からぬし何より信用できない他人を身近に置くのは正体がバレるという危険がある。

一番信頼がおけるのはモモンガのナザリックだがメイドを借りるのも悪い気がすると言うのも掃除だけなら週2程度で済むが食事だけはそうはいかない、となるとやはり自力でどうにかしないといけないわけだが

「それなら奴隸でも買えば?」

「奴隸?」

「そこ、帝国には奴隸市場もあるんだし、そこで料理とか掃除の得意なやつ買えばいいんじゃない?」

奴隸かと考える。主人の意思一つで生死を支配され、闘技場で戦う剣奴や主人の夜の相手をする性奴などのどうも悪いイメージばかりが湧いてくるが、そういう者の方が扱いやすいのかもしねれない。

「よし!行つてみるか」

フエンリルがネルとクレマンティースを連れて奴隸市場を歩く。
想像よりも綺麗な場所だとまず思った。

日の差さない濶んだ空気の溜まつた薄汚い場所だとばかり思つていたが、扱う商品が違うだけで普通の市場と何ら変わりがなく、商品である奴隸は自分のプロフィールを書いた羊皮紙を広げていたり自分の売りをアピールしている。

貴族であれば御用商人の口利きや案内を頼むものだがそういった伝手の無いフエンリルは一番大きそうな店に入る。普通であれば飛び入りの客に店の主人が自ら接客することはないが商人の耳は早い、フエンリルを目見るなり皇帝が最近妙に肩入れしている冒険者ウォルフであると見破つたのだ。

フエンリルは店主に欲しい奴隸の条件、料理や掃除などの家事が得

意な者という注文を付けると店主は申し訳なさそうな顔をした。理由は今いる奴隸はいずれも力自慢の者ばかりで家事全般が得意な者がいなかった事だつた。

そしてここでフェンリルは一つの誤算があつた。想像していたような主人によつて生殺与奪可能な奴隸は過去のもので、現在は生きるも死ぬも主人の意思次第といつた扱いは許されておらず、あくまで期間契約の労働者に過ぎない、最低限の権利は帝国法によつて守られている。しかしそく一部の例外が存在するそれは帝国臣民ではない他国から流れてきた人間や法国から流れてくるエルフや捕えられてくる亜人種などである。

「——ですが、お客様は非常に運が良い。本来であれば飛び入りのお客様にはお出しすることのないものですが、皇帝陛下の覚えも明るいウォルフ様であれば特別にお出したいたいものがござります。こちらへどうぞ」

そう店主に案内されたのは店の奥で布が被された大きな四角い檻の様なもの、店主が布を取ると中には女のエルフが一人、檻の柵に病人の様にもたれかかっていた。白く透き通つた肌に金色の長い髪、これぞエルフと言つた姿をしているが最大の特徴である長い耳はいずれも中ほどで切られている。

「つい先日スレイン法國の奴隸商人から仕入れたエルフです。まだ他の方には声を掛けていません。非常に高価なものではございますがいかがでしょうか？」

いかがでしょう、と言われても返事に困る。そもそも良い奴隸かどうかの判断も良く分からない、せいぜい見た感じで容姿が良いのか、元気が良いのか、健康なのか、とかぐらいなものだ。

頃垂れているので横顔しか見えないがエルフは皆そうなのかこのエルフも美形だ。

しかし目に光が無いというよりも澁んでいる。よほど酷い事をされてきたのだろうか生氣も感じない、辛うじて生きてはいるが心が死んでいる。こんな状態の者が使えるのか疑問だ。

店主によればスレイン法國から流れてくるエルフはこのようない状

態が多く、それでも簡単な命令や夜の相手はしてくれるらしい。

だがそれは都合がいいかもしれない、最初の目的からはズレるが一から育てる事が出来ると考えれば、他の奴隸を雇うよりも良いかもしない、なにせ帝国臣民ではないお陰で帝国の法には縛られることのない奴隸が手に入る

「いくらするんだ？」

店主は笑顔で答える。

「金貨で八百枚でござります」

頭の中で日本円に換算する癖があるため少しの間いくらか理解できなかつたが約八千万円だと分かつた瞬間、目が飛び出るかと思った。

手持ちの金をほぼ全て出せば足りない事は無いが今後の生活が非常に貧しいものになる、というよりも成り立たなくなる。だがエルフは滅多に手に入る事が無い希少品、多少の無理をしてでも手に入れておくべきか

そう悩んでいると、エルフがうつろな目をフェンリルに向ける。その表情は生氣の消え失せた死体にも似たものであつた。

見捨てるべきだ。このエルフの境遇に悲哀する事など無い、全ては弱い自分たちのせいだ。他者にすがらねば生きていけぬ弱者などに見向きするな良い奴隸なら他にもいる。わざわざ荷物を背負う必要などない

と、心の中で絶対的強者であるモンスターが囁く。

しかし一方でまだ残っている人間の心が叫ぶ

助けるべきだ。哀れな女をこれから訪れるであろう地獄に落ちる前に手を差し伸べ救う、その力がお前にはある。力ある者が弱者を救つて何が悪い。

せめぎ合う二つの心に迷い、ネルとクレマンティーヌの顔を見る。二人とも檻の中のエルフを見る目は冷たくまるで路傍の石でも見ているかのようにそこには何の感情もない。

フェンリルの視線に気づいたネルがどうしたのか尋ねる
「どうかなさいましたか？」

「違ひはあるが同族が奴隸として売られているからな、今さらだが精神的に悪いんじやないかと思つたんだ」

エルフの奴隸ということで一応同族（エルフとダークエルフの違いはあるが）であるネルの方を気にしたのだが

「御心配には及びません、これと私は全く違うのですから」

同じ、いや同族と考える事すらネルには唾棄すべき考えだ。

創造主に意思を持つてそうあれかしと創りだされた私と、有象無象の一つであるエルフに何の興味が湧くのだろうか

「そうか」

本当に何とも思つていなかつた。

「なに？ それ買うの？」

クレマンティーヌはまるで小さな子供がくだらない玩具を買うのか尋ねる様に聞いてくる。

「それを迷つているんだよ」

「お買いになるのか迷うのはよろしいのですが、ご予算の方はよろしいのですか？」

「あのさあ、最初の条件忘れてない？ 家事出来る奴が欲しくて來たんでしょ？ そいつら料理できるの？ 木の実とか虫とか出されても困るんだけど？」

二人の指摘はもつともだ。予算は遙かにオーバー、このエルフが家事を出来るのかもわからない。普通なら諦めて違う奴隸を探すのだが、帝国では滅多にいらない希少なエルフの奴隸というのがコレクター心をくすぐるのかどうにも諦めきれないでいる。

これはもう当事者であるエルフに聞くしかないか

店主を少しの間ここから引き離せとネルに目配せをする。

「店主殿、これ以外の奴隸も見せていただきたいのですがご案内いただけますか？」

「はい喜んで、どのようなものをお求めで？」

「そうですね、力自慢のものを」

「それならばこちらに」

店主がネルを他の奴隸がいる場所へと案内する。ここを離れたこ

とを確認するとフエンリルがエルフに話し掛けた。

「ひどい目に遭つて来たんだな」

柵の間からエルフの顔に触れようとした瞬間、身体がビクリと怯える様に硬直し顔にははつきりと恐怖が浮かんでいた。

フエンリルが察するにはそれだけで十分だった。触れようとした手を引っ込め強く握りしめた。

「人が憎いか？自分を奴隸に落とした法国が憎いか？」

答えは返つてこない、言葉の意味を理解していないのかとも思ったのだが自分を買うかもしれない相手に不穏な言葉は吐けないのだと理解した。

「お前は何が出来る？よく考えて言え、ここは天国と地獄の狭間だ。お前がここを抜け出して俺の元へ来るか、それとも他の人間に買われるか、だ。ああそうだ、店主の話では見た目の美しさからエルフを買うようなものは性玩具として買うものが多いそうだ。俺は違うが

「・・・あなたを悦ばせる事が」

「そんなことは望んでいない、俺の話を聞いていただろう？それとも変態野郎に買われるのが望みなのか？それなら俺は手を引くが、だがもう一度聞いておこう、料理や掃除なんか家事全般は出来るのか？」

「したことがありません」

「そうか、ならばいらぬな。残念だお前の復讐を手伝つても良いかと考えたのだがな」

復讐、諦めていたもの、もしこの男の言葉が本当であるならば料理や掃除の出来るものを望んでいる、法国の者たちに捕らえられ奴隸として身を落とした私にはこれ以上の希望は無い、この男を逃してはならない

「待つて・・・いえお待ちください。私を買ってくれるのなら貴方の望むことを、今すぐには無理でも必ず料理でも掃除でも覚えます！この命に代えても必ず、必ず貴方を落胆させません！ですからどうかお願いいいたします。私を買ってください」

エルフの濶んだ目に光が僅かだが戻ってきたのをフエンリルは見逃さなかつた。奴隸と言えど自分の意思を持たないものを買う気は

ない。

」

「今、私にはこの命と、あなたへの忠誠を捧げる事しかできません。少し時間は掛かります、ですが必ず必ず貴方が満足するものをお出しいたします！ですからどうがどうか」

「いいだろう、お前の忠誠を受け取り俺はお前を買う事にする。だが身を引き受けるには数日いる。大人しく待てるか？」

「貴方が来るのを心待ちにしています。御主人様」

「良い子だ。では数日後に会おう」

店主に十日以内に支払う事を約束し、その前金として金貨百枚を置いて店を出る。

「よろしかつたのですか？」

先を歩くフエンリルにネルが聞く

「何が」

「あの奴隸の事です。前金として支払った分を差し引いても残り金貨で七百枚、私達の手持ちでは半分も支払えませんよ」

フエンリルの財布とチームとしての財産を管理しているネルの懐には全財産が金貨258枚分があるのみでとても残りの金額を払えるとは思えない。

「大丈夫大丈夫、何とかなるって、それに当てはあるから」

ネルの心配を軽く大丈夫と返事を返す。

「それならよろしいのですが」

フエンリルがその足を向けたのはニンブル邸、魔法アイテムに異常なまでに興味を示したフルーダにつなぎを付けてもらうために、フエンリルはエルフを買う金を魔法アイテムを売る事で作ろうと考えたのだ。

だがそこへ向かう途中、金髪の女に声を掛けられた。

「ウォルフ様、御覚えでしょうか？ レイナースです。先日はありがとうございました」

「ああ、レイナースさん。呪いは解けたようですね」

「ウォルフ様に頂いた貴重な靈薬のおかげでこのように」

右半分を覆っていた金髪をめぐり上げると、長く患っていた顔の右半分を醜く覆っていた呪いはきれいさっぱり消えていた。代わりにレイナースの頬は朱に染まっていた

「それは良かつた。もし効き目が無いようだつたら違う方法を探さなくてはいけなくなると思つていたので」

一言もそうは言つていないので、脳内で自分の為に違う方法を探してくれるというのに変換し、レイナースは天にも昇る気持ちだった。

だが言葉だけでは満足できない、ここで出会った機会をさらに良いものに変えなくては

「ところでウォルフ様はこれからどこへ？もしお暇でしたらお食事でも――」

「すみません。ちょっと要り様で、フールーダさんとつなぎを付けてもらう為に、ニンブルさんの屋敷に行こうかとしているところで」「それでしたら私にお任せください。私も帝国四騎士の一人、明日にでもお会いできるようにいたします」

「本当ですか！いやーそれはありがたい」

渡りに船とはこの事か、あまり特定の人間ばかりに頼るというのも後々面倒になりそうな気もある。

「いえ、この程度の事で靈薬を頂いた恩を御返し出来てはおりませんから、もしそのような用件がございましたらいつでも私にお申し付けください。少しずつでも恩をお返ししていきたいのですがご迷惑でしょうか？」

そうだつた。靈薬を渡しまだ代金というか対価を貰つていなかつた。エルフを買う代金をフールーダではなくレイナースから貰つても良いが、自分に恩を感じているのならばいずれ何かに利用できるのかもしれない、ならばここは金で事を済ますのではなく長く利用させてもらおう。

「いえ、こちらが迷惑を掛けるかもしれませんのがよろしくお願ひします」

差し出された手をレイナースは頬を赤らめ握手する。フェンリル
から向けられた笑顔の裏が恐ろしい獣だとは知らずに